11
三雲岳斗
illustration マニャ子
逃亡の第四真祖
ストライク・ザ・ブラッド
STRIKE THE BLOOD
電撃文庫

11

ストライク・ザ・ブラッド

STRIKE THE BLOOD

逃亡の第四真祖

三雲岳斗

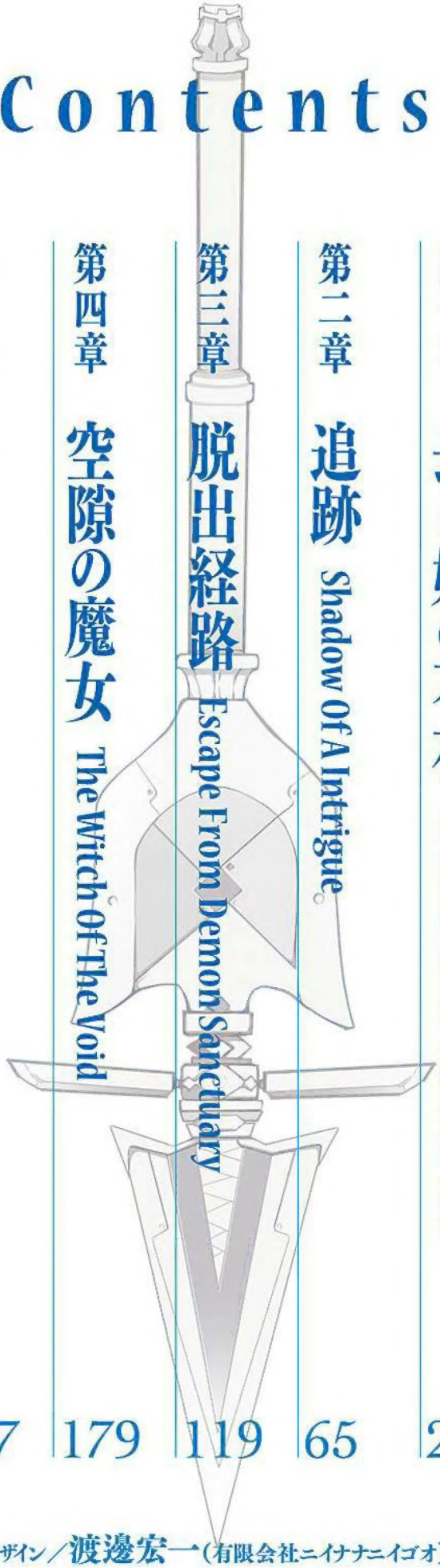
illustration マニャ子

姫柊雪菜［ひめらぎゆきな］
『剣巫』Sword Shaman
獅子王機関の可憐な監視者
暁古城［あかつき こじょう］
『第四真祖』The Fourth Primogenitor
世界最強の〝怠惰な〟吸血鬼

矢瀬基樹［やせもとき］
『過適応者』Hyper - Adapter
陽気な級友、あるいは双貌の道化師
藍羽浅葱［あいばあさぎ］
『電子の女帝』Cyber Empress
華麗で気儘な天才電脳女子高生

妃崎霧葉［きさきぎりは］
『六刃』Six - Blade Priestess
横暴にして美貌の黒き魔槍使い
南宮那月［みなみやなつき］
『空隙の魔女』Witch of the Void
唯我独尊の高貴なる女教師

Contents



序　章　Intro　11

第一章　長き妹の不在　Countdown To The New Year　23

第二章　追跡　Shadow Of A Intrigue　65

第三章　脱出経路　Escape From Demon Sanctuary　119

第四章　空隙の魔女　The Witch Of The Void　179

終　章　Outro　247

あとがき　258

デザイン／渡邊宏一（有限会社ニイナナニイゴオ）

本書（電子版）に掲載されているコンテンツ（ソフトウェア／プログラム／データ／情報を含む）の著作権およびその他の権利は、すべて株式会社KADOKAWAおよび正当な権利を有する第三者に帰属しています。
法律の定めがある場合または権利者の明示的な承諾がある場合を除き、これらのコンテンツを複製・転載、改変・編集、翻案・翻訳、放送・出版、公衆送信（送信可能化を含む）・再配信、販売・頒布、貸与等に使用することはできません。

CONTENTS

ıtro

長き妹の不在　Countdown To The New Year

追跡　Shadow Of A Intrigue

脱出経路　Escape From Demon Sanctuary

空隙の魔女　The Witch Of The Void

ıutro

あとがき

ストライク・ザ・ブラッド

逃亡の第四真祖

11

序章
Intro

「だーかーらっ、こんな時間までどこに行ってたの!?」

古い四輪駆動車の助手席で、スマートフォンを握った暁 凪沙が不機嫌な声を出している。

いつもより声を張り上げ気味なのは、電波状態が良くないせいだろう。フロントガラスに映る景色は、険しい崖と、曲がりくねった細い山道だ。

時刻は午後八時過ぎ。街灯も疎らな県道は暗く、ほかに走っている車も見当たらない。

「は、病院!? なにそれ!? 誰が入院したの!? セレスタ……さん？ 誰？ え……ちょっと今の声……雪菜ちゃんや夏音ちゃんも一緒なの!? ちょっと古城君……!? あ！」

唐突に通話が途切れたスマホの画面を睨んで、凪沙が頬を膨らます。

すぐさま電話をかけ直そうとする凪沙だが、表示されていたのは無情な『圏外』の文字だった。車がトンネルに入ったのだ。

「古城のヤツが、例の中学生ちゃんをウチに連れこんでたのか？」

車のハンドルを握っていた暁牙城が、面白そうな口調で訊いてくる。

クックッと喉を鳴らして笑う父親の横顔を、凪沙はむっつりと睨みつけ、

「そうだよ。もう、古城君の馬鹿！ 昨日から全然連絡が取れなくて心配してたのに！」

「ま、小僧にも色々あったんだろ。アメリカ連合国（CSA）の恐いお姉ちゃんも来てたみたいだしな」

「お姉ちゃん!? なにそれ!? 信じられない。ホントあり得ない。凪沙がちょっと目を離すとすぐこれだから」

牙城のフォローになってないフォローの言葉を聞いて、凪沙が拗ねたように呟いた。

そんな愛娘の横顔に目を細めながら、牙城は車を加速させていく。

カーラジオに合わせて牙城が奏でている鼻歌は、最近流行りのアイドルポップスだ。愛だの恋だのという軽薄な歌詞が、時代遅れのマフィアを思わせるふてぶてしい顔に致命的なまでに似合っていない。しかし、本人がそれを気にしている気配は微塵もなかった。

牙城たちが向かっていたのは、神緒多地区。神奈川県の西端、丹沢山地の奥にある小さな集落だった。湖に周囲を囲まれた、半島状の土地である。

神縄湖と名付けられたその湖は、ダム建設によって生み出された巨大な人造湖だ。釣り人や登山客などで賑わう人気の観光スポットでもある。

そのダム湖を見下ろす西丹沢の山中に、古びた神社が人知れずひっそりと建っている。

正式な神社なのかどうかも定かではない、奇妙な社だ。

そこで巫女たちをまとめている宮司が、牙城の母親、すなわち凪沙の祖母である暁緋沙乃だった。凪沙たちは彼女に会うために、はるばる絃神島から旅して来たのだ。

「思ったより時間かかっちまったな。あの婆あ、まだ生きてっかな」

神社の麓に車を駐めて、牙城は気怠く呟いた。ここから先、境内の社殿までは、長い石段を徒歩で上っていくことになる。

「牙城君、着くのが遅くなるってお祖母ちゃんに連絡しなかったの？　大丈夫？　お祖母ちゃん、怒ってないよねえ……？」

「いいんだよ。年寄りは気が長いんだから少しくらい待たせたって。それに到着が遅れたのは、おまえが東京で買い物したいって言い出したからだろ」

「ええ!?　なにそれ、凪沙のせい!?　牙城君だって夢の国ランドに行きたいって駄々こねて、散々遊びほうけてたよね!?」

「い、いや、あれは父親としての家族サービスだから」

牙城は運転席のドアを開け、逃げ出すように車を降りた。

そしてふと神社の鳥居の方角を見上げて、不愉快そうに眉をひそめる。

「やれやれ……ついてねえな」

「え？」

「凪沙。悪いが、少しここで待っててくれるか？」

「ええっ？　あたし一人で？　ここで？」

周囲の暗闇を見回して、凪沙は心細そうな表情を浮かべた。

「やだなあ、暗いし。寒いし。携帯の電波も入らないし」

「そうは言っても、その荷物を抱えて石段を上るのはさすがに無理だろ。誰か人を呼んできてやるよ。ほら。俺のゲーム機貸してやるから」

「いいよもう。牙城君のゲーム機、ギャルゲーと脱衣麻雀しか入ってないじゃん」

「ンなことねえよ。乳が揺れる格闘ゲームも入ってる。DLCの衣装もコンプ済みだ」

「余計にヤだよ！」

不満顔の凪沙を車内に残し、牙城はボストンバッグ片手に神社へと向かった。

空は真冬の厚い雲に覆われて月も見えない。しかし牙城は危なげのない足取りで、長い石段を上っていく。

世間的にはほとんど知られていない神緒多神社だが、歴史は古く、特に呪術との関わりが深い。宮司である緋紗乃は、かつて何度か大規模な魔導災害の鎮圧に尽力したことがあるらしく、政府の魔導関係機関とも浅からぬ因縁をもっているらしかった。

そのため年末年始ともなれば、緋紗乃を訪ねてくる客は多い。地元の参拝客も皆無ではないので、この時期、緋紗乃や巫女たちは、彼らを迎える準備に追われているはずだ。

しかし牙城が辿り着いた神緒多神社の境内は、ひっそりと静まり返っていた。

本殿や社務所の明かりも消えている。人がいる気配すら感じられない。

周囲を木立に覆われているせいで、境内の中は一層暗く、完全な闇だけが広がっているように感じられた。牙城は参道の途中で足を止め、つまらなそうに息を吐く。

「凪沙を置いてきたのは正解だったな……出てこいよ」

コートの懐に右手を入れて、牙城が闇の奥へと呼びかけた。だが、その声には誰も応えない。

それでも牙城は、境内に隠れている人間がいることを確信していた。

気配とも呼べないかすかな違和感。その中にチリチリと焦げつくような空気が混じっている。世界各地の戦場で何度も味わった感覚だった。殺意。敵だ。

牙城は、ふっ、と獰猛に微笑んで、右手に握っていたものを無造作に投擲する。

それは十四、五メートルほど離れた石灯籠の手前で爆発し、凄まじい爆風を生み出した。

爆薬の衝撃波によって敵を無力化する、攻撃型の手榴弾だ。破片型の手榴弾に比べて殺傷半径は小さいが、そのぶん至近距離での威力は高い。爆発の衝撃で石灯籠が倒れ、背後に隠れていた人影に降りそそぐ。

身を隠す楯として使っていたはずの石灯籠が、牙城の武器として牙を剥いたのだ。よけられるタイミングではないはずだった。

だが、敵を押し潰すはずだった石灯籠の破片は、爆発の衝撃に逆らって、そのまま地面へと落下した。まるで見えない壁に防がれたような、不自然な落ち方だ。

舞い上がった土埃を斬り裂くようにして、隠れていた敵の姿が現れる。

それは年若い制服姿の少女だった。彼女が両手で構えているのは、全金属製の銀色の長剣だ。

「なに……っ!?」

牙城が、バッグから取り出したサブマシンガンを発砲する。装填してあるのはゴム弾だが、直撃すれば、

確実に相手を昏倒させられる凶悪な武装だ。

しかし牙城が放った弾丸は、少女の眼前で弾かれる。少女が一閃した長剣が、不可視の障壁を作り出したのだ。

「疑似空間断裂だと!?　六式重装降魔弓……いや、六式降魔剣・改か……!?」

牙城の銃撃が途絶えた一瞬の隙を衝いて、剣使いの少女が一気に距離を詰めてくる。

少女の剣は、空間そのものを切断した効果を、呪術的に再現する強力な武神具だ。

彼女の剣の軌跡が生み出す空間断層は、あらゆる物理攻撃を無効化する楯として機能する。

そして空間の断層をまとった彼女の剣撃は、あらゆる物質を切断する。牙城のサブマシンガンでは、彼女の剣撃は受け止められない。銃身ごと斬り裂かれてしまうだけだろう。

だが、そんな六式降魔剣・改にも弱点はある。

牙城は左手でマシンガンを握ったまま、開いている右手で新たな手榴弾を放った。それは少女の頭上を越えて、彼女の背後で爆発する。

「くっ！」

少女は牙城に背中を向けて、虚空を薙ぎ払うように長剣を振った。

六式降魔剣・改が生み出す空間断層の効果は一瞬、しかも一方向にしか展開できない。手榴弾の爆風を防ぐために、彼女は牙城に背中を見せるしかなかったのだ。

無防備になった少女の背中へと、牙城がサブマシンガンの銃口を向ける。

しかし引き金を引き絞る前に、牙城の左手を衝撃が襲った。闇の中から飛来してきた矢が、牙城のサブマシンガンを叩き落としたのだ。

境内にそそり立つ神木の樹上に、新たな少女の姿があった。彼女が握っていたのは、銀色に輝く洋弓だ。剣使いの少女を囮にして、彼女が牙城を狙撃したのだ。

「六式降魔弓・改……！　まずい、こいつの能力は……！」

牙城の顔が焦りに歪んだ。その間に弓使いの少女は、新たな矢の準備を終えている。

そして無造作に放たれた第二の矢は、甲高い轟音を放ちながら上空へと飛んだ。矢の先端に取りつけられた鳴り鏑が、呪文詠唱の効果を生み出して、濃密な呪詛を発動させる。六式降魔弓・改は単なる洋弓ではない。広範囲に呪詛を撒き散らす呪術砲台なのだ。

「ちっ、金縛りか――」

呪詛を浴びた牙城の全身が、意思に反して硬直していく。

本来は、敵の歩兵部隊を無力化するために使用する広範囲制圧術式だ。それを自分一人のために使われるとは、さすがの牙城も予想できなかった。なりふり構わない無茶苦茶な相手だ。

しかし、やり口がわかってしまえば、それを破る方法がないわけではない。

かろうじて自由に動く右手首を使って、牙城は新たな手榴弾を頭上へと放った。殺傷力を伴わない閃光音響手榴弾だ。

タイミングを見計らって投げられたその手榴弾は、落下を始める前に上空で爆発する。

凄まじい閃光が夜空を満たした。爆発とともに発生した轟音が大気を震わせ、鳴り鏑矢が生み出した高密度の呪文をかき乱す。

ほぼ同時に、牙城のコートが炎に包まれた。コートの内側に縫いこまれていた、対呪術用の護符が発動したのだ。焼け焦げた布地の表面に、魔術文字が浮き上がり、牙城を金縛りの呪縛から解き放つ。

「六式降魔弓・改の音響魔法陣を、こんな原始的な方法で破るなんて……！」

剣使いの少女が、驚愕に顔を引き攣らせながら牙城に斬りかかる。

牙城は素手のまま彼女に向き直り、うんざりしたように唇の端を吊り上げた。

「ったく、小娘がそんな物騒なもの振り回すんじゃねーよ。お仕置きだ」

「えっ……!?」

少女の斬撃をするりとかわして、牙城はそのまま彼女の懐へと潜りこむ。

彼女の無防備な脇腹が、牙城の前に晒された。牙城の近接格闘技術なら、その一瞬に、致命的な打撃を叩きこむこともできたはずだ。しかし牙城は少女の身体には手を触れず、そのまま彼女の横をすり抜けていく。

「ま、待て……はわっ!?」

通り過ぎた牙城を追撃しようと、少女は瞬時に旋回して、再び剣を構えようとした。

だがその瞬間、がくり、とつんのめったように体勢を崩す。少女の脚に絡みついたなにかが、彼女の自由を奪ったのだ。

それは少女が穿いていたパンツだった。すれ違った一瞬に、牙城が彼女のパンツを引きずり下ろし、自らの下着に脚をとられて、剣使いの少女はその場に転倒する。

「貴様っ、よくも唯里を――」

辱めを受けた剣使いの少女を援護するべく、弓使いの少女が新たな矢をつがえた。

だが、牙城はその前に、地面に落ちていたバッグから新たな武器を取り出している。中折れ単発式の大口径グレネードランチャーだ。

弓を構える少女を目がけて、牙城は容赦なくグレネード弾を撃ちこんだ。

弓使いの少女は表情を変えずに、飛来する弾体へと狙いをつける。グレネード弾を撃ち落とすつもりだったのだ。しかし少女が矢を放つ寸前、そのグレネード弾が勢いよく膨張した。

「なっ!?」

膨張した弾体が、弓使いの少女を呑みこんだ。弾体の正体は粘度の高いトリモチ状の物質だ。

弓使いの少女は、枝から落ちかけた姿勢のまま、樹上に貼りつけられてしまう。ずり落ちてくるスカートを押さえようと必死にもがくが、トリモチ弾の粘着力のせいで、ほとんど身動きさえもままならない。彼女の口から洩れ出したのは、年相応の可愛らしい悲鳴だけだ。

「志緒ちゃん!?」

転倒していた剣使いの少女が、トリモチまみれの仲間に一瞬気を取られる。そんな彼女の鼻先に、牙城は薬剤のスプレーを吹きかけた。強烈な眠気に襲われた少女は、そのまま声も上げずに倒れて意識を失う。

二人が完全に無力化したのを確認して、牙城は空になったスプレー缶を投げ捨てた。

「ったく、お子様が人殺しの道具を振り回すから、そんな目に遭うんだぜ」

悪く思うなよ、と言い訳のように呟いて、牙城は少女が落とした長剣を眺める。牙城はその武器の正体を知っていた。その武器を造り出した組織の名前もだ。

彼女たちが牙城を襲撃してきたことと、神社が無人になっていたこと——それらはおそらく無関係ではないだろう。まずは二人を尋問して、情報を引き出す必要がある。

面倒なことだ、と嘆息しながら、牙城は少女に近づこうとする。

牙城の背後で、凛とした声が響いたのはその直後のことだ。

「偉そうに他人のことを言える立場ですか。未熟者」

「——っ!?」

ぞくり、と全身に戦慄を覚えて、牙城が懐から拳銃を引き抜いた。

そんな牙城の手の中で、拳銃がバラバラに分解する。

「なに!?」

「遅い」

振り返ろうとした牙城の視界が、ぐらり、と揺れた。顎を打たれたのだと気づいたときには、牙城の身体は地面へと叩きつけられていた。

牙城の口から、かはっ、と荒々しい息が洩れた。手脚が痺れて身動きが取れない。

気配すら感じさせる間もなく近づいてきた何者かが、素手で牙城を叩き伏せたのだ。

それでも牙城は、どうにか地面に肘を突いて顔を上げる。

そんな牙城の視界を、眩い光が照らしだした。軍用懐中電灯の輝きだ。光源の数はざっと見ただけでも二十を超えている。逆光の中に浮かび上がったのは、無骨な銃器を構えた迷彩服の集団だった。銃器で武装した兵士の一団が、虚空から溶け出すように現れて神社の境内を包囲しているのだ。

「馬鹿な……なんで、あんたが……!?」

自分の眼前に立つ人影を見上げて、牙城が苦しげな呻きを洩らした。

冷ややかな瞳で牙城を眺めていたのは、胴着をまとった白髪の女性だった。

彼女の右手に握られているのは木製の薙刀。そして彼女の左腕に抱かれているのは、意識をなくして眠っている凪沙だ。

迷彩服の兵士たちが、立ち上がれない牙城に全方位から銃を突きつける。さすがにこの状況での抵抗は無謀だ。牙城はのろのろと両手を上げて、星ひとつ見えない夜空を振り仰いだ。

「くそっ……本気でついてねえ」

白い吐息まじりに牙城が呟く。

こうして暁牙城の里帰りは、思いつく限り最悪の形で幕を開けることになったのだった。

第一章　長き妹の不在

Countdown To The New Year

1

直射日光が降りそそぐ無人の校庭で、ゆらゆらと陽炎が揺れていた。

開け放たれた教室の窓からは、湿気を含んだ生温い風が吹きこんでくる。

たった一人きりで教卓正面の席に座った暁 古城は、難解な英作文の問題を相手に、苦悩の表情を浮かべていた。その額を、大きな汗の滴がひっきりなしに伝い落ちていく。湿った手首にベタベタと張りつく答案用紙が鬱陶しい。

「暑ィ……」

制服の襟元に指をかけながら、古城は弱々しい呟きを洩らした。

窓の外に広がっているのは真夏のように澄んだ青空だ。水平線の片隅には積乱雲が立ち上り、季節外れのセミたちが騒々しく鳴いている。

どうにか最後の問題を解き終えた古城は、汗でべたつくシャーペンを置いて、

「あのさ、那月ちゃん。今日って――」

そう言いかけた古城の眉間が、見えない拳骨でどつかれたように青白い火花を散らした。

たまらず仰け反った古城の姿を、教壇にいた南宮那月が、醒めた目つきで睥睨する。

「このクソ暑くてイライラしてるときに、担任をちゃん付けで呼ぶな。馬鹿者」

「そんな理由で教師が生徒に暴力を振るうのは許されるんですかねえ……!?」

涙目で顔をしかめる古城が、額を押さえて言い返す。アンティーク風の豪華な肘掛け椅子に着座した那月は、冷ややかに鼻を鳴らして古城の抗議を黙殺した。

「あああああああああああああああ」

そんな那月の隣では、メイド服を着た人工生命体の少女が、扇風機の前に座りこんで、なぜか発声練習ごっこをしている。初めて目にする扇風機が、よっぽど興味深かったらしい。結果的に扇風機はアスタルテに独占される形になっているわけだが、そもそも職員室から扇風機を運んできたのも彼女なので、古城が文句を言える立場でもなかった。

「……今日って、いちおう大晦日だよな？」

「たしかにそうだな。あと半日ちょっとで正月だからな」

溜息まじりに質問する古城に、那月が素っ気なく答えてくる。

それを最後まで聞き終える前に、古城はふて腐れたように頬杖を突いて、

「こんな年末のどん詰まりに、なんで俺はこんなところで補習を受けてるんですかね」

「それは無断欠席しまくった挙げ句に、私の授業の追試で赤点を取ってくれたどこかの馬鹿に訊いてみるんだな。アスタルテ、少し手伝ってやれ」

「命令受諾」

那月に命令された人工生命体の少女が、わざわざ手鏡を持って古城の前にやってくる。鏡に映し出された自分の顔を、古城はしばらく無言で眺め、

「って、嫌味か！」

そう言ってアスタルテを追い払う古城。メイド服姿の人工生命体の少女は、再び扇風機の前に戻っていった。

那月は、そのアスタルテが用意したトロピカルアイスティーを美味そうにすすって、

「くだらん文句を垂れている暇があったら、こんな日まで補習につき合ってやってる私に少しは感謝したらどうだ？」

「ああ、まあ、それは感謝してるよ。本当に」

小テストの答案用紙を那月に渡しながら、古城は素直に頭を下げる。

世界最強の吸血鬼の力を、古城が成り行きで受け継ぐことになったのは八カ月前。それ以来、なにかと厄介な事件に巻きこまれまくって、そのたびに古城は出席日数を減らしてきた。那月が貴重な長期休暇を潰して補習授業をしてくれていなければ、今ごろはとっくに留年が決まっていたはずである。

「ふん」

しかし、そんなふうに古城があっさり感謝を口にするとは思っていなかったのか、那月は、少し面喰らったように唇を曲げて、

「まあいい。ところで暁、貴様の父親は今どこにいる？」

「……は？」

那月の唐突な質問に、今度は古城が訝しむ番だった。

古城の父親、暁 牙城は考古学者だ。仕事の関係で一年の大半を海外で過ごしており、絃神島には滅多に帰ってこない。もちろん那月ともほとんど接点はないはずだ。

「なんで那月ちゃんがあいつのことなんか……え？　まさか……」

真っ先に古城の脳裏に浮かんだのは、不倫、という漢字二文字だった。見た目、幼女としか思えない那月だが、自己申告によれば彼女は二十六歳。爛れた大人の恋愛のひとつやふたつ、あってもおかしくない年頃ではある。と、

そんなことを考える古城の頬を、那月は乱暴につねり上げ、

「その目は失礼なことを想像している目だな、暁古城」

「痛！　痛！　──って、まだなんも言ってねェだろ！」

「黙れ。いいから質問に答えろ」

「今は絃神島にはいねェよ。ウチの妹を連れて丹沢の祖母さん家に帰省中！」

那月の容赦ない制裁を受けて、古城は呆気なく口を割った。

ふむ、と那月は、古城を痛めつけていた指から力を抜いて考えこむ。

「あの男にしてはめずらしく、本当のことを言ってたというわけか」

「だから、なんで那月ちゃんがあいつと知り合いなんだよ？」

ヒリヒリと痛む頬を押さえて質問する古城。那月はつまらなそうに息を吐き、

「暁牙城は、前に私の副業を何度も邪魔してくれたからな。まあ、ごく稀に役に立ったことがあったような気がしなくもないが」

「那月ちゃんの仕事を……？　なにやってんだ、あのクソ親父……」

古城が不吉な予感におののきながら呟いた。

教師である那月の副業は、魔導犯罪者の逮捕権を持つ国家攻魔官だ。生徒の安全確保のため、〝魔族特区〟内の教育施設には、攻魔師免許の保有者を一定割合で配置することが義務づけられている。だから攻魔官が教師を兼務しているのは、それほどめずらしいことではない。実際、彩海学園には各学年に一名ずつ、つまり那月以外にも五人の兼業攻魔官が雇われている。

しかし那月の場合は、彼らの中でも少々特殊な立場にいた。なぜなら攻魔官としての実力が突出しているということで、現役で犯罪捜査にも関わっているからだ。

そんな那月が副業中に、牙城と接触していたのだという。つまり魔導犯罪が行われていた現場を、牙城がうろついていたということだ。嫌な予感しかしなかった。

「暁牙城と連絡は取れるのか？」

古城の動揺もお構いなしに、那月が質問を続けてくる。

「それはちょっと難しいんじゃねーかな。あのあたりは携帯の電波も届かないし」

そもそも古城は牙城の携帯の番号を知らないのだが、とりあえずそれは黙っておく。

「田舎なのだな。貴様の祖母が住んでいる土地は」

「まあ、かなり」

真面目な口調で那月に訊かれて、古城は重々しくうなずいた。

「ていうか、急にどうしたんだよ。なにかあいつに用なのか？」

「いや……少し気になっただけだ。なんとなくな」

古城の疑問に、那月が曖昧な答えを返してくる。そのことに古城は思わず身震いして、

「やめてくれよな。こっちまで心配になるだろ。凪沙もあいつと一緒にいるってのに」

「暁凪沙か……そういえばそんなことも言ってたな」

ますます気に入らない、というふうに那月は眉間にしわを寄せた。その呟きで古城は余計に不安を覚える。やはり那月はごく最近、牙城と接触したらしい。

やはり不倫か、と本気で疑念を抱く古城を、那月が不意に半眼で睨みつけてくる。

「まあそれはそれとして、暁古城。なんだこの点数は？」

「え？　なんかヤバい間違いでもあったか？」

採点済みの答案用紙を突きつけられて、古城は戸惑いの表情を浮かべた。赤鉛筆で書かれていたのは、百点満点で六十六点という、可もなく不可もない微妙な点数だ。

「貴様の実力で、こんな高得点が取れるとは思えん。まさか私の監督の目を盗んで不正行為を働いたとでもいうのか……？」

そう言って真剣な眼差しで古城を見つめてくる那月。

「いやこれ、不正が疑われるほどいい点数じゃねーだろ、ちゃんと勉強しとけば、俺だってこれくらいは取れるって」

那月が困惑している理由を理解して、古城は必死に反論する。

見事な赤点だった前回のテストに比べれば、別人かと思えるほどの好成績だが、客観的には高得点というほどではない。せいぜい落第生が人並みになった程度だ。この程度でカンニングを疑われたという事実に、古城のプライドはむしろ傷ついた。

しかし那月が驚く気持ちもわかる。吸血鬼化してからの古城は、勉強どころではなかったし、その状況は今も根本的には変わっていないのだ。

「貴様が補習授業の予習とはな。どういう風の吹き回しだ？」

「いやまあ、俺なりに思うところがあったっていうか……やっぱ授業くらいは真面目に受けておこうかなってさ」

それができなかったヤツのぶんまでな、と古城は声に出さずに呟いた。

一瞬だけ瞼の裏をよぎったのは、いつも怯えたように微笑んでいた金髪の少女の横顔だ。

アヴローラ・フロレスティーナ。

十二番目の〝焔光の夜伯〟――

彼女との思い出を断片的に取り戻して以来、古城の心境には、自分でもよくわからない微妙な変化が生まれている。だからといって古城の置かれた立場が大きく変化したわけでもなく、結局できることといえば、せいぜい小テストの対策をすることくらいだったのだが――

「それに教養は身につけといて損はないだろ。なんつーか、将来のことを考えたらな」

半ば自分に言い聞かせるように、古城は真顔でそう言った。

正直、今もまだ自覚には乏しいのだが、古城はいちおう第四真祖と呼ばれる吸血鬼だ。そして吸血鬼の真祖ということは、永遠に近い寿命が与えられているということになる。

そこで古城の頭を悩ませているのは、職業選択の問題である。

吸血鬼といえども腹は減るし、衣類や住居にも金がかかる。貴族ならぬ一般庶民の子として生まれた吸血鬼としては、働かなければ喰っていけない。広大な領地を持っているディミトリエ・ヴァトラーや、ジャーダ・ククルカンとは違うのだ。だからといって、世界最強の吸血鬼などという馬鹿げた肩書きが、就職活動で有利になるとも思えない。

あれこれ苦悩した末に古城が出した結論が、教養を身につけるというものであった。

不老不死の吸血鬼だからこそ、学歴や知識はあって困るものではないだろう。あとは就職に役立つ資格や、手に職があったりすればさらに望ましい。

もっとも古城とて、那月にそこまで説明するつもりはない。将来喰いっぱぐれがないように真面目に勉強することにした、などと言い出す吸血鬼の真祖がいたら、古城だって馬鹿にする。

「そうか」

しかし那月は、そんな古城の心情を見透かしたように微笑んだ。

この世のすべてを見下したような普段の彼女の冷笑ではない。歳の離れた弟を慈しむような優しい微笑

みだ。初めて目にする那月のそんな柔らかな表情に、古城は目を奪われた。

「……那月ちゃん？」

無意識に呟く古城の額に、那月は無言でデコピンを喰らわせた。さっきまでの美しい微笑みは、いつの間にか幻のように消え去ってしまっている。

「まあいいだろう。いちおう今日の補習は合格にしておいてやる」

「そりゃどうも」

「せいぜいいい年を迎えるんだな」

「うっす」

ズキズキと痛む額を押さえて、古城は投げやりな返事をした。

再び肘掛け椅子に戻って、アイスティーを優雅に味わう那月。アスタルテは相変わらず扇風機の前に鎮座して、「ワ・レ・ワ・レ・ハ……」と宇宙人ごっこを続けている。

そして古城が束の間の解放感に浸りつつ筆記用具を片付けていると、教室のドアが軽やかに開いて、新たな人影が現れた。体育教師の笹崎岬だ。

「終わった？」

スポーティな装いの女教師は、授業の終了を那月に確認し、それから硬直している古城のほうに視線を向けた。慢性的な出席日数不足の古城にとって、受けるべき補習授業の科目はもちろん英語だけではない。

「綺麗にまとまったみたいなところ悪いんだけど、英語の次は体育の補習だったりして。とりあえずマラソン十キロだから、着替えてグラウンドに集合ね」

妙にテンションの高い口調で、岬が古城に笑いかけてくる。

古城は、燦々と輝く真昼の太陽を見上げ、次にその陽射しに灼かれている運動場に目を向けた。太平洋のド真ん中に浮かぶ絃神島は、亜熱帯気候に属する常夏の島だ。たとえ大晦日でも正午近くになれば気温は摂氏三十度に迫る。

そして古城は直射日光に弱い吸血鬼だ。

「……マジか」

迫り来る死の恐怖を覚えつつ、古城が弱々しい呟きを洩らした。

アスタルテが扇風機に向かって奏でる澄んだ声が、青空に吸いこまれるように響いていく。

それから二時間ほどが過ぎて、ようやく補習から解放された古城は、ふらつく足取りでモノレールの駅へと向かっていた。

隣には、黒いギターケースを背負った姫柊雪菜の姿がある。第四真祖の監視役として、古城の補習が終わるのを校内でずっと待っていたのだ。

「あの……大丈夫ですか、先輩？」

虚ろな表情の古城を見上げて、雪菜が心配そうに訊いてくる。

「なんとか、な……ああくそ、本気で干涸らびるかと思った……」

古城は気を取り直すように乱暴に首を振り、力のない笑顔を作ってみせた。

小テストで限界以上に脳細胞を酷使させられた挙げ句の、炎天下のマラソン十キロによって、古城は完全に消耗しきっていた。心身ともに限界だ。徒歩で十五分足らずの駅までの道のりが、異様に遠く感じられる。

「とりあえず水分補給してください。あと、これ。レモンのハチミツ漬けです」

「ああ、サンキュ」

雪菜の手回しのよさに感謝しつつ、古城はスポーツドリンクのボトルとレモンを受け取った。

古城はいちおう世界最強の吸血鬼であり、雪菜は日本政府から派遣されてきた古城の監視役ということになっている。しかし今の古城たちの姿を見て、それを信じる者はいないだろう。どう見ても試合直後の運動部員と、ただの気の利く敏腕マネージャーである。

「悪いな、姫柊。大晦日なのに学校につき合わせてしまって」

わずかに体力が回復したところで、古城があらためて雪菜に謝意を表明した。古城が雪菜についてきてくれと頼んだわけではないのだが、なんだかんだで世話になっているのも事実だ。

「いえ、先輩の監視がわたしの任務ですから」

しかし雪菜は、いつもの生真面目な表情で答えてくる。

相変わらずな雪菜の反応に、古城は思わず苦笑して、

「なんかこうしてると姫柊と会ったばかりのころを思い出すな」

「え……？」

唐突な古城の発言に、雪菜が警戒したように表情を硬くした。制服のスカートの裾を押さえて、古城の

視線を避けるように後ずさる。
「な……なにを思い出してるんですか!?　忘れてくださいってお願いしましたよね!?」
「……え？　あ！」
　爆発的に頬を赤らめている雪菜を見て、古城の顔にも焦りが浮いた。雪菜と初めて遭遇した場所で、彼女のパンツを目撃してしまったことを思い出したのだ。それも短時間に続けて二度も。出会い頭の不幸な事故であった。
「違う！　そっちじゃねえ！」
「そっちってどっちですか!?」
「俺が補習で登校してたときに姫柊と会っただろ、学校で！」
「……そうでしたね。そういえば」
　雪菜がようやく少しだけ警戒を緩めた。古城が彼女とまともに会話を交わしたのは、最初の遭遇の翌日のこと。夏休みが終わる直前だった。その日も古城は一人きりで学校を訪れて、補習授業を受けていたのだ。そして雪菜は中等部の転校生として、そんな古城の前に現れた。
「あんときの姫柊の印象は最悪だったけどな。なんか知らんが、いきなり槍を向けられたり」
「そ、それは先輩の責任だと思うんですけど！　思うんですけど！」
　雪菜がめずらしくムキになって言い返してくる。あのころの刺々しい言動は、雪菜にとってもあまり思い出したくない恥ずかしい記憶らしい。
「だって世界最強の吸血鬼だって聞いてたのに妙に頼りないし、なにを企んでるのかよくわからないし、記憶がないって話も胡散臭いし、いやらしいし……そんな人のことを信用できるわけないじゃないですか！」
「いやらしくねえよ！　あんときパンツ見たのだって完全に不可抗力だっただろ！」
「だからそのことは忘れてください！」
　そう言うと雪菜は、古城を残して早足で駅に向かって歩き出す。やれやれと肩をすくめると、古城は彼女を追いかけた。
　駅に着いてモノレールに乗りこんでも、雪菜は拗ねたように顔を背けたままだ。古城は仕方なく携帯電話を出して、黙々とメールチェックを開始する。
　モノレールの車内は普段よりも空いていた。大晦日ということで通勤客が少ないせいだろう。それでもどことなく浮ついた雰囲気があるのは、やはり年末だからだろうか。
　車内の吊り広告にも、すでに新年の挨拶や、新春初売りの文字などが印刷されている。

「先輩……あの、さっきの話ですけど」

しばらくしてモノレールが動き出したころ、雪菜が怖ず怖ずと口を開いた。古城は、携帯電話の画面を見つめたまま、どこか上の空の口調で答えてくる。

「ん？　ああ、パンツの……」

「違います！」

雪菜が握っていたプラスチック製の吊革が、彼女の握力でミシッと軋んだ。

「さっきは先輩のことを信用できないって言いましたけど、い……今はもうそんなことは思ってないですから」

なけなしの勇気を振り絞るように、緊張した声で雪菜が言う。つい意固地になって古城を責めてしまったことを、密かに気にしていたらしい。

「ああ……うん」

「それはたしかに先輩は危なっかしいままですし、だらしないし、真祖の自覚も足りないし、わたしが少し目を離すとすぐにほかの女の子とベタベタして、どうしようもなくいやらしいのはよくないと思いますけど、だけどちゃんといいところもあるっていうか……」

「おう」

「それはちゃんとわかってますって伝えておこうと思ったんです。この四カ月、ずっと先輩を監視てましたから」

「ん」

古城と目を合わせることができないまま、消え入りそうな声で言い訳を続ける雪菜。しかし古城の反応は淡泊だ。特に満足した様子もなく、雪菜の言葉を聞き流している。

「……って、あの……先輩、聞いてます？」

さすがに不審に思ったのか、雪菜が顔を上げて古城を見た。携帯電話をぼんやりと眺めていた古城は、少し驚いたように目を瞬いて、

「え？　あ、ごめん。なんだって？」

「先輩……！」

古城がまったく自分の話を聞いてなかったことに気づいて、雪菜がムッと顔をしかめる。

「や、悪かったって。ここしばらく凪沙から連絡がないから、ちょっと気になってさ」

「はあ」

慌てて釈明する古城を睨んで、雪菜は深々と息を吐いた。

「ここしばらく……って、先週まで普通に電話してましたよね？」

「そうだけど、一週間も前の話だぜ。祖母さんの実家にもうすぐ着くって連絡があって、それ以来いっさい音沙汰無しだから、さすがに不安になるっていうか」

「凪沙ちゃんの帰省先って、携帯の電波が届かないって言ってませんでしたか？　だとしたら、特に不自然ではない気もしますけど」

「まあな」

至極まっとうな雪菜の指摘に、古城は渋々と同意した。空っぽのメールボックスを最後にもう一度未練がましく確認して、携帯電話をポケットにしまう。

「それにウチの祖母さんは人使い荒いからな。たぶん神社の手伝いでメールしてる暇もないんだと思う」

「だったら、そんなに心配しなくても」

「まあな……」

やはり反論できずにうなずく古城。そもそも中学生の妹が、用もないのに兄にこまめに連絡してくるほうがおかしい、という世間の常識も、いちおう自覚していないわけでもない。

「そういえば姫柊の話はなんだったんだ？」

古城が、気を取り直したように雪菜を正面から見返して訊いた。

「え……!?　あ、いえ、なんでもないんです」

雪菜はギクッと全身を硬くして、勢いよく首を振る。面と向かって質問されると、話しにくい内容だったらしい。

「ふーん」

古城は特に興味も示さず、そう言ってあっさりと会話を打ち切った。

そんな古城の横顔を恨めしそうに睨んで、雪菜は小声でぼそりと呟く。

「先輩の馬鹿……っ」

3

駅前で簡単な昼食を済ませて、古城が自宅に帰り着いたときには、すでに午後三時を回っていた。日付が変わって新年を迎えるまでは、残り九時間弱といったところだ。

エレベーターでマンションの七階に上がって、古城は自宅である七〇四号室のドアを開けた。

お邪魔します、と控え目な口調で言いながら、雪菜が古城に続いて玄関に入ってくる。

雪菜の七〇五号室は十日ほど前の事件でボロボロになって、いちおう部屋の修理は終わったものの、生活に必要な家具や電化製品はいまだに揃っていない。そんなわけでやむにやまれず、雪菜は、古城の自宅に半ば居候しているような状態なのだった。

傍目には同棲していると誤解されかねない状況なのだが、そのことでより厳密な古城の監視が可能である、というのが雪菜の言い分だ。一人あたりの家事負担が減るので、古城としても積極的に彼女を追い出す理由はない。

そうやって特になんの疑問もなく一緒に部屋に上がりこんだところで、古城と雪菜は驚愕に息を呑んだ。3LDKのマンションすべての部屋が、乱雑に引っかき回されていたからだ。

タンスの中身が残らず床の上にぶちまけられて、クローゼットの扉も開いている。

「なんだこれ!?」

「まさか……泥棒ですか!?」

人の気配を察知した雪菜が、古城を庇うように前に出る。どうやら部屋を荒らした侵入者は、今も中にいるらしい。

身構える雪菜の視線を追って、古城も侵入者の位置を特定した。侵入者がいるのは、廊下の手前側。普段は閉め切ったままあまり使われない、両親用の寝室だ。

相手が武装していても対応できるようにと、雪菜が警戒しながらドアを開ける。

そして古城たちが目にしたのは、ベッドの脇に屈みこんだ、よれよれの白衣姿の人影だった。

歳は三十代の前半だろうか。寝癖のついたぼさぼさの髪に、開ききらない眠そうな瞼。ひと目でだらしない系の大人だとわかる童顔の女性だ。

「わー、古城君。雪菜ちゃんも、ちょうどいいところに！」

部屋に入ってきた古城たちに気づいて、女は、ふんふーと鼻歌まじりにそう言った。

「げっ……」

「深森さん？」

古城が低い呻きを洩らし、雪菜は驚いて彼女の名前を呼ぶ。

ベッド横のクローゼットを引っかき回していたのは暁深森。ほかならぬ古城の母親である。

通勤が面倒臭いという理由で普段は職場に寝泊まりしており、自宅には週に一、二度しか帰ってこない彼女だが、さすがに年末ということで研究室を追い出されたらしい。

とはいえ、深森は曲がりなりにもこの部屋の正統な所有者だ。その彼女が、なにゆえこんな空き巣まが

いの真似をしているのか、さすがの古城たちも理解に苦しむ。しかし深森は、古城たちの動揺にもお構いなしに、クローゼットの奥にあった荷物に手をかけて、

「ようやくスーツケースを見つけたんだけど、荷物が邪魔で出せないのよ。ちょっとこの辺、押さえてて」

「ま、待てっ！」

強引にスーツケースの取っ手を引っ張る深森を、古城は慌てて止めようとした。

家事能力皆無の深森は、典型的な「片付けのできない大人」であり、彼女の部屋のクローゼットには、寄せ木細工のようにぎっちりと隙間なく多種多様な荷物が詰めこまれている。

その中から無理やりスーツケースを引っこ抜いたら、その結果がどうなるかは、火を見るよりも明らかだ。必死で防ごうとした古城の善戦虚しく、積み重ねられた荷物の壁は崩壊し、その残骸は古城の頭上に情け容赦なく降りそそいだ。

「んふ、よかった。これでようやく荷造りできるわ」

そんな大惨事の元凶である深森は、息子の苦労も知らずに、ご機嫌でスーツケースを開けている。古城の身体が防波堤になって、彼女は荷物の崩落による被害を受けなかったのだ。

「この惨状を見て、言いたいことはそれだけか」

全身あちこちにアザを作った古城が、床の上にばらまかれた荷物を指さして深森を責めた。しかし深森は、不思議そうに古城を見返して、

「時間がないの。今夜から職場の社員旅行で北海道に行くから」

「聞いてねえよ、そんなことは！」

「もしかして古城君も行きたかった？」

「いや、いい。それは遠慮しとく。あんたの会社の社員旅行には中学のときに連れて行かれて、酷い目にあったからな！」

「そうだっけ？」

「なんで忘れてるんだよ、あんたは!?　脱衣卓球で身ぐるみ剥がされそうになるわ、賭け麻雀でお年玉全部巻き上げられるわで散々だったぞ！」

つらい過去の体験を思い出して、古城がどんよりとした表情になる。

深森は古城の不平不満を、喫茶店内に流れるBGMのようにどこ吹く風と聞き流し、

「ところで凪沙ちゃんが見当たらないんだけど……古城君、知らない？」

「凪沙なら親父と一緒に丹沢の祖母さんのところに行ってるよ。一週間も前からな」

もっと早く気づけよ、と古城が呆れ顔で溜息をつく。

そして古城の口から、丹沢の祖母さん、と聞いた瞬間、深森の表情が引き攣るように大きく歪んだ。マイペースを絵に描いたような深森にしては、めずらしく不満げな表情だ。

「ちっ……あの妖怪シュートメ、まだ生きてたのね」

「よ、妖怪？」

敵意もあらわに毒突く深森を見て、雪菜が戸惑いの表情を浮かべる。

「仲が悪いんだよ、うちの母親と祖母さんは」

古城が小声で雪菜に囁き、なるほど、と雪菜はうなずいた。片や多国籍企業の研究所で働く天然モノの超能力者で、片や神社の神職を勤める攻魔師くずれの霊能力者。お互いに話が合うはずもなく、単なる嫁 姑の関係を超えて両者の相性は最悪だ。牙城が今回の帰省の際に、深森に声をかけなかったのも無理はない。

「そんなことより、なんで家の中をこんな無茶苦茶にした？　まさかスーツケースを探してただけとか言わないよな？」

気怠げに周囲を見回しながら、古城が冷ややかな声で深森に訊く。

深森は古城に指摘されて初めて、部屋の中の惨状に気づいたらしい。床の上に散らばった荷物を眺めて、一瞬、驚いたような表情になり、

「や、やあねえ、これは……そう、大掃除よ」

「……は？」

「大晦日には一年間の汚れを落として、すっきりした気分で新年を迎えるものでしょ？」

「て、適当な嘘をつくなっ！　今思いついただけだろ、それ！」

あまりにも白々しい深森の言い訳に、古城の反応が一瞬遅れた。慌てて喰い下がろうとする古城だが、深森は得意満面の笑みで一方的にその話題を切り上げる。

「ふんふー……まあ、いいから二人ともそこに並んで。そう、その辺」

「あ……？」

窓辺に立つように深森に促されて、古城はなんとなくその言葉に従ってしまう。

「はい、雪菜ちゃんは、あと一歩古城君のほうに近づいて」

「こ、こうですか？」

今ひとつ状況を把握できないまま、古城の隣に立つ雪菜。

深森は、古城たちがぴったりと寄り添ったのを確認すると、唐突に真面目な口調になって、

「さて問題。ネイピア数eのlog二乗はいくつ？」

母親の質問がなにひとつ理解できずに、なんだそれは、と古城は固まった。それが日本語なのかどうかすら、古城には今イチ判然としない。

一方の雪菜は同じように困惑しつつも、あっさりと解答を導き出して、

「2……？」

右手の人差し指と中指を立てつつ、かすかに首を傾げる雪菜。

そして発声の関係上、雪菜が無意識に笑っているような表情になった瞬間を逃さず、深森は、素早く取り出したデジタルカメラのシャッターを切る。

結果としてそこに記録されたのは、古城と雪菜が仲良く写った記念写真のような光景だった。しかも笑顔でピースサインをしている雪菜、という恐ろしくレアな画像である。

「あ、あの……」

「うん。なかなかよく撮れてるわ」

動揺を隠しきれない雪菜に対して、深森は会心の笑みを浮かべている。

古城は険しい表情でそんな深森を睨んで、

「いったいなにがしたいんだよ、あんたは」

「はい。このカメラ、雪菜ちゃんにあげるわね。さっき部屋を掃除してたら出てきたの」

「クローゼットの中身をぶちまけてたら、の間違いだろ」

古城の辛辣なツッコミにも、深森はまったく表情を動かさない。

雪菜はその深森の手からカメラを受け取った。銀色の金属筐体に包まれたコンパクトなデジカメだ。本体のサイズは小型のスマートフォン程度。そこにごつい大口径のレンズがついている。見るからに最先端という趣の、高価そうなカメラだった。

カメラの製造元はMAR社。深森の勤務先の多国籍企業である。

「いいんですか、わたしがいただいてしまって？」

遠慮がちに尋ねる雪菜に、深森は悪戯っぽく笑ってみせる。

「いいのいいの。ひと足早いお年玉だとでも思って。もともと職場からタダでもらってきた試作品だし。それに古城君に渡したらきっと犯罪に使うでしょ。雪菜ちゃんの着替えを撮ったり、雪菜ちゃんの下着を撮ったり、雪菜ちゃんの入浴シーンを撮ったり」

「撮るかっ！　実の息子をなんだと思ってるんだあんたは!?」

盗撮マニア扱いされた古城が、苛立ちもあらわに抗議する。

しかし雪菜は、むしろ納得したように微笑んで、

「そういうことなら……あの、ありがとうございます」

どういうことだよ、と古城は不満そうに唇を歪めた。

控え目に喜んでいる雪菜を眺めて、深森は優しく目を細める。

「んふ。人間の記憶なんて意外に曖昧なものだから、思い出を形に残しとくのも悪くないわよ。本当に大切な時間って、なくすまで気づかないものだしね」

「深森さん……？」

感銘を受けたように顔を上げ、雪菜が尊敬の眼差しで深森を見る。しかし深森は、もっと褒めろといわんばかりにふんぞり返って、

「まあ、私は接触感応能力者(サイコメトラー)だから、写真なんかなくたって全然平気なんだけどねっ！」

「要らねーだろ、その情報！　なんの自慢だよ」

大人げない態度の深森(みもり)をうんざりと睨(にら)んで、古城(こじょう)が呟(つぶや)いた。息が合ってるのか合ってないのかわからない古城たち親子のやりとりに、雪菜(ゆきな)がクスと失笑する。

その間もマイペースでスーツケースに荷物を放りこんでいた深森は、膨(ふく)れあがったケースの蓋(ふた)を力任せに閉めて一息つく。

「ふんふー、荷造り完了っと。古城君、あとよろしくね」

「おい！　待て、このまま出かける気か!?」

家の中を散らかすだけ散らかして出かけようとする母親を、古城はもちろん止めようとする。しかし深森は、行く手を遮(さえぎ)る古城をスーツケースで突き飛ばし、

「ひ、姫柊(ひめらぎ)！　そいつを止めろ！」

「雪菜ちゃん、来年も古城君のことよろしくね」

「え!?　あ、はい……ひゃうっ!?」

通りすがりに深森に尻(しり)を撫(な)でられて、雪菜が小さく飛び上がる。その隙(すき)に深森は悠々(ゆうゆう)と雪菜の脇(わき)をすり抜け、サンダルを突っかけて玄関から外に出て行った。

古城と雪菜は脱力したまま、そんな彼女を呆然(ぼうぜん)と見送る。

深森の被害に遭(あ)ったのは寝室だけではない。リビングやキッチン、そして古城たちの部屋まで平等に散らかしてくれている。まるで局地的な竜巻(たつまき)が吹き荒れたかのような光景だ。これを元の状態に復旧するのは、並の大掃除よりも遥(はる)かに手間だろう。

「で……結局これを片付けるのは俺(おれ)なのかよ？」

古城はのろのろと立ち上がりながら、軽い絶望感を覚えて首を振る。

そんな古城の傍らに立って、雪菜も弱々しく溜息(ためいき)を洩(も)らした。

「いいえ、先輩。わたしたち、です」

4

荒廃した家の中の片付けは、二人がかりでもけっこうな手間だった。現在時刻は午後九時十五分。今年の残り時間は、約二時間と四十五分だ。

シャワーで汗と埃を流して、古城がようやくひと息ついた直後、インターホンのチャイムが鳴る。モニタに映し出されていたのは、見慣れた友人の顔だった。矢瀬基樹だ。

「おーっす、古城。来てやったぜ」

密閉型のヘッドフォンを首に引っかけたツンツン頭の同級生が、勝手に玄関ドアを開けて入って来る。彼の両手に握られているのは、コンビニエンスストアのビニール袋だ。

「どうしたんだ、こんな時間にいきなり？」

湿った髪をバスタオルで拭きながら、古城は怪訝顔で友人を出迎えた。

なに言ってんだ、と矢瀬は不服そうな表情を浮かべて、

「どうしたもこうしたも、年が明けたらみんなで初詣に行くって約束だっただろ。いったん、おまえん家に集合して」

「ああ……」

そうだっけか、とうなずく古城。補習や掃除に追われていたせいで、予定がすっかり記憶から抜け落ちていたらしい。凪沙との連絡が途絶えていることも、地味に古城の注意力を奪っている。

「ていうか、なんかやつれてないか、古城？」

「あー……まあ、さっきまでいろいろあってな」

「ほほう」

なぜか強く興味を示して、瞳をキラリと輝かせる矢瀬。

「とりあえず邪魔するぜ。菓子とか飲み物とかは買ってきたからな」

「それはべつに構わねーけど……そういや、浅葱は？　一緒じゃなかったのか？」

「あいつらならもうすぐ来ると思うぜ。ほら」

矢瀬が自分の背後を指さすと同時に、玄関前に新たな人影が現れた。一人は華やかな髪型の女子高生で、もう一人は小柄な小学生だ。ふらふらとした危なっかしい足取りで、二人はどうにか暁家の玄関前に辿り着く。彼女たちのド派手な服装に、古城は目を丸くした。

「なんだ、おまえら、その恰好？」

古城が困惑の口調で訊く。

普段から華やかな髪型が特徴の藍羽浅葱だが、今日はいっそう派手な感じに盛られている。

そんな彼女が身につけているのは振袖だ。淡い薄紅の生地に、無数の花を散らした豪華な古典柄の和服である。

浅葱に手を引かれている江口結瞳も同じく振袖姿。こちらは明るい青緑色の生地に、宝尽くしの模様を描いた可愛らしいものだ。

なんにせよ新年を迎えるのに相応しい、豪華絢爛な衣装ではあった。

ここが太平洋のド真ん中に浮かぶ常夏の島でなければ、だが。

「せ……せっかくの新年だからと思って、たまには晴れ着もいいかなって思ったのよ」

「に、似合ってますか、古城さん」

着飾った成果を見せつけようと、浅葱と結瞳が懸命にアピールしてくる。しかし彼女たちの笑顔は虚ろで、どことなく瞳の焦点もズレていた。あまりの暑さで意識が朦朧としているのだ。

「いや、この島の気候で振袖って無理があるだろ。大丈夫か？」

古城が不安な表情で二人を気遣う。ふらふらと身体を揺らす浅葱たちは、もはや汗すらかいていない。熱中症になる前の危険な徴候だ。亜熱帯の絃神島で正月用の振袖を着て出歩いていたら、そうなってしまうのも無理はない。

それでも結瞳は気丈に微笑んで、

「だ、大丈夫です。お水を一杯いただければ」

「ついでにエアコンの設定温度を下げてもらえると嬉しいかも」

リビングに到着したところで、ぐったりとソファに倒れこむ浅葱。

古城は溜息まじりにリモコンを操作しながら、

「まあいいけど、着替えたほうがいいんじゃねーか？　服貸すぞ？」

「いいのよ、ここまで来たらあたしたちにも女の意地があるから」

「どちらが先に音を上げるか勝負です」

「いや、初詣ってそういうのを競う行事じゃないから……」

無益な対抗心を燃やす浅葱と結瞳を眺めて、古城は諦めたように首を振る。そして、

「藍羽先輩、お水です。結瞳ちゃんも」

「雪菜さん……？」

「当然のように古城ん家のキッチンから出てきたわね……」

氷水のグラスを運んできた雪菜に気づいて、結瞳と浅葱が頬を引き攣らせた。

私服にエプロンを着けた雪菜は、暁家の風景にナチュラルに溶けこんで、最初からこの家の子だったといわれても違和感がない。そんな雪菜の姿を見て、浅葱と結瞳が色めき立つ。

「いえあの、凪沙ちゃんが帰省中でいないので、代わりに年越しそばの準備をしようと思って」

雪菜が慌てて言い訳するが、それは浅葱たちの敗北感を更に増幅しただけだった。浅葱と結瞳が振袖を着て、回りくどく古城を攻略しようとしている間に、雪菜は古城の家の台所にまで侵入していたのだ。二人が自分たちの戦略ミスを悔やむのも当然だ。

そして高みの見物を決めこんでいた矢瀬は、部屋に漂う雪菜のシャンプーの匂いに気づいて、面白そうにニヤリと笑い、

「ほー……湯上がりの姫柊ちゃんも色っぽくていいですなあ」

「え？　そ、そうですか……？」

冗談めかした矢瀬の指摘に、軽く動揺する雪菜。矢瀬は顎に手を当てて、安楽椅子探偵よろしく推理に没頭し、

「待てよ……凪沙ちゃんがいなかったってことは、古城と雪菜ちゃんは今まで二人きりだったってことだろ。二人ともなぜか体力を消耗してて、入浴済みで、しかも普段は閉め切られている寝室のドアが開いている……あっ」

「あっ、じゃねえよ！　ただの年末の大掃除っていうか、ウチの母親が家中引っかき回して出てったから、その後片付けをして疲れただけだ！」

「小学生の前でなに言ってんのよ、あんたは!?」

古城と浅葱に左右から同時に殴られて、矢瀬が苦悶の声を洩らす。

「痛ェな。俺は、あっ、しか言ってねえだろ！」

「うるさい、黙れ」

痛みに呻きつつ抗議してくる矢瀬を無視して、古城はぐったりとしている結瞳を見た。

「それよりも、なんで結瞳がおまえらと一緒にいるんだ？」

「ああ……それはほら、書類上はウチの兄貴が結瞳坊の保護者って形になってるだろ。だから天奏学館の学生寮が閉まる年末年始は、矢瀬家で預かってるんだよ。そんで結瞳坊が、古城にどうしても会いたいっつーから、わざわざこうして俺がだな――」

訊かれもしないのに説明しようとした矢瀬が、痛てっ、と鼻の頭を押さえて仰け反った。結瞳が着物の袖

を鞭のように操って、矢瀬の顔面を攻撃したのだ。

「余計なことは言わないでください。それに変なあだ名で呼ぶなってお願いしておいたはずですけど」

「ぐ……」

このガキ、と口を歪めて結瞳を睨む矢瀬。結瞳は、つん、と顔を背けて、そんな矢瀬に取り合わない。この二人は初めて出会ったころから、あまり相性がよくないのだ。

そうこうしている間にお湯が沸いた。常夏の絃神島では、年越しそばといえばざるそばが主流だ。雪菜が麺を茹でている間に、古城がネギなどの薬味を準備する。

「しかし今更だけど、この島にいると、年越しだの新年だのっていってもピンとこねーな」

窓の外から聞こえてくるセミの鳴き声に、古城が思わず本音を洩らす。〝魔族特区〟である絃神島は必然的に海外出身者が多く、気候のせいもあって季節感に乏しい。テレビでは国営放送の歌番組が盛り上がりを見せていたが、どこか遠い国の出来事のようにも感じられた。

「そうかもね。あたしと基樹は、子どものころからここで暮らしてるからもう慣れたけど」

いただきます、と茹で上がったそばをすすりながら浅葱が言った。

「初詣っつっても新年のカウントダウンと花火大会がメインだしなー。面倒臭ェからこのまま古城ん家でゴロゴロしてようぜ。結瞳坊はそろそろおねむの時間だろ」

ソファにだらしなく寝転んだ矢瀬が、そう言って結瞳の頭をぐりぐりと撫でる。結瞳はそんな矢瀬の手を乱暴に払いのけながら、

「子ども扱いしないでください。夜更かしくらい平気です。私は夢魔ですから。むしろこれからが本領発揮といっても過言ではないです」

「ていうかおまえ、花火が見たいだけだろ」

「ち、違いますし！」

矢瀬に鋭く指摘された結瞳が、顔を真っ赤にして首を振る。

しかし振袖で体力を消耗したのがこたえたのか、強気な発言とは裏腹に結瞳は今にも眠りそうだった。瞬きの回数も増えているし、お菓子にもほとんど手をつけていない。

「でもたしかに一度涼んじゃうと外に出たくなくなるわね。この恰好だと」

そんな結瞳に気を遣ったわけでもないのだろうが、浅葱が独り言のような口調で本音を洩らす。女の意地はどこに行ったんだよ、と古城は小さく苦笑して、

「まあ、無理してぶっ倒れられても困るしな。着替えるか？」

「う……うーん……」

紐や帯で締めつけられたウエストを押さえて、浅葱が葛藤の表情を浮かべた。見かけによらず大喰いキャラである浅葱にとって、振袖を着ていると思うように食事がとれないという事実は予期せぬ誤算だったらしい。古城に振袖姿を見せるという目的はすでに達成した、ということもあって、かなり本気で悩んでいる。

「あの……もし着替えるのなら、その前に、写真を撮らせてもらってもいいですか？」

そう言って雪菜が取り出したのは、深森からもらったばかりのデジタルカメラだった。せっかくだから浅葱たちの晴れ着姿を撮影しておこう、と思ったらしい。

浅葱が興味を惹かれたように、わ、と目を丸くする。

「MARのζ 9じゃない。買ったの？」

「いえ、いただきものです。お年玉代わりにということで深森さんが」

「う、なにそれ。ちょっと羨ましい。この機種、日本では未発売なのに……！」

眉間にしわを寄せながら、がじがじと悔しげに箸を噛む浅葱。パソコンマニアである浅葱は、この手のデジタル機器に目がないのだ。

「えーと、つまり結構いいやつなのか、このカメラ？」

一方、その手の道具に疎い古城は、むしろ浅葱の喰いつきっぷりに興味を覚える。浅葱は勢いよくうなずいて、

「うん、かなり。防水だし耐衝撃だしセンサーてんこ盛りで、ネットにもつながるし。撮像素子もかなりの性能なんだけど、この機種の売りはやっぱり新型のDSPよね。独自設計の積和演算回路を積んでて、コードの実行効率が概算で二桁上がってるって話よ」

「お、おう……」

さっぱりわからんがわかった、と古城は弱々しくうなずいた。浅葱はその間も物欲しそうに雪菜のカメラを眺めていたが、

「そうだ。撮った写真、あとであたしにも送ってくれる？」

「あ、はい。やり方を教えてもらえれば」

雪菜が自信なさげな表情で首肯する。呪術関係の知識にはめっぽう強い雪菜だが、機械類の操作はどちらかといえば苦手なタイプなのだ。

「あ、そっか……接続設定しておかなきゃだよね。姫柊さんってパソコン持ってる？」

「いえ」

すみません、と雪菜が首を振り、ううん、と浅葱が残念そうに肩を落とした。普段は自前のノートPCやタブレット端末を何台も持ち歩いている浅葱だが、さすがに振袖姿ではそういうわけにもいかなかったらしい。

「古城は持ってなかったっけ？」

「あー……そういや凪沙がたまに使ってるやつがあったな」

そう言って古城は、リビングの隅に置かれていたキャビネットを開けた。そこにあったのは深森のお下がりのノートPCだ。絃神島で暮らす人間は、衣服でも小物でもスポーツ用品でも、ちょっとマニアックなアイテムを手に入れようと思ったら、どうしても通信販売に頼らざるを得ない。そんなわけで古城や凪沙も、最低限のパソコン操作ができる程度の知識は持っている。

「借りていい？」

「いいよ。べつに凪沙専用ってわけじゃないし」

「じゃあ遠慮なく」

古城の許可を得た上で、浅葱がノートPCを開く。そして電源を入れようとした瞬間、

「うわ……」

そう呟いて浅葱はその場に突っ伏した。パソコンのキーボードの上に、凪沙のものとおぼしきユーザー名と、ログインパスワードがでかでかと貼りつけられていたからだ。パスワード破りを得意とする浅葱にしてみれば、無防備すぎて馬鹿にされているのではないかと疑いたくなるレベルのセキュリティだ。

「これでログインするのって、ハッカーとしてのプライドが微妙に傷つくんだけど……」

屈辱に顔をしかめながら、浅葱はノートPCと雪菜のカメラを接続する。MAR社製のデジカメは、高性能なぶん設定しなければならない初期項目が多く、その入力が面倒臭い。パソコンを利用することで、そのあたりの手間がだいぶ軽減されるのだ。

「まあいいか。とりあえず、カメラの設定だけしておくから、あとは姫柊さんが写真を選んで、あたしのアドレスに送ってくれたら……ん？」

サクサクと設定を進めていた浅葱が、ふとなにかに気づいたように手を止めた。

「どうした？」

古城も浅葱の手元をのぞきこむ。浅葱は、気に入らない、というふうに唇を小さく尖らせて、

「このアカウント……凪沙ちゃんのスマホと同期してるみたいなんだけど……」

「同期？」

「スマホとパソコンでお互いにデータをやりとりできるように設定してあるわけ。受け取ったメールやらカレンダーに入力した予定やらは、両方で確認できたほうが便利でしょ」
「まあ、それはわかるけど」
つまりこのノートPCを経由することで、凪沙のスマホに入っているデータの一部が閲覧できるということらしい。便利といえば便利だが、プライバシー的には危険な機能でもある。
「なんかヤバいデータでも入ってたのか……？」
「あんたが想像してるようなヤバいもんじゃないけどね」
まさか男子からのメールか、などと不安そうに身を乗り出してくる古城を、浅葱が鬱陶しげに追い払う。そして浅葱が開いたのは、一枚の画像ファイルだった。
「ほら、この写真。凪沙ちゃんがスマホで撮ったやつ。データが壊れて、半分くらいしかまともに表示されないんだけど」
「……え？」
それが意味を持った画像であると理解できずに、なんだこれは、と古城は眉をひそめた。
撮影日時は一週間前。凪沙が丹沢にある祖母の地元に到着した日。そして彼女からの連絡が途絶えた直後の日付である。
画像の下半分はデータが破損して、モザイク状の模様になってしまっている。
そして画像の上半分に映っていたのは、夜空だった。
車の窓越しに撮った写真なのだろう。山の稜線に切り取られた冬の空だ。そこには月も星も映っていない。深い海底のような暗闇が画面に広がっている。
そしてその暗闇の中に、奇妙な紋様が浮かび上がっていた。
幾重にも重なった同心円。その内側をびっしりと埋め尽くす魔術文字の羅列。
光り輝く巨大な紋様が、夜空をすっぽりと覆い尽くしている。
まるで凪沙たちを閉じこめる檻のように。
「これは!?」
「魔法陣……!?」
古城と雪菜が、顔を見合わせて息を呑む。
それは十二月三十一日の夜。本土から遠く離れた〝魔族特区〟絃神島での出来事だった。

新たな年を迎えるまで、残り一時間と五十分――

第11章 追跡
Shadow Of A Intrigue

1

除夜の鐘が鳴り始めている。

時刻は午後十一時四十五分を過ぎていた。カーラジオから流れてくるアナウンサーの声が、新年直前の日本全国の様子を大仰な言葉を尽くして伝えている。

タクシーの後部座席に座った矢瀬基樹は、そんな雑音だらけの空気に顔をしかめつつ、携帯電話を耳に当てていた。通話の相手は矢瀬幾磨。十歳年上の矢瀬の異母兄だ。

三十秒近く待たされて矢瀬が苛立ちを覚え始めたころ、ようやく兄が応答する気配がある。

「――俺だ、兄貴」

『わかっている。基樹、結瞳はどうした？』

不機嫌な口調も隠しもせずに、幾磨が最初に訊いてきたのは結瞳のことだった。

そのことに矢瀬は小さく苦笑する。

書類上とはいえ幾磨は結瞳の保護者だし、結瞳が持つ〝夜の魔女〟の力は人工島管理公社の貴重な手駒でもある。あくまでも打算に基づく心配だとはわかっていても、あの冷静な異母兄が小学生の女の子を気にかけている、という事実は妙に微笑ましい。

「結瞳坊なら寝ちまった。今から連れて帰るところだ」

矢瀬は、隣で眠る幼い少女にちらりと目を向けて報告する。

慣れない晴れ着で消耗したのか、結瞳は午後十一時を過ぎたころには、完全に熟睡してしまっていた。矢瀬は仕方なく彼女を連れて、自宅に向かっている途中だ。

「それよりもちょっと厄介なことが起きた。情報が欲しい」

『悪いが規定の就寝時間を過ぎている。用があるなら明日にしろ』

本題を切り出そうとした矢瀬を、幾磨が素っ気なく拒絶する。

「就寝時間？　正月だぞ？」

『日付は、しょせん人間が便宜的に決めた記号だ。俺がそんなものに従う理由はない』

「あんた絶対もてないだろ」

異母兄の冷淡な反応に、矢瀬は辛辣な皮肉で応じた。多忙な幾磨がやたらと時間にうるさいことは

知っているが、弟の話の内容を聞きもしないというのは、さすがに極端だ。嫌味のひとつも言ってやらなければ腹の虫が治まらない。

しかし幾磨は、まるでそれを気にした素振りもなく、

『監視報告なら、情報部に伝えろ。羽沢が残っているはずだ』

「綾子さんの手に負えない案件だと思ったから、あんたに話をしてるんだよ」

『……説明しろ。手短にな』

必死に喰い下がる矢瀬の焦りが伝わったのか、幾磨が渋々と会話に応じてくる。しかし、説明しろと言われたところで、矢瀬に答えられることは多くない。

「凪沙ちゃんが事件に巻きこまれたかもしれない」

『暁凪沙……第四真祖の妹か。島の外に出ていると聞いたが？』

「あの子の今の状況を教えてくれ。監視はつけてあったんだろ？」

矢瀬がストレートな口調で要求した。〝原初〟のアヴローラに憑依されていた一時期ほどではないにせよ、暁凪沙という少女が、人工島管理公社にとって重要な存在であることには変わりない。そんな彼女を監視もつけずに絃神島の外に出すことは、わざわざ確認するまでもなく、絶対にあり得ないことだった。

だからこそ幾磨の返答には、隠しきれない苦渋の響きが滲んでいる。

『見失ったそうだ。彼女たちが本土に着いてすぐにな』

「追跡を撒かれたのか？」

『遊園地の人混みを使われたらしい』

幾磨の口調が不機嫌さを増していく。部下の失態によって予定を狂わされてしまったことが、几帳面な幾磨には耐え難い屈辱なのだろう。

「古城の親父さんの仕業か……」

『おそらくな。〝死都帰り〟の暁牙城、噂以上に面倒な相手のようだ』

やってくれるなオッサン、と矢瀬は呆れた。人工島管理公社が派遣した監視役ということは、最低でも矢瀬と同じ過適応能力者のはずだ。普通なら、攻魔師でもない中年男が、ひとりでどうにかできる相手ではない。

「結局、凪沙ちゃんの状況はつかめないわけか……まずいな」

『なぜ彼女の身が危険だと判断した？』

焦りに表情を歪める矢瀬に、幾磨が冷静に訊いてくる。

「先週から凪沙ちゃんとの連絡が途絶えてる。でもって、こいつが彼女のスマホに残されてた写真だそうだ。見られるか？」

『魔法陣か……かなりの規模だな』

転送されてきた画像データを確認して、幾磨は淡泊な感想を呟いた。

『〝魔族特区〟内ならまだしも、本土でこれだけの魔術が使われたとしたら、たしかに尋常ではないな。だがこれだけでは、暁凪沙が事件に巻きこまれたと断定することはできまい？』

「あんたが言いたいことはわかってる。島の外では管理公社の戦力は動かせないってんだろ」

『そうだ。被害者の存在が確認されているならまだしも、この画像だけではな』

幾磨が突き放すような口調で告げてくる。

ただそれは、矢瀬にとっても予想の範囲内だった。

行政区分では東京都に含まれる絃神市だが、〝魔族特区〟の実態は一種の自治領に近い。人工島管理公社に与えられた数々の特権は、〝魔族特区〟の外に出れば、すべて剥奪される。たとえ住民の救出が目的であろうとも、特区警備隊の実働部隊を、島外に派遣することは許されないとされている。

しかし突き詰めていえば、それらの理屈は建前に過ぎない。

「古城が騒いでいると言ってもか？」

矢瀬が静かな声で手札を切る。裏表や矛盾は政治と不可分の領域であり、そして人に非ざる者たちが棲まう〝魔族特区〟は、その曖昧な領域を統べるために存在する。

建前を覆す手札さえあれば、理屈など如何様にも動かすことができるのだ。

「あいつはあれでけっこうなシスコンだからな。下手すりゃ絃神島を飛び出して凪沙ちゃんを捜しに行くって言い出しかねないぜ」

『第四真祖がシスコンという報告は初耳だな』

幾磨の声に動揺はない。矢瀬がその手札を使ってくることは、当然予想していたのだろう。

『まあいい。状況は理解した。捜査員を増員して情報収集に当たらせる。さすがに今の段階で正規の攻魔官は派遣できないが、放置するわけにもいかないからな』

「やっぱそのあたりが現実的な落としどころか」

矢瀬が落胆の息を吐く。

第四真祖の関係者とはいえ、暁凪沙は魔族ですらない一般人だ。彼女一人のために捜査員を増派

するだけでも、幾磨にしてみれば最大限の譲歩だといえる。今はそれで納得するしかない。

「了解だ。で、古城のほうはどうすればいい？」

矢瀬が重苦しい気分で訊いた。妹がトラブルに巻きこまれたかもしれない、という漠然とした情報だけで半狂乱になる世界最強の吸血鬼を制御する自信は、矢瀬にもないのだ。

しかし幾磨の回答は、予想外に簡潔なものだった。

『監視を続けろ。万一の場合はこちらで対処する』

「対処って……兄貴、まさか……」

『同じことを二度言わせるな。監視を続けろ』

幾磨との通話が乱暴に途切れた。矢瀬はタクシーのシートにもたれて気怠く肩をすくめる。その隣では振袖姿の結瞳が、無邪気な寝息を立てていた。

日付が間もなく変わろうとしている――

2

多くの人々が見守る中、色鮮やかな閃光が夜空を満たした。

ズン、と迫力のある破裂音が、島中の大気を震わせる。新年カウントダウンの花火大会だ。

夜空に舞い散る光の乱舞を、古城たちは神社の参道から見上げている。

大きな目を殊更に見開いて、花火を見つめている雪菜。

浅葱は雪菜に借りたデジカメを使って、花火の録画に余念がない。

そして古城は強く唇を噛みしめたまま、世にも不景気なツラで、携帯電話を睨み続けていた。音信不通の凪沙に向かって、メールを送り続けているのだ。

「落ち着きなさいよ、古城。まだ凪沙ちゃんになにかあったって決まったわけじゃないんだし」

古城のうろたえぶりを見かねた浅葱が、呆れたような口調で言ってくる。

飼い主に悪戯を咎められた子猫のように、古城はビクッと肩を震わせて、

「わかってるよ。俺はメチャメチャ冷静だろ」

「どこが冷静なんだか」

震え声で言い訳する古城を見返して、浅葱が静かに溜息をついた。相変わらず振袖姿の浅葱だが、

深夜になって気温が下がったせいか、少しは体力に余裕が出てきたように見える。

ちなみに古城はハーフパンツにパーカーというラフな服装。いつものギグケースを背負った雪菜は、ボーダー柄のニーソックスにミニスカートというバンド少女風スタイルだ。

そうこうしている間に参拝客の列が動き出し、古城たちは神社の鳥居をくぐった。

古城たちが初詣に来た絃神神社は、花火がよく見えるというだけの理由で人気になった有名参拝スポットだ。境内は大勢の島民で賑わっており、夜店の屋台も数多く軒を連ねている。

そんな賑やかな雰囲気の中でも、古城の表情はパッとしないままだった。

音信不通になった凪沙のスマホで撮影された一枚の写真。その存在が、古城から落ち着きを奪っている。せっかくの初詣なのに鬱陶しいことこの上ないが、原因がわかっているだけに、浅葱や雪菜も、あまり強く文句を言えずにいるらしかった。

「とりあえずお祈りでもしといたら？　ここの神社、御利益あるらしいわよ」

具体的に古城を励ます方法を思いつかなかったのか、浅葱が無責任な言葉を投げかけてくる。

古城は死んだ魚のような目で、のろのろと神社の立て看板を眺め、

「商売繁盛と縁結びの神って書かれてるんだが……」

「少しくらい苦手な分野でもなんとかしてくれるわよ、神様なんだから」

説得力があるのかないのか、よくわからない理屈を力説する浅葱。

「そう言えば、先輩。さっき引いたおみくじはどうだったんですか？」

ネガティブな雰囲気を振り払おうとしたのか、雪菜がやや強引に話題を変えた。

絃神神社のおみくじは単なる運試しなどではなく、〝魔族特区〟の呪術理論によって作成された、極めて精度の高い〝託宣〟である。苦悩する今の古城にとっては、有益なアドバイスが得られる可能性は高かった。

「……先輩？」

しかし古城は無言のまま、二通のおみくじを雪菜に差し出す。

それを受け取って雪菜は絶句した。古城が引いた二通のおみくじには、それぞれ「凶」と「大凶」の文字がでかでかと印刷されていたからだ。最初に「凶」を引いた古城が慌てて二通目を引き直し、「大凶」を引き当てたということらしい。

「あの……大丈夫です、先輩。今がドン底ならこれ以上悪くなることはないはずですし」

「そうそう。あんたが不幸になったぶん、凪沙ちゃんに幸運が舞いこむかもしれないしさ」

「おう……まあ、この際、俺のことはどうでもいいよ――ってっ!?」

不安のあまり自暴自棄になった古城が、無気力な口調でそう言った。そんな古城の後頭部に、突然、鈍い痛みが走る。誰かが賽銭箱を目がけて投げた小銭が、古城の頭に当たったのだ。

「って、なんだこれ!?」

それからも立て続けに古城の周囲を、投げつけられた賽銭がかすめていく。参拝客の多い神社ではよくある光景だが、今年はやけに直撃する小銭が多い気がして、これが「大凶」の効果かと古城は恐れおののいた。

「先輩、もしかして狙われていませんか？　どことなく先輩への悪意を感じるんですけど」

雪菜が古城の耳元に顔を寄せ、小声で囁きかけてくる。その瞬間、降りそそぐ小銭の数がはっきりと増えた。明らかに憎しみの念がこめられた攻撃だ。

「古城、あんた、もしかして嫉妬されてるんじゃない？　姫柊さんを連れてるから」

「いえ、それを言うなら、藍羽先輩のほうが。振袖姿も目立ってますし」

「縁結びの神社に参拝に来るくらいだから、彼女を欲しがってる男子も多そうだしね。そんなところに左右に女の子はべらして歩いてたら、嫌味と思われても仕方ないわ」

「なんだその勝手な理屈!?　こっちはそれどころじゃないってのに……！」

誰にともなく恨みの言葉を吐きながら、古城は、参拝もそこそこに賽銭箱の前から逃げ出した。雪菜と浅葱は、そんな古城に気づいても動じず、拝殿の前で一身に祈りを捧げている。

友人である凪沙の身を案じてくれているのかもしれないし、それ以外のなにかを願っているのかもしれない。いずれにせよ古城には知るすべもないことだ。

新年を祝う花火の音は、今も鳴り響き続けていた。

浅葱と雪菜が参拝を終えるまでの間、古城は再び携帯電話を取り出して眺める。液晶画面に映っているのは、パソコンから転送した例の夜空の写真だ。

「この映像……実は花火でしたってオチはないよな？」

参拝を終えて合流した浅葱と雪菜に、古城はいちおう訊いてみる。

夜空を満たす巨大な模様。空中を乱舞する人工的な輝き。その意味で、ふたつの光景には共通点がないこともない。が、浅葱たちは迷いなくその可能性を却下した。

「さすがにそれはないと思うけど。それにデジタルデータなんていくらでも改竄できるからさ。そんなに思い詰めないほうがいいわよ」

「そうですね。仮にこれが魔法陣だとしても、凪沙ちゃんを狙ったものとは限りませんし」

「だけどそうじゃないって保証もないわけだろ？」

最悪の事態を想定して、一人で頭を抱える古城。さすがにウザくなってきたのか、浅葱はそんな古城を

無視して雪菜のほうに向き直り、

「そういうのって、わからないものなの？　これがどういう効果の魔法陣なのかって」

「すみません。わたしにはそこまでは……紗矢華さんなら、わかるのかもしれませんけど」

「煌坂……か」

雪菜の説明を聞いた古城が、ハッとしたように顔を上げた。

煌坂紗矢華は雪菜と同じ獅子王機関所属の攻魔師。呪詛と暗殺の専門家である〝舞威媛〟の肩書きを与えられた少女だ。

「そういえば似てるな、この魔法陣……」

「紗矢華さんの〝煌華麟〟ですね」

古城の呟きに、雪菜がうなずく。おそらく彼女は、最初から気づいていたのだろう。

凪沙の写真に写っていた光の模様は、煌坂紗矢華が、鳴り鏑矢を利用して作り出す大規模な魔法陣によく似ている。細かな模様や形は違っているが、上空に描き出すという性質や、その巨大さはそっくり同じだ。

「あの弓矢、煌坂以外にも持ってるやつがいるのか……？」

「いえ。六式重装降魔弓は取り扱いが難しくて、まともに使いこなせるのは紗矢華さんだけだと聞いてます。起動に必要な呪力量が桁外れに多い上に、相性がすごくシビアなので」

「そうなのか……なんか意外だな」

嫉妬に駆られて斬りかかったり、あるいは古城を射殺そうとしたりと、紗矢華が好き勝手に振り回しているように思えた〝煌華麟〟だが、ああ見えて実は意外に繊細な武器だったらしい。

「ただ、〝煌華麟〟のデータを基に、構造を簡略化した量産モデルが造られたという噂は以前からありました。わたしも詳しくは知らないんですけど」

「量産モデル？」

「はい」

「そいつを使えば、ほかの術者でも煌坂と同じような呪術が使えるってことか……」

「可能性はあると思います。でも、そんなはずは……」

雪菜が、かすかに目を伏せて言い淀む。

六式重装降魔弓の量産型を使えば、紗矢華でなくても、空中に魔法陣を描くことは可能だ。だがそれ

でも、量産型を造ったのが獅子王機関であることには変わりない。

つまり凪沙を事件に巻きこんだのも、やはり獅子王機関の関係者ということになる。

クソッ、と苛立ったように呟いて、古城は携帯電話の着信履歴を呼び出した。記録されていた番号のひとつを適当に選んでコールする。

「先輩？」

「煌坂に訊いてみる。もし本当にこいつが獅子王機関の仕業なら、あいつがなにか知ってるかもしれない」

携帯電話を耳に当てたまま、古城は手早く説明した。

それを隣で見ていた浅葱が、露骨に不機嫌な表情を浮かべて古城を睨み、

「なんであんたが煌坂さんの電話番号を知ってるのよ？」

「なんかよくわからんが、たまに電話がかかってくるんだよ、あいつのほうから」

「なにそれ？」

「だからよくわからないんだって」

最初のころは雪菜の近況を教えろ、という名目で電話をかけてきた紗矢華だが、最近では、それ以外の話題も多い。上司の愚痴や新発売のスナック菓子の感想といった、かなりどうでもいい話題だ。特に害があるわけではないので、古城も適当に相手をしているのだが、

「どうしたの？」

「出ない。ていうか、この番号、使われてないことになってる」

こんなときに限って、と古城はイライラと電話を睨む。浅葱は少し楽しそうに口角を上げて、

「着信拒否されてるんじゃないの？　なにやったのよ、古城？」

「俺のせいかよ!?」

「紗矢華さんと連絡がとれなくなった、ということですか？　どうして……？」

「なんか失礼なことを訊いたとか？　煌坂さんの胸のサイズとかブラのサイズとかスリーサイズとか」

「そんなわけあるか！　俺がそれを訊いてなんの役に立つんだよ!?」

「だけど偶然の一致にしてはタイミング良すぎるわよね」

身の潔白を訴える古城を無視して、浅葱が短く息を吐いた。

彼女が何気なく口にした呟きが、妙に古城の胸に引っかかる。偶然の一致。タイミング。

凪沙からの連絡が途絶えたこと。そして紗矢華の着信拒否。どちらもたいした事件ではない。

しかしそれらが立て続けに起きたという事実が、嫌な想像をかき立てた。目に映らない悪意の壁に、視界を遮られている気分だ。

「姫柊さんは？　獅子王機関とは連絡が取れないの？」

「もちろん問い合わせることはできますけど、だけど、この凪沙ちゃんの写真だけでは、誰になにを訊けばいいのか……」

「思ったより厄介ね」

「はい」

雪菜が唇を噛んでうなずいた。古城は無言で、応答しない携帯電話を握り締めている。

浅葱はそんな二人を眺めて、なにかを吹っ切ったように肩をすくめた。

「まあ、そういうことなら仕方ないか」

「なにがだ？」

訝しげに訊き返す古城を見つめて、浅葱は小さく咳払いする。妙な緊張感を漂わせた彼女の態度に、古城もつられて表情を硬くした。

「あ、あのね、古城……今夜は両親が出かけてるから誰もいないんだけど……」

浅葱が意を決したように息を吸い、頬を赤らめながら言葉を紡ぐ。もじもじと左右の人差し指同士を絡ませて、上目遣いの視線を古城に向けながら。

「ウチ、来る？」

唐突な浅葱からの招待に、古城は携帯を握り締めたまま動きを止めた。

至近距離で見つめ合う古城と浅葱を、雪菜はただ唖然と見つめていた。

3

藍羽家があるのは、人工島西地区の東岸。絃神島ではめずらしい一戸建ての邸宅が多く建ち並び、緑の木々に囲まれた高級住宅地である。

「……そういや浅葱ん家に来るのは初めてだな」

コンクリートの塀に囲まれた和洋折衷の屋敷を見上げて、古城が感慨深げに呟いた。

浅葱が言うには、彼女が友人を自宅に招くのは、物心ついてから初めてのことなのだそうだ。異様に緊

張しながら声をかけてきたのは、単にそれが原因だったらしい。

「すごいお宅ですね……」

鉄製の巨大な門扉を見上げて、雪菜も感嘆の声を出す。

人工島である絃神島では本土とは比較にならないほど地価が高く、一戸建てというだけで相当な贅沢だったりする。その中でも藍羽家の敷地は群を抜いて広大で、屋敷の造りにも明らかに金がかかっていた。

「警備の都合で仕方なく住んでるだけよ。古い建物だから、中はあまり期待しないでよね」

しかし浅葱は、玄関のセキュリティを解除しながら、事も無げな口調でそう言った。

彼女の言葉が謙遜ではなく、単なる事実であることを古城は知っている。

ここは絃神島〝魔族特区〟だ。浅葱が単なる金持ちのお嬢様であるなら、こんな島に住んでいるはずがない。彼女には彼女の家庭の事情があるのだった。

「部屋を片付けてくるからここで待ってて。五分で終わるから」

古城たちを玄関に通したところで、浅葱は強い口調でそう言った。玄関といってもきちんと冷房が効いており、来客用のベンチまで置かれている。

古城としても待つのは苦痛ではなかったが、

「掃除なら手伝うか？」

「いいから待ってて！」

いちおう気を遣って訊いてみた古城を、浅葱が眉を吊り上げて睨みつけた。のぞいたら殺す、と言わんばかりの形相だ。よほど古城に見られたくないものが出しっ放しになっているらしい。

「たしかにセキュリティが厳重ですね」

浅葱が立ち去ったあとの玄関を眺めて、雪菜が小声で呟いた。

古城は少し驚いて周囲を見回し、

「そういうのって、わかるものなのか？」

「機械的な仕掛けはわかりませんけど、かなり高度な侵入者よけの呪術が使われています。それに呪詛返しの結界も」

へえ、と古城が感心したようにうなずく。

「浅葱の親父さんは、絃神市の評議員だからな」

「評議員？」

「市議会議員みたいなものかな。その関係で浅葱は絃神島に連れてこられたらしい」

「そうだったんですか……」

雪菜が得心したような表情を浮かべた。〝魔族特区〟で暮らす学生の多くは、なにかしらの事情を抱えていることが多いが、それは浅葱も例外ではない。

彼女は小学生になる前から、絃神島で暮らしていた。当時の絃神島は治安面で多くの問題を抱えていたし、本土の住民から奇異の目で見られることも多かった。そんな中〝魔族特区〟の為政者の娘として育った浅葱は、少なからず苦労したはずだ。それを決して口にしないのが、浅葱のプライドだったりもするのだろう。

「あら……お客様？」

古城たちの会話が聞こえたのか、ぱたぱたと廊下を走る音がして、見知らぬ女性が顔を出す。素朴な風貌の若々しい女だった。結い上げた長い黒髪に、淡い紫色の和服がよく似合う。

玄関に立ち尽くしている古城たちを認めると、彼女は無邪気な子どものような笑顔を見せた。

「すみません。お邪魔してます」

あれこれ考えるより先に、古城は反射的に頭を下げていた。家には誰もいないんじゃなかったのか、と心の中で浅葱を問い詰めてみる。

「あ、あけましておめでとうございます」

「おめでとうございます」

ぎこちなく挨拶する雪菜を見て、女は愉快そうに目を細めた。元日の深夜に押しかけてきた非常識な来客に対して、驚くほどフレンドリーな態度である。

「浅葱さんのお友達ね。素敵。この家にお友達を連れてくるなんて。こんなところにいたら暑いでしょう。どうぞ、遠慮せずお上がりになって」

「あ、いや。浅葱が……じゃなくて、浅葱さんにここで待ってるように言われてて……」

「もしかして、あなたが古城くん？」

慌てて言い訳する古城を見つめて、女が弾んだ声を出す。古城は緊張気味に姿勢を正して、

「はい。暁古城です」

「まあ、そう……あなたがそうなのね。ふふ、お会いできて嬉しいわ……そちらの可愛らしいお嬢さんは姫柊さんね。凪沙さんは帰省してらっしゃるんですものね」

「は、はい。初めまして」

和服の女の妙なテンションに、雪菜が圧倒されたように再び頭を下げた。女は好奇心で瞳を輝かせながら、古城たちの反応を観察している。にこやかで穏やかな物腰でありながら、妙に間合いのつかめない相手だった。彼女が浅葱の母親なのだろうとは想像がつくが、どう対処すればいいのかわからない。

「ああっ……!?」

部屋の片付けを終えて戻って来た浅葱が、そんな女の姿に気づいて小さく悲鳴を上げた。

「菫さん、どうして!?　今夜は実家に戻られるんじゃなかったんですか？」

「仙斎さんのお仕事が長引いて、予定が変わったの」

藍羽菫が、階段の上に立つ浅葱を見上げて朗らかに言った。

菫は浅葱の父親の再婚相手、つまり浅葱の継母にあたる人物だ。浅葱と菫の関係は微妙で、仲が悪いわけではないのだが、浅葱は継母のことを一方的に苦手にしている印象がある。

「せっかく遊びに来てくださったんですもの。どうぞゆっくりしていらして。すぐにお茶の用意をしますね。浅葱さんの好きな菖蒲屋さんのどらやきがあるのよ」

「いいから。今日はそういうんじゃないから。急ぎの用があって寄ってもらっただけだから」

浅葱が必死に若い継母を追い払おうとする。しかし菫は不思議な押しの強さを発揮して、

「そう？　でもほら、せっかく来てくださったんだし」

「二人とも先に行ってて！　階段上がって右側の部屋！」

「あー……すみません。じゃあ、行くか、姫柊」

「はい」

浅葱に追い詰められた口調で命令されて、古城たちは階段を上り始めた。絃神島では貴重な自然木を使った、地味に豪華な階段だ。

指示された部屋のドアを開けて、古城は中に入っていく。

淡いブルーとピンクを基調にした、いかにもな女子の部屋だった。

あふれ出しそうな洋服を無理やり詰めこんだ感のあるクローゼット。雑誌とメイク用品とぬいぐるみが少々。クリーニング済みの制服が、壁際のハンガーにかかっている。散らかった机や乱れたシーツに生活感があって妙にリアルだ。普段から妹の部屋に勝手に踏みこんで怒られたりしている古城としても、さすがに若干の緊張は隠せない。

「これが浅葱の部屋か……まあたしかにそれっぽいな」

「勝手に入っちゃってよかったんでしょうか？」

「本人がそうしろって言ったんだから、仕方ないよな」

遠慮がちに立ち止まっている雪菜の質問に、古城は、自分自身に言い聞かせるように答えた。

慣れない同級生の女子の部屋ということで、落ち着かないのは事実だが、一方でここには、浅葱のもうひとつの顔を象徴するような道具も置かれていた。無骨な業務用ディスプレイと、ラックマウント式のPCクラスタ。浅葱がバイト代のほとんどを注ぎこんで組み上げた、デタラメに高性能なコンピューターだ。その存在に気づいた瞬間、どうして浅葱が自分たちを部屋に招いたのか、古城も薄々理解していた。

「お待たせ、二人ともその辺に適当に座って」

茶菓子と飲み物を満載したトレイを抱えて、浅葱が部屋に戻ってくる。どことなく消耗して見えるのは、古城の気のせいだけではないだろう。

「勝手に変なところに触ってないでしょうね、古城？」

「触ってねえよ。それより董さんのことはよかったのか？　ちゃんと挨拶もできなかったけど」

「いいのよ。もともと顔を合わせる予定じゃなかったんだから」

意地を張る子どものように唇を尖らせて浅葱が言う。

テーブルにトレイを置いた浅葱は、パソコンデスクの前に座って、ようやく人心地ついたように不敵に笑った。

「それよりも知りたいのは凪沙ちゃんの今の様子でしょ。待ってて、すぐに調べるから」

「調べるって、どうする気だ？　うちの祖母さんの神社にネット回線なんかないと思うぞ」

古城が無念そうな口調で指摘する。

そもそもハイテクとは無縁な貧乏神社、しかも所在地は携帯基地局の電波すら届かぬ山奥だ。いくら浅葱が凄腕のハッカーでも、その環境で凪沙の無事を確認できるとは思えない。

しかし浅葱は、その程度のことは織りこみ済みだと不敵に笑い、

「コンピューターを使ってるのは建物の中だけとは限らないのよ。モグワイ、引っ張ってきたデータのフィルタリングよろしく」

『まったく、新年早々、人工知能使いの荒いこったな、嬢ちゃん』

浅葱のコンピューターのスピーカーから、妙に人間臭い合成音声が聞こえてくる。浅葱の相方にして、絃神島を制御する五基のスーパーコンピューターの現身――浅葱がモグワイと名付けた補助人工知能だ。

「無駄口叩いてないで、すぐやる！」

『へいへい、ハッピーニューイヤー……っと！』

浅葱が打ちこんだプログラムに従って、モグワイが画像の解析を開始した。

世界最高水準の演算能力を持つモグワイだが、クセが強くて扱いづらく、性能を引き出せる技術者（エンジニア）は絃神島にもほとんどいないという。しかし浅葱とはなぜか気が合うらしく、彼女の命令にだけは柔順だ。普通の技術者とコンピューターなら確実に数カ月はかかる複雑な作業を、浅葱とモグワイは瞬（まばた）きする間もなく終わらせてしまう。

ディスプレイに映し出されたのは、空港の通路を歩いているトレンチコート姿の怪しい男と、彼に連れられた快活そうな女子中学生の映像だった。暁 牙城（あかつき がじょう）と凪沙である。

「監視カメラか……！」

映像の正体に気づいて古城が呻（うめ）いた。そうこうしている間にも、牙城と凪沙の映像が次々に更新されていく。空港内の監視カメラが記録した映像と、絃神島で撮られた牙城たちの顔写真を照合して、二人の移動経路を追跡しているのだ。

「飛行機の搭乗記録は残ってるんだし、そこから凪沙ちゃんたちの足取りを追えると思ったのよ。クレジットカードの履歴（りれき）を辿（たど）れば、どこで買い物をしたかもわかるしね」

浅葱がそう言って得意満面の表情で胸を張る。理屈はわからないでもないが、実行するのは、口で言うほど簡単なことではないはずだ。公共の建物や信販会社のサーバーに侵入し、データを奪い、さらにそこからたった二人の個人を特定する。気が遠くなるような作業である。

しかしこのまま追跡を続ければ、たしかに凪沙の現状が確認可能だ。

「すごい……」

「これが監視社会ってやつか」

雪菜（ゆきな）が感嘆の息を吐き、古城は恐怖に肩をすくめた。

牙城たちが空港ロビーを出たところで、モグワイがケケッと皮肉っぽく笑い、

『親父（おやじ）さん、空港でレンタカーを借りてるな。偽名を使って』

「なんで偽名なんだよ、あのクソ親父（おやじ）……」

モグワイが気づいたおかげで事なきを得たが、場合によっては、ここで牙城（がじょう）たちを見失っても不思議ではなかった。いや、明らかにそれが牙城の目的だったのだろう。犯罪組織のボスなみの用心深さである。どんだけ後ろ暗いところがあるんだ、と古城は呆（あき）れる。

高速道路に乗った牙城の車を、浅葱は警察の車番認識装置を使って追跡しようとする。犯罪捜査を支援するための、通行車両のナンバープレートを記録するシステムだ。

しかし浅葱は、えっ、と焦りの声を上げ、

「通行データが残ってない……ナンバープレートを交換したってこと？　いつの間に!?」

『ケケッ……徹底してやがんな。搭乗者の画像データから特定するぜ』

「羽田から東京方面に向かってるわね……でも渋谷の手前で首都高速を降りてるけど」

「渋谷？」

なんでそんなところで、と古城は眉を寄せた。

丹沢にある祖母の家までは、まだかなりの距離がある。

『原宿の古着屋で服を買った記録が残ってるな。あとはケーキセットを喰ってる』

「ここ、凪沙ちゃんが行きたがってたお店ですね。前にテレビで紹介されてて」

モグワイからの報告を聞いて、雪菜が少し言いにくそうに補足する。なにやってんだあいつ、と呆れる古城。ちなみに同じころ絃神島では、古城が神獣やら邪神やらに襲われて死にかけたりしていたのだが、それはまたべつの話である。

「ホテルにチェックインして……なにこれ、ストリップ劇場？」

牙城のクレジットカードからチケットの購入履歴を確認して、浅葱が軽蔑するような視線を古城に向けてくる。どうやら牙城は夜中にこっそり宿泊先のホテルを抜け出して、一人でストリップバーに遊びに行ったらしい。

「俺は知らん！　あのクソ親父が勝手に出かけただけだろ！」

「翌日は朝から夢の国ランドに行ってるわね……そのまま園内のホテルに宿泊、と」

「この追跡、なんか意味あるのか……」

古城はげっそりやつれた表情で独りごちた。凪沙の無事を確認する予定が、気づいたらなぜか暁牙城の馬鹿な行動を暴露する作業になってしまっている。遊園地の監視カメラに残っていたのは、頭にネコミミをつけて年甲斐もなくはしゃぐ牙城の映像だ。息子として恥辱を感じずにはいられない光景だった。

『動き出したぜ』

その後も牙城がキャバクラ巡りをしたり、凪沙は凪沙で小学校時代の友人と会ったりと久々に訪れた本土をたっぷり満喫したあとで、ようやく二人は本来の目的を思い出したらしい。

新たなレンタカーに乗り換えて、牙城と凪沙は都内を出る。絃神島を出てから四日目にしてようやくだ。それを確認して古城はホッと息を吐き、

「今度こそ祖母さん家に向かったみたいだな」

「凪沙ちゃんから届いたメールの日付とも一致してますね」

雪菜が冷静な口調で指摘した。

高速道路に設置された各種カメラや測定機器によって、レンタカーを追跡するのは容易だった。牙城と凪沙を乗せた四輪駆動車は、特にトラブルに巻きこまれることもなく、神縄湖へと辿り着く。神緒多ダムによって造り出された、その人造の湖の畔に、古城たちの祖母が住む古い神社があるのだ。

凪沙のスマホに残されていた画像データの撮影日時は、浅葱が計算したレンタカーの到着予定時刻とほぼ重なっていた。誤差は最大でも十五分程度。つまり凪沙は目的地の神社に到着した直後に、あの巨大な魔法陣を目撃したということになる。

あるいは凪沙たちが到着したからこそ、あの魔法陣が発動したという可能性も、ある。

雪菜がかすかに青ざめていたのは、彼女もその可能性に気づいたからだろう。

あの魔法陣が凪沙たちの到着を待って発動したのだとしたら、それはただの偶然ではなく、凪沙か牙城のどちらかが標的だったということになるからだ。

「モグワイ、気づいた？」

『ああ、妙だな』

一方、浅葱とモグワイも、なにかしらの違和感を覚えたように声を潜めていた。

「なにがだ？」

「移動がスムーズ過ぎるのよ。凪沙ちゃんたちが乗ってる車……道が混み合う年末の時期に、一度も交通渋滞に引っかからずに移動してる」

古城の疑問に、浅葱が答える。しかし古城には浅葱が警戒する理由がよくわからない。

「ただの偶然じゃないのか？　それに最近のカーナビは抜け道を教えてくれたりするだろ？」

『うんにゃ、ほかの道は軒並みこんな感じだぜ』

モグワイが周辺の道路地図を表示する。赤く点滅する矢印は、道路の混雑状況を示しているらしい。主要な幹線道路には大渋滞が発生しており、場所によっては、歩いたほうが早いのではないかと思えるほどの混雑ぶりだ。

「丹沢方面……神縄湖に向かう道だけが空いてるのよ。というよりも、みんな無意識にその道を避けてるみたい。ほかの道路が混んでるのは、そのぶんのしわ寄せもあるのかもね」

「無意識に道を避けてるって……おい、まさか……」

「誰かが人払いの結界を……!?」

交通の偏りの原因に気づいて、古城と雪菜が息を呑む。

牙城と凪沙を除くすべての人々が、本人たちの知らぬ間に神縄湖に近づけないという呪いをかけられていた。逆に言えば凪沙たちだけが、結界の中に誘いこまれたということになる。

凪沙が撮影した魔法陣が、すべての始まりだと思っていた。だが違った。

彼女が神縄湖に近づく前から、すでに呪詛は発動していたのだ。

もはや疑いの余地はない。狙われていたのは、牙城か凪沙のどちらかだ。

「神縄湖周辺を丸ごと結界で囲んだってことか？　そんなことができるのか？」

「できます。ただし大がかりな準備が必要ですし、かなりの数の術者を揃えないと――」

「個人レベルの呪術じゃないってことか……」

古城が苛立ちで奥歯を噛み鳴らす。

人払いの結界は、もっとも基本的な呪術のひとつだ。極端な話、『通行止め』と書かれた道路標識をひとつ置くだけで、最低限の結界は成立する。雪菜たちが使う人払いの呪術は、それらの小道具を呪力で代用しているだけで、基本的な原理は変わらない。

しかし原理がシンプルであるだけに、規模が大きくなればなるほど、結界の維持に必要な人員と労力は指数関数的に増えていく。神縄湖周辺から無関係な人間をすべて排除しようと思ったら、相当な規模の集団が必要になるはずだ。

「モグワイ」

『おう』

浅葱が具体的な指示を出すまでもなく、モグワイが検索を開始する。

巨大な組織が動いているとわかれば、その正体を割り出すのは難しくない。人払いの結界を張れるほどの統率された組織となれば、存在が限られているからだ。

そして関わっている人間が増えれば増えるほど、痕跡を消すのが難しくなっていく。

食料、休息、移動、通信――集団活動を維持するために行われた様々な活動の痕跡と金の流れが、組織の正体を教えてくれるのだ。

『なるほど。カラクリがわかったぜ』

モグワイが皮肉っぽい声で笑いながら、モニタ上に多数の画像を表示した。迷彩服に身を包み、銃器で武装した一団の画像だ。

『神縄湖周辺のあちこちが、降雪と土砂崩れが原因で通行禁止ってことになってる。災害救助の名目で派遣されてるのは自衛隊だ』

「自衛隊……？」

古城は驚いたというよりも単純に混乱した。たしかに暁牙城は、犯罪スレスレのフィールドワークを行う悪名高い考古学者だが、自衛隊の標的になるほどの危険人物ではあるまい。ましてや凪沙にいたってはただの中学生だ。さすがになにかの間違いではないのか、と思う。

『ただし実質的に連中を指揮しているのは魔導災害管理局って組織だ。呪術結界を張ってるのもこいつらだな』

「魔導災害管理局……!?」

モグワイの言葉に反応したのは雪菜だった。震える彼女の唇から、目に見えて血の気が引いていく。大きく見開かれた彼女の瞳が、怯えたように小刻みに揺れていた。

「姫柊？」

「魔導災害管理局は、獅子王機関が所有しているダミー組織のひとつです。魔導災害の被害を防ぐための研究と、政府機関への情報提供が主な任務です」

「獅子王機関……!? どういうことだよ……？」

消え入りそうな声で説明する雪菜に、古城が責めるような表情を向けた。

獅子王機関は、大規模な魔導災害や魔導テロを防ぐための組織だ。少なくとも古城は雪菜からそう訊いていた。だからこそ、あの魔法陣の画像を見せられても、心のどこかで安心していられたのだ。獅子王機関が、凪沙たちを狙うはずがない、と。

しかし残された痕跡は、それを真っ向から否定している。

言葉をなくしている雪菜に代わって、冷静に答えてきたのは浅葱だった。

「自衛隊と獅子王機関ってとこが共謀して、神縄湖を封鎖してるってことでしょ。魔導災害の被害を防ぐために。凪沙ちゃんとの連絡が途絶えたのは、つまりそれが原因ってこと」

「凪沙が……魔導災害に巻きこまれてるってことか……？」

『あるいは魔導災害を引き起こすために、妹ちゃんを呼び寄せたのかもな』

ケケッと悪意を滲ませた口調でモグワイが笑う。

古城はそんな人工知能の言葉に、ぞくりと言いしれぬ不安を覚えた。

たしかに凪沙は、過去にも巨大な魔導災害の中心にいたことがある。その災厄には数万人が巻きこまれ、結果として人工島のひとつが沈んだ。

だがそれは凪沙の責任ではないし、その原因はすでに失われている。今さら凪沙が魔導災害に関わる理由などないはずだ。

そうやって平静を保とうとする古城の隣で、雪菜の身体が大きくよろめいた。

「獅子王機関が……そんな……どうして……」

「姫柊さん……!?」

異変に気づいた浅葱が叫んだ。浅い呼吸を続ける雪菜が、目眩を起こしたように倒れこむ。

「姫柊!?　おい、姫柊！」

抱き支える古城の腕の中で、雪菜は怯えたように小刻みに首を振っている。

そして雪菜は、そのままふっつりと意識を失った。

4

うっすらと白み始めた水平線を眺めて、古城は溜息をついていた。

目の前に広がっている庭園は、浅葱の自宅の庭である。広大というほどではないが、眺めていて飽きない程度には豪華な枯山水の日本庭園だ。

時刻は、間もなく元日の午前五時になるところである。

軽い立ちくらみを起こした雪菜は、浅葱のベッドで休んでいる。ついでに浅葱も振袖を脱ぐと言い出して、邪魔だ、と古城は浅葱の部屋を追い出されたのだった。

雪菜が倒れた原因は、精神的なショックによるものだろう。

獅子王機関が凪沙を事件に巻きこんだという疑惑。それが雪菜を予想外に動揺させたのだ。

古城は雪菜の監視対象だが、凪沙は違う。純粋な友人に近い存在だ。その凪沙の失踪に獅子王機関が絡んでいること。そして雪菜が、なにも知らされなかったということ――

幼いころから獅子王機関に育てられた雪菜にとって、それは古城が考えるよりも遥かに大きな衝撃だったらしい。彼女が精神的に脆いわけではない。動揺するほうがむしろ自然だ。剣巫として高い戦闘力を持つ雪菜だが、実際には中学生の少女に過ぎないのだから。

それがわかっているだけに、古城としても彼女を責めることができずにいる。

しかし一方では焦りもある。古城がこうしている間にも、凪沙は危険に晒されているかもしれないのだ。だからといって今の古城に、打てる手はほとんど残されていない。

ジリジリと焼けつくような焦燥を覚えつつ、古城は夜明け前の庭園にたたずんでいた。

そんな古城の足元を、突然、衝撃が襲ってくる。

「どわっ!?」

危うくバランスを崩しかけた古城は、衝撃の原因に気づいて目を丸くした。最初に視界に映ったのは鋭い牙と、好奇に輝くつぶらな瞳だった。

「い、犬……!?」

驚きに心臓をバクバクとさせながら、古城は、じゃれついてきた犬をどうにか支えた。体重三十キロ以上はありそうな、筋肉質の大型犬だ。ボクサー種の血が濃いのだろうか。ふてぶてしい面構えをしているが、陽気で知的な印象を受ける。

「番犬のつもりで飼うことにしたのだが、どうにも人懐こくてね」

動揺冷めやらぬ古城の背後から、低く落ち着いた声が聞こえてきた。

振り返った古城が目にしたのは、着流し姿の中年男性だ。

さして身長が高いわけでもなく、物腰はむしろ穏やかだ。しかし独特な雰囲気をまとった人物だった。真っ先に古城が連想したのは、ヤで始まってザで終わる三文字の単語だ。強面のボクサー犬よりも、この男のほうがよっぽど恐怖だった。

「お連れのお嬢さんの具合はどうかね」

外見の印象に反して優しげな口調で、男が話しかけてくる。

「もう平気だと思います。いろいろあって少し驚いただけなんで」

古城は反射的に直立不動の姿勢を取り、ハキハキとした口調で応対した。元運動部員の習性として、年長者に対する礼儀が身体に染みついているのだ。

「大事なければいいが、あまり無理はしないようにな。彼女も、きみも」

男が鷹揚にうなずいて言う。そのときには古城もすでに、男の素性を思い出していた。

直接会話を交わしたことはないが、何度か見かけたことがある。

絃神市の評議員、藍羽仙斎——浅葱の父親だ。

「すみません。こんな日にご迷惑をおかけしてしまって」

古城は元旦深夜に押しかけてきたことを、仙斎に詫びる。

しかし仙斎はどこか愉快そうに首を振り、

「構わんよ。浅葱が連れてきた友人はきみたちが初めてだし、それに世界最強の吸血鬼と、こうして語らう機会など滅多にないからね」

「……っ!?」

仙斎が何気なく口にした言葉に、古城は表情を取り繕うことができなかった。全身を脂汗で濡らしながら、ほとんど無意識に訊き返す。

「あなたは……俺のことを、知って……！」

「驚くことはないだろう。私はこれでも絃神市の評議員だ。人工島管理公社に友人も多い。将来、絃神島で起こり得る危機について、最低限の予備知識は持ち合わせているつもりだよ」

古城の正体を理解していながら、仙斎は泰然と微笑んでみせた。

「それを踏まえた上で、ひとつ願いを聞いてもらえないだろうか」

「願いって……俺にですか？」

古城が怪訝な口調で訊き返す。客観的に判断しても、仙斎の申し出は意外に思えた。

たしかに古城は第四真祖の力を手に入れたが、それは無差別な破壊以外に、ほとんどなんの役にも立たない能力だ。古城自身は無力で貧乏な学生に過ぎない。絃神島の中でまっとうな生活を送ろうとするなら、あらゆる面において、仙斎のほうが強い権力を持っている。

それでも彼は古城を見つめて、どこか寂しげに目を細めた。

「おそらくきみにしかできないことだ、暁くん」

「え？」

「浅葱のことを頼みたい。あの子を幸せにしてやってくれ」

「……は？」

藍羽仙斎の強面を見返したまま、古城は自分の耳を疑った。

自分がなにを言われているのか、すぐには理解できなかった。

これではまるで花嫁の父親と、娘の結婚相手との会話だ。しかし、からかわれているのか、と疑ってかかるには、仙斎の目つきはあまりにも真剣だった。

「いや、あの……それってどういう意味で……？　ていうか、浅葱の意思は？」

まさかこのまま浅葱と婚約させられてしまうのか、と古城は焦りを覚えて訊き返す。仙斎の権力をもってすれば、その程度のことは造作もなく実現できるはずだ。

仙斎は表情を動かさず、物静かな口調で淡々と続けた。

「いずれきみにもわかることだが、あれはいささか厄介な運命を背負って生まれた娘でね。ある意味ではきみと同じか、それ以上にだ」

「浅葱の……運命？」

仙斎の落ち着いた態度に影響されて、古城は少しだけ冷静さを取り戻す。

しかしいくら考えても、仙斎の言葉の意味はわからなかった。浅葱は古城や結瞳と違って、魔族ではない普通の人間だ。雪菜や那月のような攻魔師というわけでもない。

強いていえば、浅葱はかつて、ずば抜けたハッカーとしての能力が原因で、テロリストに誘拐されたことがある。心当たりといえるのは、それだけだ。

それでも仙斎の瞳には、揺らぎない気迫のようなものが感じられた。

「だからもし浅葱がきみを必要としたときには、傍にいてやってくれないか？」

予言に似た確信に満ちた口調で、仙斎が言う。

彼の真意はわからないまでも、その質問に対する古城の答えは最初から決まっていた。

「それは、もちろん」

「感謝する、暁古城くん」

仙斎が満足げに微笑んだ。そして彼は、不意に有能な政治家の顔になり、

「ところでうちは娘二人でね。きみは長男という話だったが、養子に入るという選択について、きみのご両親はどう考えているのだろうか？」

「は？　養子？」

やはりそっち系の話だったのか、と古城は激しく混乱する。浅葱の運命とやらはどうなった？

「政治家の端くれとしては地盤の引き継ぎということも、そろそろ考えねばならないのでね。なに、心配は要らない。第四真祖の知名度は選挙でも十分役に立つ。もし政治の世界に興味があるというのであれば、私がこれから時間をかけてきみを一人前の政治家に育ててみせよう」

「え、いや、興味とかそういうのは今はなにも――」

「しかし女遊びはいかんな。あれはいかん。もし浅葱のほかに交際している女性がいるのなら、なるべく早めに整理しておきなさい。必要ならば金は用意する」

「だからそういうことじゃなくてですね」

有能な政治家特有の押しの強さで、戸惑う古城をそのまま説き伏せにかかる仙斎。

そんな仙斎の後頭部が、突然なにかにしばかれて痛々しい音を立てた。

続けて古城の鼻先を、ビシッと鋭い衝撃が襲ってくる。

「なんの話をしてんのよ、あんたたちは!?」

「痛ってェ……あ、浅葱!?」

顔面を押さえて呻く古城が見たのは、犬用の引き綱を鞭のように構えている浅葱だった。水平線に浮かぶ初日の出の太陽のように、彼女の頬が赤く染まっている。

「どこにも姿が見えないと思ったら、まったく……古城も、父親の言うことなんか、相手しなくていいからね！」

「いやしかし派閥の長として、やはり後継者の問題というのは――」

「やかましい！　やっちゃって、アズール！」

「ぬおおおっ!?」

ほとんど猛獣使いと化した浅葱が、愛犬を自分の父親にけしかける。巨大なボクサー犬にじゃれつかれて、仙斎はその場に転倒した。強面の政治家の威厳が台無しだ。

「古城、姫柊さんを連れて帰るでしょ？　董さんが車を用意してくれたから」

藍羽家の玄関のほうを指さして、浅葱が言う。

振り返ると、庭園の出口近くには、董に付き添われた雪菜の姿が見えた。雪菜の表情はまだ少し硬いままだが、身体のほうは少しは復調したらしい。

とはいえ、徹夜明けということもあり、古城の体力もそろそろ限界だ。凪沙のことは気になるが、冷静な判断力を維持するためにも、一度帰って休息する必要がある。

「世話になりっぱなしで悪いな、浅葱。助かった」

「そういうのはいいから。凪沙ちゃんのことが心配なのはあたしも同じだし」

浅葱が照れ隠しのようにぞんざいに手を振った。

「あたしのほうでも情報を集めておくから、冷静に行動しなさいよ。特に姫柊さんが先走って無謀なことをしないようにちゃんと見張ってて。あとこれ」

「……なんだ？」

「あたしの予備のスマホ。これがあれば、直でモグワイと話ができるから。あんたの言うことを聞いてくれるとは限らないけど、もしかしたら役に立つかも知れないと思って」

「あ、ああ」

手渡されたショッキングピンクのスマートフォンを、古城は微妙に不安な表情で眺めた。

あちこち改造された形跡のある見慣れない型の端末だ。画面には、不細工なぬいぐるみ風のアバターだけが表示されている。こいつの性能はもちろん古城も知っているのだが、今イチ信用できないというのも偽らざる本音だった。それでも凪沙の行方を突き止めるためには、彼の力が必要だ。そんな古城の葛藤を知ってか知らずか、

『ケケッ……よろしくな』

モグワイはそう言って皮肉っぽく笑ってみせた。

5

藍羽董が古城たちのために用意してくれたのは、黒塗りの高級乗用車だった。意外なことにハンドルを握っているのは、董本人だ。

本人が言うには、董はかつて仙斎に雇われた運転手だったらしい。仙斎が最初の妻を病気で亡くした直後、政敵の罠により危機に陥った彼と命懸けの逃避行を続けているうちに恋に落ち、結婚することになったのだ、という彼女の話はどこまで信用していいのかわからないものの、とりあえず董の運転の腕は確かだった。

仙斎と結婚したことで、自宅では政治家の妻らしく振る舞っているが、やはり今でも、車を運転しているときがいちばん落ち着く、というのが董の主張である。

その言葉を裏づけるように、運転中の董は自宅にいたときよりも更にフレンドリーでよく喋った。特に彼女が知りたがっていたのは、娘である浅葱の学校での様子だ。そして古城と雪菜の関係についても、鋭い質問を投げかけてくる。

雪菜はどこか上の空で沈黙を保っていたため、必然的にそれらの質問には古城が回答させられる羽目になった。早朝といえども元日の幹線道路は混んでおり、楽しそうな様子の董とは裏腹に、古城の精神力はジリジリと削られていく。

「――すみません。六号坂に寄ってもらえませんか？」

車が見覚えのある交差点に差しかかったところで、雪菜が、不意に思い詰めたような口調でそう言った。

その瞬間、董が、ぶふっ、と勢いよく咳きこむ。

彼女が動揺したのも無理はない。六号坂とは人工島西地区にある特殊な地名。カップル向けの宿泊施設が建ち並ぶ、いわゆるラブホテル街だったからだ。

「いや、違うんです。そういうアレじゃないんです。六号坂には獅子王機か……じゃなくて、姫柊の知り合いが経営してる店があって。そう、骨董品店みたいなやつが」

董の誤解を解くために、古城は必死に説明する。

特殊な建物が密集する六号坂は、呪術的な死角が多い。獅子王機関はその性質を利用して、連絡用の事務所を設置しているのだ。見た目は寂れた骨董品店としか思えないし、そもそも特殊な結界のせいで、誰の記憶にも残らないという場所である。

雪菜はそこで獅子王機関の上司と連絡を取るつもりなのだろう。

しかしもちろん董には、雪菜の意図はわからない。

「大丈夫、心配しないで。浅葱さんには内緒にしておくから。若いっていいわね」

「だから違うんですって！」

無駄に気を遣ってくれる董の物分かりのよさが、古城を余計に追い詰める。たしかに浅葱にばらされたらそれはそれで面倒なことになるのだが、だからといって董に誤解されたままでも困るのだ。

「ここで結構です。停めてください」

どこか追い詰められた様子の雪菜には、そんな古城の焦りに気づく余裕はない。

言われるままに董が車を路肩に寄せ、彼女に礼を言って雪菜は飛び出していく。

「それでは私は、ここで三時間ほど待機してるわね。ごゆっくり」

「え!?　いや、先に帰ってください。こんなところで待たせちゃうのも悪いんで」

董の親切過ぎる申し出に、古城は驚いて首を振る。いくらなんでも、そこまで彼女に面倒を見てもらうわけにはいかない。それに、一般人である董を獅子王機関と接触させていいものかどうか、古城には判断できなかった。

しかし董は古城の言葉を、べつの意味で受け取ったらしい。

「つまり古城くんたちの行為は、ご休憩三時間では済まないと……」

「行為ってなんですか!?」

「冗談よ。なにか事情があるんでしょう？　でも、あんまり浅葱さんを泣かせるようなことはしないでね」

董がそう言って優しく笑う。喰えない人だ、と古城は溜息をついた。いつからからかわれていたのかさっぱり

わからない。だが、おっとりとした見た目には似合わず、彼女が肝の据わった女性だということだけは理解できた。あの藍羽仙斎が妻に迎えたことにも納得だ。

「行ってらっしゃい」

「どうも」

お世話になりました、と頭を下げて古城は董の車を降りた。

雪菜は、坂道の途中にある狭い交差点に立ち尽くしている。唇を結んだ彼女の表情は硬く、いつになく余裕をなくしているようにも感じられた。

「姫柊。ニャンコ先生は？」

周囲の景色を確認しながら、古城が訊く。

ニャンコ先生というのは、古城が勝手につけた雪菜の師匠のあだ名だ。相当優れた攻魔師らしいが、古城は彼女の使い魔である猫にしか会ったことがない。

「……って、どこだっけ。獅子王機関の詰め所って。たしかこの辺だったよな？」

「結界の術式が変わってるんです。わたしにも解呪できない形に」

雪菜が、抑揚の乏しい口調で言った。その冷え冷えとした声の響きから、雪菜が怒っているのだと古城は気づく。獅子王機関が、彼女の知らないところで、凪沙を事件に巻きこんだことを相当根に持っているらしい。

「姫柊も入れないってことか？　なんでわざわざそんなことをするんだよ？」

「わかりません。でも、あちらがそういうつもりなら――」

そう言って雪菜はいきなり背負っていたギグケースに手をかけた。彼女がケースから引き抜いたのは、折りたたまれていた銀色の槍だ。

格納状態だった槍の柄がスライドし、金属音とともに三枚の刃が展開した。ひと気のない早朝とはいえ、往来のド真ん中で槍を構えた雪菜に、古城は唖然とするしかない。

「ひ、姫柊!?」

「下がっててください、先輩――〝雪霞狼〟！」

全金属製の銀色の槍を、雪菜が乱暴に振り回す。

七式突撃降魔機槍と呼ばれる彼女の槍は、獅子王機関の秘奥兵器だ。魔力を無効化し、ありとあらゆる結界を斬り裂くという機能を持っている。

その効果は、獅子王機関の詰め所を覆い隠していた人払いの結界にも当然作用した。

キン、とガラスが砕けるような音を残して結界が消滅し、周辺の街並みの印象が変わる。

古城たちがそれまでなぜか見落としていた小さな路地が姿を現し、その奥に、寂れたアンティークショップの建物が見えた。見覚えのある獅子王機関の詰め所だ。

「無茶するな……」

「緊急時ですから」

呆れたように息を吐く古城に、雪菜は銀色の槍を構えたまま素っ気なく答えた。

真面目すぎるほど真面目な性格が災いして、雪菜には思いこみが激しい一面がある。それが暴走した結果がこれだ。凪沙のことを心配しての行動とはいえ、さすがにやばい。雪菜にあまり無謀なことをさせるなと、浅葱が警戒していた理由がよくわかる。

「普通に閉店してるな……そりゃそうか」

ようやく辿り着いたアンティークショップの扉に手をかけて、古城は気怠く首を振った。

今は元日の午前六時過ぎ。当然だが扉には鍵がかかっている。窓はカーテンに閉ざされて、店内の様子は窺い知れない。

「それにしても、ここってニャンコ先生がいないと、本当にただの骨董品店にしか見えないな。ここが獅子王機関の詰め所って話も、なんかの間違いだったりしないだろうな……？」

古城が軽い気持ちで率直な感想を口にした。特に深い意図はなかったのだが、それを聞いた雪菜は一瞬、泣き出しそうな表情を浮かべて、

「くっ……！」

そして彼女は、握っていた槍の穂先をアンティークショップの扉に向けた。扉をぶち破って、店内に入るつもりなのだ。そのことに気づいた古城は、慌てて雪菜を羽交い締めにして、

「ま、待て、姫柊！　店に押し入ってどうする!?」

「先輩、邪魔をしないでください！　放して！」

「いいから落ち着けって。誰もいないのに店に入っても意味ねーから！」

「でも……！」

「だいたい骨董品店がこんな元日の夜明け前から営業してるわけねーだろ。つか、獅子王機関の職員も正月休みじゃないのか？　いちおう公務員なんだろ？」

「こんなときに限って……そんなこと……！」

雪菜が悔しそうに肩を震わせる。

彼女が怒る気持ちも、わからないではなかった。本土では、おそらく今も魔導災害管理局（SDC）と名乗る獅子王機関の一部門が動いているのだ。

それなのに雪菜の上司たちだけが、正月休みと言われて納得できるはずがない。

「獅子王機関の本部には、直接連絡できないのか？」

「高神の杜は、外界から隔離されてますから」

「ほかの支部の連絡先は？」

「わかりません。わたしには」

古城が質問を続けるたびに、雪菜の声がか細くなっていく。なるほどな、と古城は重たい息を吐いた。剣巫の肩書きは与えられていても、雪菜は組織の末端に過ぎない。組織全体の情報を把握する手段は、彼女には与えられていないのだ。

「姫柊がなにも知らされてないってことは、獅子王機関は徹底的に情報を遮断して、俺たちを隔離するつもりなんだな。凪沙の撮った写真だって、偶然手に入ったようなもんだし。単なる連絡ミスってことなら、煌坂と連絡が取れなくなった理由に説明がつかないからな」

「……先輩は、どうしてそんなに落ち着いていられるんですか？　獅子王機関が凪沙ちゃんを事件に巻きこんだかもしれないんですよ!?」

雪菜が責めるような口調で古城に訊いてくる。古城は少し困ったように視線を空に向け、

「べつに落ち着いてるわけじゃないけどな。もともと獅子王機関をたいして信用してなかったから、裏切られてもショックが少ないっていうか」

「う……」

「あ、いや、べつに姫柊のことを疑ってたわけじゃないんだけど」

唇を噛んでうつむく雪菜に、古城が慌ててフォローを入れる。

「だけど前に浅葱に言われたことがあるんだよ。獅子王機関が、常に正義とは限らないって。組織の中で派閥や勢力争いみたいなものがあるのかも知れねーしな」

「組織の中の権力争い……ですか？」

雪菜が驚いたように目を瞬いた。同じ獅子王機関の中にも、信頼できる人間とそうでない人間がいる。基本、性根が真っ直ぐな雪菜だけに、そういう発想はなかったらしい。

「だから獅子王機関に姫柊の知らない一面があっても、姫柊が責任を感じることはないって話。ニャンコ先生はどうかわかんねーけど、少なくともあの煌坂が姫柊を裏切るとも思えないしな」

「そう……そうですね」

弱り切ったような表情で、雪菜がうなずく。完全に心の整理がついたわけではないにせよ、いちおう納得はしたらしい。獅子王機関のすべてが雪菜を裏切ったと、まだそう決まったわけではないのだ。

そして冷静さを取り戻した雪菜は、唐突(とうとつ)に頬(ほお)を赤く染めながら古城を見上げ、

「あの、先輩。そろそろ放してもらえると嬉(うれ)しいんですけど」

「……え？」

彼女の言葉を聞いて古城はようやく、自分が雪菜を羽交(はが)い締(じ)めにしたままだったことを思い出す。抱きかかえていても気にならないほど華奢(きゃしゃ)な雪菜の身体(からだ)だが、そのくせ意外なほど柔らかく、密着した部分がしっとりと肌に馴染(なじ)んでいた。

「ていうか、どこを触ってるんですか？」

「お、おお……悪い」

冷え冷えとした声で雪菜に言われて、慌てて彼女から手を放す古城。

「いえ、もういいです。元はといえばわたしのせいですし」

そう言って雪菜が服の乱れを直す。銀色の槍も折りたたまれて、ギグケースの中に再び仕舞われた。

「まあ、それはそれとして、獅子王機関の目的はわからないままか。手詰まりだな……」

古城は、重苦しい閉塞感を覚えて自嘲まじりに呟いた。

凪沙や牙城とは連絡が取れない。獅子王機関からは情報を遮断され、古城たちには神縄湖でなにが起きているのか知るすべはない。浅葱が調べてくれるとは言っていたものの、ネット回線経由の情報だけでは、やはり限界があるだろう。人工島である絃神島と違って、色濃く自然が残る神縄湖周辺には、浅葱が乗っ取れる電子機器がほとんどないからだ。

どうすればいい、と古城は自問する。

ひと気のない早朝の路上に、穏やかな声が響いてきたのは、その直後だった。

「お困りのようね、第四真祖――」

「っ!?」

古城と雪菜が、同時に声の方角へと振り返る。

最初に目に入ってきたのは影だった。眩い朝陽を背にしてたたずむ、ほっそりした人影。

古風な長い黒髪に、同じく古風な黒いセーラー服を着ている。逆行の中でもはっきりわかるほどの美形だが、世を拗ねたような目つきのせいで、ひどく冷たい印象を受けた。

「妃崎霧葉……！」

雪菜が、背中のギグケースに手を伸ばして身構える。

古城も重心を低くして、いつでも動ける姿勢を取った。

妃崎霧葉は政府太史局の六刃神官――対魔獣戦闘の専門家だ。獅子王機関の剣巫と同じ技術を使い、表裏一体の関係であるともいわれている。

ひと月ほど前のブルーエリジアムの事件で、彼女は雪菜とも戦った。

そのときの決着はまだついていない。

しかし今の霧葉には、再戦の意思は感じられなかった。背負った大型の三脚ケースにも、彼女が手を伸ばす気配はない。

「久しぶりね、姫柊雪菜。酷い顔ね。捨てられた子犬のように見えてよ？」

戸惑っている雪菜を見返して、霧葉が揶揄するように告げた。喧嘩を売っているわけではなく、こういう物言いしかできない少女なのだ。

「獅子王機関が神縄湖でなにをしているのか、知りたいのでしょう？　違って？」

「知ってるのか、あんた」

「ええ、もちろん。よかったら教えてあげましょうか？」

驚く古城を見返して、霧葉が嘲るように笑った。

彼女が所属する太史局は、内務省傘下の特務機関だ。組織の目的が重複しているため、獅子王機関とは利害が対立することが多い。だからこそ獅子王機関の動向もつかんでいたのだろう。

「本当はもっと早く伝えてあげたかったのだけど、あなたたちが往来で抱き合っていたから、声をかけづらくて困ったわ」

「なっ!?　ち、違っ！」

「抱き合ってたわけじゃねえ！」

見てたのかよ、と古城は赤面しながら霧葉を睨んだ。

霧葉は冷淡な微笑を浮かべて、そんな古城たちの反応を眺める。

「あなたたちに真実を伝えるのは構わないけれど、私たち太史局は獅子王機関と敵対している。それでも私の言葉を信じられて？」

「いいから早く聞かせろよ」

古城が獰猛に歯を剥いて、霧葉に先をうながした。

「獅子王機関が俺たちに聞かせて都合が悪い話なら、その情報を伝えることで得をするのは、あんたらだろ。そういう意味では信用してやるよ」

「なるほど。理屈は通ってるわね」

霧葉が感心したようにうなずいた。

彼女の目的は古城にもわかっている。獅子王機関の行動を妨害するために、太史局は古城を利用するつもりなのだ。だがそれは、古城が獅子王機関の敵になることを霧葉が確信しているということでもある。

「いいわ、すべて聞かせてあげる。後悔することになると思うけれど――」

真紅に染まる水平線を背にして、霧葉は最初のひと言を告げる。

それは古城たちに大きな決断を迫る、運命の一日の始まりだった。

第111章 脱出经路

Escape From Demon Sanctuary

1

古城が再び目を覚ましたのは、正午前のことだった。

意外なことによく眠れた。睡眠時間は三時間足らずだが、不思議と頭はすっきりしている。やるべきことがわかって覚悟が固まったせいかもしれない。

ベッドを抜け出した古城は、シャワーを浴びて服を着替えた。普段はあまり着る機会がない、彩海学園の冬の制服だ。ブレザーのジャケットの代わりに、少し厚手のパーカーを羽織る。

持ち出す荷物は多くない。自宅の鍵と携帯電話、そして浅葱から借りた改造スマホと専用の充電器だけ。どうせなにが起きるかわからないのだし、荷物は少なければ少ないほうがいい。

問題は必要なものを現地で買い揃えると、そのぶん出費がかさむということだった。古城の手持ちの現金だけでは、正直かなり頼りない。

まあ仕方ないよな、と自分自身に言い訳しつつ、古城は凪沙の部屋へと向かう。

当然ながら部屋の主は不在だった。それでも片付け魔である凪沙の部屋の中は、整理整頓が行き届いている。

古城は迷わず妹の机に近づいて、その引き出しに手をかけた。

「たしかこのあたりに隠してあったと思ったけどな」

やはり几帳面に整理された引き出しの中には、細々とした雑貨やシール類が大量に収納されている。それらの中から古城が探し当てたのは、一本の真鍮製の鍵だった。大事なものを机の引き出しの二段目に仕舞うのは、幼いころからの凪沙の癖なのだ。

同じ引き出しに隠されていた日記帳の存在も気になったが、そこをグッと我慢して、古城は洋服ダンスへと向かった。凪沙愛用の洋服ダンスには、頑丈な鍵付きの引き出しがついている。古城が探し求めているアイテムは、その中に眠っているはずだった。が、

「なんだこれ!?」

引き出しを開けた古城が目にしたのは、ところせましと詰めこまれた上下お揃いのパンツとブラだった。凪沙が普段使っているものとは、デザインや生地の高級感がまったく違う。どうやら勝負下着というやつらしい。

「鍵付きのタンスにこんなもの入れるなよ……！」

無表情にぼやきつつ、古城は引き出しの中をまさぐった。あえて言うまでもないことだが、古城の目的は妹の勝負下着ではない。探しているのはべつのものだ。やがて古城は苦労の末に、パンツの下に隠されていたキャッシュカードと預金通帳を探し当てる。

「とりあえず、これだけあればどうにかなるか」

古城は通帳の中から一冊を選びだし、預金残高を確認して息を吐いた。

残高十四万九千二百八十九円。高校生の貯金にしては多いのか少ないのか今イチわかりにくい微妙な金額だが、節約すればどうにか用は足りるだろう。

「悪いな、凪沙。使わせてもらうぞ」

不在の妹に心の中で詫びて、古城はキャッシュカードをポケットにねじこんだ。その直後、

「……なにをやってるんですか、先輩？」

ゾッとするほど冷たい声が、古城の背中に突き刺さる。

ぬおっ、と身体を浮き上がらせながら、古城は声の主へと視線を向けた。気配もなく古城の背後に立っていたのは、軽蔑したような表情を浮かべる雪菜だった。就寝中に慌てて起き出して来たのか、雪菜が着ているのは淡いグレーのフードつきパジャマだ。フードには動物の耳が縫いつけられており、遠目には着ぐるみのようにも見える。

「ひ、姫柊……どうしてここに……!?」

「こんなときのために、と凪沙ちゃんから預かった合い鍵です」

そう言って雪菜は、見覚えのあるキーホルダーと鍵を掲げてみせた。どうやら雪菜はその鍵を使って、勝手に玄関から入ってきたらしい。

「こんなときって、どんなときだ!?」

「現行犯だと思いますけど、これ以上説明が必要ですか？　誰かが勝手に凪沙ちゃんのタンスを開けたら反応するように、封印を施しておいたんです」

タンスの前に立っている古城にレンズを向けて、雪菜が、カシャ、とカメラのシャッターを切った。たしかにその写真だけ見ていると、古城が凪沙の下着置き場を漁っているようにしか見えないはずだ。だが誤解だ、と古城は凄まじい勢いで首を横に振り、

「違うっ！　探してたのは凪沙の下着なんかじゃなくて俺の銀行口座のカードだから！　俺が持ってると無駄使いするからって、あいつに取り上げられてたんだよ！」

古城が預金通帳の名義欄を、雪菜の前に突きつける。口座に預けてある金の大半は、古城が中学時

代に稼いだバイト代だった。深森の研究室の掃除や牙城の使いっ走りなど、手伝いとは名ばかりの強制労働によって得られた賃金をコツコツと貯めておいたその名残だ。

もともとは部活の遠征費の足しにする予定だったのだが、古城がバスケ部を辞めたことで、使い途がなくなっていた金だった。

「……そのお金でなにをするつもりだったんですか？」

雪菜がカメラを構えたまま、疑わしげな口調で訊いてくる。

古城は、うっ、と一瞬言葉に詰まって、

「いやこれは、そう、せっかくの正月だし、自分へのお年玉っていうか。初売りのバーゲンでパーッと使おうかな、と」

「制服の冬服を着てバーゲンですか……」

雪菜に半眼で睨まれて、古城は硬直したままダラダラと冷や汗を流した。

監視役である雪菜に気づかれないようにと、細心の注意を払って準備を進めていたはずが、よもや妹の下着置き場を開けたから、などという理由でバレるとは想定外にもほどがある。

「本土に行くつもりだったんですね、先輩」

「まあな」

古城が諦めて溜息まじりにうなずいた。雪菜の眉が、ピクッと不機嫌そうに跳ね上がる。

「わたしに黙ってこっそり、ですか？」

「だって姫柊は止めるだろ」

開き直ったような態度で古城が言った。そんな古城を、雪菜は生真面目な顔で見つめて、

「そうですね。先輩は吸血鬼の真祖ですから。〝魔族特区〟の中ならギリギリ許されても、本土を好き勝手に歩き回られたら大問題になると思います。見逃すわけにはいきません」

「えーと……そこんところは、なんとかならないだろうか」

「なりません」

「ですよネ……」

唇を歪める古城を睨んで、ほんとにもう、と雪菜は溜息をついた。

「そもそも先輩は、どうやって絃神島から出て行くつもりだったんですか。〝魔族特区〟への出入りには、厳重なメディカルチェックが義務づけられているのを忘れたわけじゃありませんよね？　先輩が第四真祖

だって確実にばれますよ」

「あー……まあ、そうなんだけどな」

古城が鬱陶しげに髪をかきあげる。孤島である絃神島からの脱出手段は、空路か海路に限られており、実質的にそれ以外の選択肢はない。そして空港と港には、それぞれ特区警備隊の部隊が常駐しており、未登録魔族の越境に備えていた。彼らの監視をかいくぐっての脱出が困難であることは、〝魔族特区〟の住人として、古城もよく知っている。

「なので、そこんところは、那月ちゃんにどうにかしてもらおうと思って」

「南宮先生に……ですか？」

古城の回答が意外だったのか、雪菜が驚いたように目を瞬いた。

「いくら南宮先生でも、先輩のメディカルチェックを免除させるのは難しくありませんか？」

「ああ、いや、そういうことじゃなくてさ」

凄腕の国家攻魔官である那月は人工島管理公社に顔が利く——が、それはしょせん絃神島の中だけの話だ。第四真祖である古城を、なんの根回しもなく島外に出すことは、那月の力をもってしても不可能だろう。そもそも傲岸不遜な那月には、その手の政治的な裏工作がいかにも苦手そうなイメージがある。古城も最初からそれは期待していなかった。

「出島審査をクリアしようと思ったら面倒だけど、島を出てしまえば誤魔化しも効くだろ？　だから那月ちゃんの空間転移でちょっと飛行機の機内まで連れて行ってもらおうかな、と」

「……つまり密航するつもりだった、というわけですか」

雪菜が呆れたように腰に手を当てた。古城は重々しくうなずいて、

「場合によっては、そう解釈できないこともないな」

「ほかに解釈のしようがありませんけど」

「非常事態なんだから仕方ねーだろ！　もっと穏便な方法があるなら俺だってそうするわ！」

古城がついに逆ギレ気味に叫ぶ。しかし雪菜の追及はやまない。

「仮にそうやって本土に渡ったとして、戻ってくるときはどうするつもりだったんですか？」

幼い子どもに教え諭すように、あくまで冷静に雪菜は質問を続けた。絃神島への入島審査は、外に出るときに比べても遥かに厳重だ。

「それについては臨機応変に対応しようかな、と」

古城はヤケクソ気味に堂々と胸を張る。

雪菜は頭痛をこらえるようにこめかみに手を当てて、

「なにも考えてなかったんですね」

「まあ、最悪、吸血鬼だって言えば、絃神島に強制送還されるんじゃないかと思ったんだが」

「そのときは凪沙ちゃんにも先輩の正体がバレますけど、それでよかったんですか？」

「そ……そうか……」

それはまずいな、と古城は頭を抱えた。〝魔族特区〟の住人でありながら、凪沙は重度の魔族恐怖症だ。古城が吸血鬼になったことを知ったら、彼女は凄まじい苦悩を抱えることになるだろう。それでは古城がわざわざ本土に行く意味がない。

「まったくもう……わたしに黙って一人で本土に行こうとするから、そうやって大事なことを見落とすんですよ」

「いや、それはあんまり関係ないと思うが……」

どことなく理不尽な雪菜の理屈に、古城が弱々しく反論する。

雪菜は、こほん、と小さく咳払いして、

「とにかく、すぐに着替えて来ますから大人しくここで待っててください！」

「待つって……どうして？」

「今から南宮先生のお宅に行くんですよね。密航の手伝いをお願いに」

不思議そうに小首を傾げて、雪菜が訊く。

古城は雪菜のその反応に逆に驚いた。彼女は古城を止めに来たのではなかったのか？

「まさか、姫柊も一緒に来るつもりなのか？」

「わたしが獅子王機関に与えられた任務は、先輩の監視です。先輩が本土に行くというのなら、当然わたしも同行します。そのための監視役ですから」

「いや、でもさっき見逃すわけにはいかないって……」

「私の目の届く範囲から出すわけにはいかないという意味ですけど」

雪菜がそう言って得意げに胸を張る。冷静に思い返してみれば、雪菜は一度も古城に行くな、とは言ってない。ただ古城の計画の杜撰さに呆れていただけだ。

「姫柊……」

一緒に行く、と力強く宣言する雪菜から、古城は思わず目を逸らしてうつむいた。

そして右手で顔を覆う。感極まってあふれ出す涙を、必死にこらえているような姿勢である。

「そ、そんな大げさに感激しないでください。凪沙ちゃんのために仕方なく先輩の不法行為を黙認してるだけですから！　そもそも先輩がわたしになんの相談もなく島を出ようとするのがいけないんですからね！」

思いがけない古城の過剰な反応に、慌てたのは雪菜のほうだった。古城がそこまで喜ぶとは、さすがに彼女も予想していなかったのだろう。

しかし古城本人は、感涙にむせいでいるという感じでもなく、雑な態度で首を振り、

「あ、いや……そういうことじゃなくて……」

「は？」

「いや、冷静になってみたら、姫柊のその服装が……ぶっ……」

ついに我慢の限界を迎えて、肩を震わせて笑い出す古城。

雪菜が着ているのは、動物の耳がついたフードつきパジャマだった。

ズボンの尻にはふわふわの尻尾も生えている。その恰好で真面目な会話をしているというシチュエーションが、古城の笑いのツボを刺激したのだ。

そして、ようやく笑われている理由に気づいた雪菜は、カッと頬を紅潮させて、

「――っ!?　違うんです、こ、このパジャマはこないだお泊まり会をしたときに凪沙ちゃんとお揃いで買ってきたやつで……か、可愛いじゃないですか……！」

「ああ、姫柊に似合うと思うぞ、そのカピバラ」

「オオカミです！」

「ぶふっ……！」

どう見てもカピバラにしか見えない雪菜のフードのデザインに、再び勢いよく噴き出す古城。お気に入りのパジャマを笑われた雪菜は、頬を大きく膨らませて恨みがましく古城を睨み、

「なんで笑うんですか、先輩の馬鹿っ！」

そんな緊張感のない旅立ち前の二人だった。

2

「チクッとしますよー」

消毒液の臭いが漂う窓口で、看護師が浅葱の腕に注射針を刺す。採取された血液はすぐに分析機

にかけられて、浅葱の細胞が人間のものだという解析結果が表示される。

「はい、問題はないですね。では、お名前と絃神市の住民登録番号をこちらに記入して、青の窓口に進んでください」

看護師から書類を受け取って、浅葱は小さく溜息をついた。

絃神中央空港の国内線出発ロビーである。すでに飛行機の搭乗手続きと手荷物の保安検査を終えて、現在は出島検査中。〝魔族特区〟の住人が絃神島の外に出るには、外国に行くよりも面倒な手続きを、いくつもクリアしなければならないのだ。

「毎回これが面倒なのよね。〝魔族特区〟だから仕方ないって理屈はわかるけど」

誰に言うともなく愚痴りながら、浅葱は次の窓口へと向かった。

頑丈なアクリルガラスで仕切られたブースの向こう側には、仏頂面の男性係員が座っている。係員は書類にザッと目を通すと、やる気のなさそうな表情で浅葱を眺め、

「藍羽浅葱さんね。お一人ですか？」

「はい」

喉元まで出てきた、見ればわかるでしょ、という言葉を呑みこんで、浅葱は愛想良く微笑んでみせる。それでも係員はにこりともしない。

「滞在先は？」

「東京です。都内で大学生をやってる姉に会いに」

「発熱、嘔吐、下痢などの症状は？」

「ありません」

係員からの事務的な質問に、浅葱は淡々と返事を続けた。どのみちこれらの質問は、マニュアルに定められた形式的な手続きにすぎないのだ。が、

「三カ月以内に吸血鬼に血を吸われたことは？」

「へ!?」

不意討ちのような係員の言葉に、浅葱は思わず変な声を出す。

係員は冷ややかな視線を浅葱に向けて、

「心当たりがあれば、四番の窓口で再検査を」

「あ、いや、ないです。全然なし！」

「……」

妙に焦って否定する浅葱を、係員は胡乱げな表情で見つめた。しかし、それ以上は特に追及されることもなく、浅葱は無事に出島許可のスタンプを手に入れる。

これで面倒な手続きはいちおうすべて終了だ。

「うー……余計な汗かいちゃったわ」

キャリーバッグを引きずりながら、浅葱は飛行機の搭乗口へと向かった。

そんな浅葱のコートの胸元から、妙に人間臭い合成音声が聞こえてくる。スマホのスピーカーを勝手に使って、しゃべっているのはモグワイだ。

『ケケッ、正直に言えばよかったんじゃねーか。第四真祖とベロチューはしたけど、まだ血は吸われてねーってよ』

「ベロチューもしたことないわよ！　ていうか、なんであんたがキスのことを知ってる!?」

苦々しげに唇を曲げて、浅葱が呻いた。浅葱が古城にキスをしたのは、妙なテロ騒ぎに巻きこまれた直後のことだ。当時の浅葱は古城が吸血鬼になったことを知らなかったし、そのせいか浅葱が古城にキスをした真意についても、うやむやにされてしまったような気がする。

まるでそれをからかうように、モグワイはケケッと挑発的に笑って、

『けどよ、嬢ちゃんも健気だな。わざわざ古城の兄ちゃんのために、本土まで行くなんてよ』

「べつに古城のためってわけじゃないから。久しぶりに姉貴に会いたかったのも本当だし」

強がりに似た口調で浅葱が言った。浅葱の姉は、大学進学を機会に絃神島を離れて、現在は都内で暮らしている。彼女に最後に会ったのは、半年近く前のことだ。

「それにいつまでもあたし一人だけ、カヤの外に置いとかれるのもむかつくでしょ。今ごろはどうせ古城の馬鹿も、どうやって本土に渡るかで悩んでるころだと思うわよ」

『ほう』

予言めかした浅葱の言葉に、なるほど、とモグワイが感心する。

妹に対して過保護な古城のことだから、本土まで凪沙を捜しに行く、と遅かれ早かれ言い出すことだろう。すると監視役を自称する雪菜も、当然、古城に同行するはずだ。

そして迷惑をかけたくない、などともっともらしい理由をつけて、二人が浅葱を置き去りにするのも確実だった。冗談じゃない、と浅葱は思う。

凪沙のことが心配なのは浅葱も同じだし、それ以上に真実を知りたいという気持ちがある。それに吸血鬼である古城と違って、浅葱は、合法的に絃神島を出ることができるのだ。凪沙の行方を調べるのは、ど

う考えても自分の役目だと浅葱は考える。

危険が伴うことはもちろん承知しているが、最初から危険だとわかっていれば、それなりの対策もできるはずだった。

「って……あれ？　搭乗口って四番じゃなかったっけ……？」

空港内が妙に空いていることに気づいて、浅葱は不意に立ち止まる。

元日ということもあって、空港の利用客が少ないのはわかる。だが、あまりにも少なすぎた。空港職員の数すら減っているというのは、さすがに異様な光景だ。

壁の電光掲示板を見上げても、特に変わった徴候はない。いくつかの便の発着予定時刻と、搭乗ゲートが変更されているだけ。どこの空港でも見かけるありふれた風景だ。

にもかかわらず、浅葱は本能的な違和感を覚える。それは浅葱だからこそ感知できた違和感。空港という巨大なシステムに隠れて、なんらかの処理が行われているという直感だ。

『まずいぜ、嬢ちゃん。特区警備隊だ』

モグワイがのんびりと警告してきたのは、浅葱が異変に気づいた直後だった。

「え!?」

『武装警備員十六名が、三班にわかれて職員通路を移動中だ。あと一分四十秒で包囲されるな。狙いは間違いなく嬢ちゃんだぜ』

「冗談でしょ!?　逃げ道は!?」

『このまま真っ直ぐ走って六十メートル先の階段だ。そこを降りれば誘導路に出られる。その先は運だが、建物の中にいるよりはマシなはずだ』

「ああもう！　なんで正月早々こんな目に遭うわけ!?」

キャリーバッグを抱え上げ、浅葱は階段に向かって走り出す。

どうやら浅葱が想像していたよりも遥かに、現実は危険に満ちているらしかった。

3

南宮那月の自宅は、人工島西地区にある八階建てのビルだった。見るからに金がかかった造りの高級マンションだ。噂によれば、そのマンションのビル全体が那月の所有物であり、彼女は最上階のワンフロアを、まるごと自宅として使っているらしい。

エレベーターで八階まで上がると、そこはもう那月の自宅の玄関になっていた。

「浅葱んち家もでかいけど、ここも大概だよな……」

もはや羨ましがる気にもなれず、古城は単純に感心しながら呼び鈴を鳴らす。

しばらくして廊下の奥から現れたのは、正月らしい晴れ着に身を包んだアスタルテだった。

「謹賀新年」

藍色の髪の人工生命体が、抑揚の乏しい口調で年始の挨拶を告げてくる。

古城と雪菜はそれを見て、今日が元日だったという忘れかけていた事実を思い出し、

「あ、あけましておめでとうございます」

「いきなり悪いな、アスタルテ。那月ちゃんに話があって来たんだけど、会えるか？」

慌てて頭を下げながら、どこか決まり悪げな気分でそう答えた。

よく見れば玄関のそこかしこには、門松や鏡餅などの正月用品が飾りつけられていた。おめでたくはあるのだが、世界有数の〝魔女〟の自宅というイメージは台無しだ。

「肯定」

アスタルテは無表情なまま、古城たちに小さな背中を向けた。おそらく、ついて来い、という意味なのだろう。古城と雪菜は互いにうなずき合って、那月の自宅に足を踏み入れる。

予想に反して室内の装飾はシンプルだった。壁や天井にはガラスが多用されていて、明るく未来的なイメージを受ける。那月の身体のサイズに合わせているのか、置かれている家具はどれも小振りで背が低い。小さな女の子が丁寧に飾りつけた、ドールハウスのような印象を受けるのはそのせいだ。

アスタルテが古城たちを案内した先は、広く開放的なダイニングルームだった。

晩餐会の会場かと思うようなやたらに長いテーブルの上には、豪華な料理を詰めた重箱がいくつも並んでいる。そこにせっせと皿を運んでいたのは、袴姿の外国人の女性だ。

銀髪をショートカットにした、凛々しい顔立ちの女騎士である。

「あれ？　ユスティナさん？」

「……古城殿!?　剣巫殿も！」

部屋に入ってきた古城たちに気づいて、彼女は、忍、と胸の前で合掌する。

「アルディギア聖環騎士団所属ユスティナ・カタヤ要撃騎士であります。皆々様めでたく新春をお迎えのことと謹んでお慶びを申し上げる次第です」

「ど、どうも」

仰々しいユスティナの挨拶に、古城たちは軽く圧倒された。相変わらず偏った日本の知識に妙に詳しい人である。

「ていうか、なんでユスティナさんが那月ちゃん家に？」

「はい。我が主君である王妹殿下に年賀の挨拶を奏上に参ったところ、ジャパニーズ・オセチ料理の準備を手伝うようにとのご下命を南宮攻魔官より拝しまして」

「そ、そうか」

要するに那月にタダ働きさせられている、ということらしい。

「王妹殿下って叶瀬のことか。そういやあいつも那月ちゃん家で暮らしてたんだっけ」

「御意」

古城の呟きをユスティナが肯定する。

模造天使事件の被害者だった夏音を、事件直後、後見人として引き取ったのは那月だった。さすがは教育者というべきか、那月はああ見えて意外に面倒見がいいのだ。

そしてそんな夏音と同様に、ここに棲み着いている住人はもう一人いる。

「おお、古城と雪菜ではないか」

テーブルクロスによじ登りながら、古城たちに馴れ馴れしく呼びかけてきたのは、身長三十センチにも満たないオリエンタルな美貌の人形だった。齢二百七十歳を超える古の大錬金術師、ニーナ・アデラードの成れの果てである。とある事情で身体の大部分を失った彼女は、残されたわずかな量の液体金属で肉体を再構成し、夏音にここで飼われているのだ。

「どうした？　年長者たるこの妾に、お年玉でもせびりに来たのか？」

ほとんど愛玩動物に近い立場でありながら、ニーナは尊大な口調で訊いてきた。

古城はそんな彼女にひらひらと手を振って、

「見栄は張らなくていいぞ。さすがにあんたや那月ちゃんに、年長者の威厳は求めてねーから」

「なっ！　貴様、古の大錬金術師たるこの妾へのその暴言、後悔するぞ。然るべき材料さえ揃えれば、貨幣などいくらでも作り出してやるものを！」

「偽金じゃねーかよ！　あんたの錬金術は信用できねーんだよ。言わせんな」

必死で自尊心を取り繕おうとするニーナに、古城がうんざりした顔で言い返す。

ニーナはたしかに優れた錬金術師だが、長生きし過ぎているせいか一般常識に疎い。彼女が錬金術で創り出す物質は、やたら高価な代償が必要だったり、そもそも現代では必要性がなかったり、どれも今イチ役に立たないのだった。

それを指摘されてふて腐れるニーナの背後から、新たにおっとりとした声が聞こえてくる。

「新年おめでとうございました、雪菜ちゃん。お兄さんも」

キッチンの奥から、お雑煮を載せたトレイを運んできたのは、銀髪碧眼の小柄な少女だった。振袖姿の叶瀬夏音だ。青地に銀通しの花柄の生地が、彼女の瞳と髪の色によく似合っている。

「おめでとう、夏音ちゃん……大丈夫？」

雪菜が夏音に駆け寄って、ぎこちない足取りの夏音からトレイを受け取った。

「ご、ごめんなさいでした。着物は慣れていないので、動きにくくて」

「うん。でも、すごく可愛い」

「アスタルテさんとお揃いでした。ユスティナさんに着て欲しいと頼まれてしまって」

仲睦まじく会話を続ける雪菜たちを眺めて、古城はかすかな胸の疼きを覚えた。二人は凪沙と仲がいい。もしこの場に凪沙がいたら、大はしゃぎで会話に参加したはずだと思ったのだ。

無事に凪沙を連れ戻すまで、その光景を実現することはできないが。

「……この料理、叶瀬たちが作ったのか？」

テーブルに敷き詰められた豪華な重箱を見下ろして、古城が訊いた。

夏音は嬉しそうに微笑んでうなずき、

「はい。お兄さんたちも、よかったら召し上がってください」

「いいのか？　助かる。そういや年が明けてから、なにも喰ってなかったんだ」

古城は、自分が空腹だったことを思い出して苦笑する。ここに来た本来の目的とは違っているが、なんにしても食事は必要だ。

「しばしお待ちを。直ちに食器を用意します」

ユスティナがそう言ってキッチンへと向かう。

雪菜は、少し落ち着かない様子でユスティナの背中を見送って、

「本当にいいんですか？　急に押しかけてきて、なんだか悪いような……」

「気遣いは無用だ。妾らも試行錯誤しているうちに少々作りすぎてしまってな」

いちばん役に立たなそうなニーナが、なぜか偉そうな口調で答えてくる。

「試行錯誤……？」

錬金術師の何気ない呟きに、古城はギクッと本能的な不安を覚えた。

液体金属生命体であるニーナはもとより、北欧アルディギア王国の軍人、修道院育ちの王族の娘、そして人工生命体の少女――伝統的な日本料理に詳しそうな人間が一人もいない。

彼女たちが作った料理ははたして、まともなおせちなのか、と古城は疑問に思う。

そんな古城の不安をよそに、夏音はせっせと料理を盛りつけていた。そして古城たちの前に差し出してく

る。雪菜やアスタルテはすでに着席しており、今さら嫌だと言い出せる空気ではない。無言の圧力に背中を押されて、テーブルに着席する古城。

「こ、これは……」

至近距離からマジマジと料理を眺めて、古城は更なる困惑を覚えた。

たしかに見た目はおせち料理に似ている。

しかしそこに盛りつけられていたのは、明らかにおせちとは違うなにかだった。

お椀の雑煮から漂ってくるほのかな香りは、コンソメスープの匂いである。

「このチラシとやらを見て、なるべく似せて作ってみた。純和風のおせち料理とは、いささか趣が違うかもしれんが気にするな」

百貨店のおせち料理カタログを広げて、ニーナが堂々と告白する。

恐る恐る料理に箸をつけた古城は、喉を焼くような強烈な辛さに苦悶して、

「気にするわ！　なんでおせちにチリビーンズが入ってんだ!?」

「うむ。元来マメというのは健康を意味する言葉でな、一年を通じてまめに働けるように、という願いをこめて、正月料理には欠かせない食材になっているのだ」

「いやだから黒豆とチリは違う喰い物だっての！　まあ、これはこれで美味いけれども！」

そう言いながら、コンソメ味の雑煮で口直しする古城。一方の雪菜は、伊達巻き卵とおぼしき食べ物を口に入れて微妙な表情を浮かべ、

「これはロールケーキ……ですか？」

「はい。お菓子作りは修道院で習っていたので得意でした」

「う、うん、美味しい」

満面の笑みを浮かべる夏音に、雪菜は微妙な表情で感想を伝えた。

古城はその間も黙々と食事を続行する。おせち料理だと思うからフェイントで動揺するのであって、ちょっと変わった創作料理のつもりで食べれば、べつに食べられないものではない。

「栗きんとんの代わりにモンブランが入ってるのはまあ許すとして……ぐ!?」

謎のおせち風料理にも慣れてきて、うっかり警戒を怠った古城は、新たな皿に箸を伸ばした瞬間、口元を押さえて噎せ返った。

「な、なんだこの臭い!?」

皿に美しく盛られていたのは、コハダの粟漬けに似た料理だ。出世魚とも呼ばれるコハダは、縁起がいいということで、やはり正月料理の定番である。

しかし古城の鼻を突く強烈な臭いは、明らかにそんな生やさしい料理のものではない。

「我が祖国アルディギア王国の伝統食であるニシンの塩漬けです。機密性の高い缶の中で二次発酵させることによって旨味が増すのです」

誇らしげな表情で説明したのは、ユスティナだった。

「ちょ……それって、まさか世界一臭い食べ物っていわれてる例の缶詰のことなんじゃ……」

古城は、あまりの臭気に涙を流して喘いでいる。

北欧出身のユスティナが、魚を漬けこんだ料理といわれて、真っ先にそれを連想したのは理解できるが、古城には刺激が強すぎた。それでなくても吸血鬼化したことで、古城は以前より五感が鋭敏になっているのだ。

「美味であります」

「よもや東洋の正月料理と北欧の郷土料理に共通点があるとは、意外だったな」

悶え苦しむ古城をよそに、ユスティナとニーナは、発酵して融け崩れたニシンを満足そうにつまんでいる。そもそも液体金属生命体のニーナは味がわかるのか、と疑問に思いつつ、

「まあ、おまえらが満足してるならそれでいいよ、もう」

そう言って古城は諦めたようにぐったりと言った。

そして古城は、ふと空席になったままの椅子に目を向けた。本来ならその椅子に座るはずの那月が、ダイニングに姿を現す気配はない。

「アスタルテ、那月ちゃんは……？」

「不明。お二人については、飯でも喰わせて待たせておけ、との命令を受諾しています」

「那月ちゃんの指示だったのかよ!?」

目の前に並べられた料理を眺めて、古城は愕然と呟いた。

ほかに来客があるわけでもないのに、どうして那月は時間稼ぎのような指示を出したのか。どういうことだ、と古城は戸惑う。

「悪いけど、あまり時間がないんだ。なんでもいいから那月ちゃんに会わせてもらえるか？」

とりあえず出された料理を大急ぎで平らげて、古城はアスタルテに頭を下げた。

いつになく真剣な古城の態度に、アスタルテは、逡巡するように淡い水色の瞳を揺らし、

「……命令受諾（アクセプト）」

やがて静かな声でそう言った。古城と雪菜（ゆきな）は顔を見合わせ、二人同時に立ち上がる。

「……お兄さん？」

古城たちの張り詰めた表情に気づいて、夏音（かのん）が不安そうに呟（つぶや）いた。

ふむ、とニーナが面白そうに目を細める。そのときにはもうすでにユスティナの姿は、ダイニングルームから忽然（こつぜん）と消えていた。

4

応接室とは名ばかりのだだっ広い空間で、那月は古城たちを出迎えた。

窓ひとつない薄暗（うすぐら）い部屋だった。彩海学園（さいかいがくえん）の教室よりも広大な室内に、アンティークの椅子（いす）がひとつだけぽつんと置かれている。わずかな照明器具を除けば、家具はほかになにもない。黒曜石（こくようせき）に似た艶（つや）やかな壁が、そんな寒々しい空間をぐるりと取り囲んでいる。

「どうした、暁古城（あかつき）。担任教師にお年玉でもせびりに来たのか？」

椅子に深々と座った那月が、皮肉っぽい微笑を浮かべて言った。古城は気怠（けだる）く首を振り、

「いいよもう、そういうのは。さっきニーナにも言われたし」

「だったらなんだ？　まさか補習の続きを受けに来たわけでもあるまい？」

「まあ、それとは少し違うけど、あんたに頼みがあって来たんだ」

「ふん？」

めずらしく真面目（まじめ）な古城の顔を見返して、那月が頬杖（ほおづえ）を突いたまま、早く言え、と続きを促した。古城は静かに呼吸を整えて、その言葉を口にする。

「本土に行きたい。手を貸してくれ」

「役所に行って査証（さしょう）をもらってくるんだな」

那月の回答は、ひどく素っ気ないものだった。

「発給手数料は三千三百円。ただし査証の申請には魔族登録（まぞくとうろく）が必要だ。貴様（きさま）が未登録魔族だとバレることになるが、構わんのか？」

「だからそういう話じゃなくて！　ちんたら手続きしてる時間がねーから、あんたに頼みに来たんだよ！」

古城が荒々しく言い返す。もちろん那月は、古城たちが焦っていることを最初から見抜いた上で、そんなふうにはぐらかしているのだろう。そのことが余計に古城を苛立たせる。

「那月ちゃんなら、審査をすっ飛ばして俺たちを絃神島の外に出すことくらい簡単だろ」

「仮にそれができたとしても、私には貴様のためにそこまでしてやる義理はないはずだが？」

「人の命がかかってるといってもか？」

そう言って古城は、スマホの画面を彼女の前に突きつけた。凪沙が撮影した魔法陣の写真だ。

人形のように精緻に整えられた那月の眉が、ほんの数ミリだけ跳ね上がる。

「なんだ、これは？」

「神縄湖をご存じですか？」

質問する那月に、逆に聞き返したのは雪菜だった。

那月は質問の意図を探るように、無感動な視線を雪菜に向ける。

「……南関東の丹沢にある人造湖だな。今は観光地としても知られている」

「はい」

雪菜が上着のポケットから、新聞記事のコピーを取り出す。今から四十年以上も前の日付が入った古い記事だ。それを雪菜に渡してきたのは、太史局の妃崎霧葉だった。

「現在、神緒多ダムがある土地には、かつてひとつの村がありました。人口三百人にも満たない小さな集落です」

「ダム建設の犠牲となって、湖の底に沈んだ村というわけか。悲劇的だが、よくある話だな」

退屈そうに脚を組み替えながら、那月が平坦な口調で言う。雪菜は曖昧にうなずいて、

「そうですね。でも、村がなくなったのは、ダム建設のせいではありません。ダムが完成する三年前までに、村は消滅していました」

「なぜだ？」

「当時の住民が、全員失踪したからです。痕跡すら残さずに」

感情を抑えた雪菜の言葉に、那月が初めてはっきりと興味を示した。

「原因は？」

「わかりません。本当に原因不明なのか、それとも公表されていないだけなのかということも。ただし沈んでしまったその村――旧・神緒多村には、犀木シャーマニクスという企業の研究施設がありました」

「シャーマニクス……呪装品機器のメーカーか。聞かない名だが、潰れたか？」

「はい」

雪菜が那月の推理を肯定した。

奇しくも神緒多ダムが完成した年に、犀木シャーマニクスは倒産している。当時の経営者や従業員たちの記録は散逸し、彼らの行方は一切知られていない。倒産の原因も不明のままだ。

「しかし妙だな。なぜそんな辺鄙な土地に研究所を造った？」

那月が、さして嬉しくもなさそうな口調で訊き返す。

「ここから先は推測ですが、神緒多地区には、墜落した軍用機の残骸が多く残っていました。それらに積まれていた物資の中に、なんらかの強力な呪物が含まれていたのではないかと」

「軍用機？　先の大戦中の機体ということか？」

「はい」

「その調査のために、わざわざ研究所を建てたというわけか。ずいぶんとご大層な呪物だな」

「そうですね。ですが、村民の失踪もその呪物が原因だとしたら、あながち大袈裟とも言い切れないのではありませんか？　あるいは神緒多ダムそのものが、その呪物を封印するために造られたものだとしたら――？」

「陰謀論としては悪くないが、説得力には欠けるな。貯水量六万五千トンの人造湖で封印しなければならないほどの呪物とはなんだ？」

「たとえば聖殲の遺産というのはどうでしょう？」

嘲るような那月の問いかけに、雪菜がムキになったように返答する。那月は、クッ、と喉を鳴らして笑い、

「どちらにしても四十年以上前の話だろう」

「ですが、もしも、その遺産が活性化する要因があったとしたら――」

「暁 凪沙、か？」

次第に早口になっていく雪菜の声を、那月のひと言が断ち切った。

雪菜の表情が驚愕に歪む。

「え……!?」

「聖殲か。たしか暁牙城の専門分野だったな。そして暁凪沙はかつて聖殲時代の遺跡の封印を、ひとつこじ開けたことがある」

「なんで……なんで那月ちゃんがそれを知ってるんだよ……!?」

驚いていたのは、古城も同じだ。

凪沙との連絡が途絶えたことを、古城たちはまだ那月に伝えていない。

ここで那月が、いきなり凪沙の名前を持ち出す理由はないのだ。彼女が最初から、すべての事情を把握していたのでない限りは。

「獅子王機関が隠蔽しているはずのその情報、おまえたちはどこで手に入れた？　太史局か？」

立ち尽くす古城たちを無表情に眺めて、那月が冷ややかに問い詰めてくる。

そこで古城は、ようやく理解した。古城たちがここに来る前に、那月に情報を洩らした者がいる。それができる人間は、古城が知る限りただ一人だけだ。

「まさか、妃崎のヤツ、那月ちゃんにも会いに来たのか？」

「おまえたちが来る直前にな」

那月はあっさりと肯定した。つまり那月は最初から、古城たちの目的を知っていたのだ。

「だったら先にそれを言え！　俺たちにグダグダ説明させる必要はなかっただろ！」

古城が怒り心頭で叫ぶが、那月は笑みさえ浮かべて首を振る。

「そうでもないな。貴様たちが、太史局の小娘になにを吹きこまれたのか確認できたしな」

「吹きこまれた？」

「太史局は獅子王機関と利害が対立していたはずだ。なのにどうして、あの目つきの悪い女を信用する気になった？　やつの言うことが真実だという保証はどこにある？」

「この写真が証拠だよ。凪沙のスマホに残ってたデータを偶然見つけたんだ。でもって浅葱が、こいつの裏を取ってくれた。太史局とは無関係にな」

「藍羽か。まったく余計な真似を」

それまで勝ち誇っていた那月の表情に、かすかな亀裂が生まれた気がした。

那月は優れた攻魔官だ。これが純粋な魔術がらみの事件なら、たとえ雪菜が相手でも、簡単に説得して丸めこんでみせただろう。根が素直な雪菜は精神的な揺さぶりに弱く、経験で那月に遠く及ばない。

しかし電子情報が絡めば話はべつだ。この絃神島には、電子戦で浅葱の右に出る者はいない。浅葱が本物だと保証した以上、この画像は間違いなく真実だ。霧葉からの情報を、古城たちが素直に受け入れる気になったのも、その真実の裏付けがあればこそ、だった。

「まあいいさ。心配しなくても貴様の妹には、暁 牙城がついているのだろう？　おまえが出て行っても話がこじれるだけだ。大人しくやつに任せておけ」

誤魔化すことを諦めた那月が、正面から古城たちを説得にかかる。

古城にとっては不愉快なことだが、那月の言葉にはいちおう筋が通っていた。凪沙を絃神島から連れ出したのは牙城だし、あの男には幾多の戦場を渡り歩いたという実績もある。

これが普通の状況なら、牙城を信じて任せるのが上策だ。

「それが出来たら苦労しねーよ」

しかし古城は、那月の提案を言下に否定する。古城の瞳に映っているのは、追い詰められたような焦燥と恐怖だった。

「ほかはともかく聖殲の遺産は駄目だ。あれはあいつの手には負えない。それに今回のことを仕組んだのは親父じゃねえ。ヤバイ予感がするんだよ」

言葉にできない不安に衝き動かされて、古城は激しく首を振った。

妃崎霧葉が、古城たちに語った情報はそれほど多くない。神縄湖の湖底に、聖殲の遺産とおぼしき呪物が沈んでいる可能性があること。獅子王機関が何年も前から、その呪物に興味を示していたこと。そして凪沙の来訪と時を同じくして、獅子王機関の政府向け窓口である魔導災害管理局（SDC）が動き出したこと――

自衛隊に封鎖された神緒多地区で、実際に起きている事態については、まだ太史局も把握できていないらしい。しかし、古城には、聖殲の遺産という言葉だけで十分だった。

かつて凪沙が重傷を負い、そして古城たちを数奇な運命に巻きこんだ遺跡――地中海の〝魔族特区〟で古城たちが出会ったものこそ、聖殲の遺産だったのだ。

凪沙が再び、聖殲の遺産と接触する。

それを想像しただけで、古城は心臓が押し潰されそうな恐怖を覚える。

「だから、頼む、那月ちゃん。力を貸してくれ」

古城が、今にも土下座しそうな勢いで那月に懇願した。

しかし那月は、これ以上ないというくらいにきっぱりとそれを拒絶する。

「断る」

「なんで!?」

「教え子の違法行為を止めるのに理由が必要か？」

まったく体温を感じさせない那月の声に、古城は完全に打ちのめされた。

そして直感的に理解した。

古城がどれだけの言葉を費やそうと、彼女を動かすことはできないと。担任だからという理由だけでなく、なにかべつの目的で、那月は、古城の絃神島脱出を阻止しようとしている。

あるいはそれは那月本人の意思ではないのかもしれない。

攻魔官である那月の背後には、人工島管理公社がある。

そして人工島管理公社には、古城を島の外に出したくない理由があるはずだ。世界最強の吸血鬼という貴重な手駒を、万一にも手放したくないという理由が――

「そうか。わかった」

「……先輩？」

圧し殺したような声で呟く古城を、雪菜が唖然としたように見つめてくる。

こんなにもあっさり古城が引き下がるとは、彼女も思っていなかったのだろう。

「もういいよ、那月ちゃん。あんたの立場も考えずに、勝手なことを言って悪かったな」

古城は穏やかに首を振り、そう言って那月に背中を向けた。

「待て、暁。どこに行く気だ？」

那月が眉を寄せて古城の後ろ姿を睨む。しかし古城は振り返らずに片手を上げて、

「ほかを当たるよ。邪魔したな」

「駄目だ」

那月が冷酷な声で宣告した。

その瞬間、古城たちの視界が波紋のように揺れて、広大な応接室の中に無数の人影が現れる。

なにが起きたのかすぐには理解できずに、古城は彼らの姿を呆然と眺めた。

古城たちを取り囲むように出現したのは、銃器を構えた武装警備員たちだ。

対魔族戦闘用の防護服と、最新鋭のサブマシンガン――特区警備隊特殊部隊の装備である。

「那月ちゃん!?」

人形めいた小柄な魔女を睨んで、古城が叫んだ。

これだけの人数を空間転移させられるのは、那月以外にはあり得ない。だがそれは、那月が完全に古城たちの敵に回ったことを意味している。

「おまえたちを行かせるわけにはいかない。ここで大人しくしていてもらうぞ、暁」

警備員たちを従えて、那月が言った。

それは絶望の言葉だった。

5

虚空から現れた武装警備員は八人だった。古城たちを挟撃するような形で、左右に展開した彼らの銃口は、すべて雪菜に向けられている。

そのことに気づいて古城は動きを止めた。雪菜の表情が屈辱に歪む。

「動くなよ、暁。獅子王機関の剣巫でも、毎分六百発のサブマシンガンの弾幕はよけきれん。低致死性のゴム弾だが、当たりどころが悪ければ怪我では済まんぞ」

那月が冷ややかな口調で告げてきた。

吸血鬼の肉体を持つ古城と違って、雪菜は生身の人間だ。たった一発の銃弾でも、彼女には致命傷になりかねない。那月はそれを理解した上で、雪菜を人質に使おうとしているのだ。

雪菜にしてみれば、それは侮蔑に近い。

自分の存在が第四真祖の弱点だと指摘されたも同然だからだ。

「わざと話を長引かせていたのは、わたしたちを包囲する時間を稼ぐためですか？」

雪菜が悔しげに声を震わせて訊いた。

すでに霧葉と接触していた那月は、古城たちが絃神島を出ようとしていることを知っていた。

だから古城たちの説得を続ける一方で、特区警備隊を呼び寄せていたのだ。夏音たちに歓待させたのも、古城たちを足止めするためだったのかもしれない。

およそ那月らしくない回りくどいやり方だ。

「那月ちゃん……どうしてそこまで……!?」

怒りよりも激しい困惑を覚えて、古城が呻く。

しかし那月は、人形のように無表情のまま古城を睥睨し、右手を上げた。

「そこの転校生だけならともかく、貴様を絃神島から出すわけにはいかないのでな。ほとぼりがさめるまで、私の結界でのんびりしていくといい。丁重にもてなしてやろう」

「ぐっ！」

全身に凄まじい衝撃を覚えて、古城が息を詰まらせた。意思を持つ蛇のように古城の全身に絡みついていたのは、虚空から撃ち出された銀色の鎖だった。

「――冬休みが終わる前には帰してやる。悪く思うな」

古城の背後に、陽炎のように揺らぐ空間の歪みが現れる。その空間の門を透かして、蜃気楼のように浮かんでいたのは、欧州の監獄島を思わせる巨大な建物の輪郭だった。

南宮那月が、自らの夢の中に構築した牢獄の世界――

凶悪な魔導犯罪者を幽閉するための〝監獄結界〟だ。

那月の夢の世界であるゆえに、その結界の中では、収監された魔導犯罪者はすべての能力を封じられる。それは世界最強の吸血鬼である第四真祖といえども例外ではない。

監獄結界に引きずりこまれてしまったが最後、古城にはもう脱出は不可能だ。

しかしそれがわかっていても、古城はどうすることもできずにいた。

「くそ!?　なんだ、この鎖……!?」

吸血鬼の持つ腕力を全開にしても、那月が放った銀鎖はびくともしなかった。

ネックレスと大差ない細さでありながら、凄まじい強度だ。しかも魔力を封じる力を持っているのか、古城は眷獣を喚び出すこともできない。

「先輩！」

抵抗虚しく門へと引きずられていく古城を、雪菜が焦りの表情で呼ぶ。

しかし手も足も出ないのは雪菜も同じだった。一瞬先の未来を視る剣巫の霊視をもってしても、八挺のサブマシンガンに狙われたら、そのすべての攻撃を回避するのは不可能だ。

そして彼女がわずかでも抵抗すれば、武装警備員たちは迷い無く引き金を引くだろう。

だから雪菜は動けない。ここで彼女が倒れたら、古城を監獄結界から解放する者がいなくなるからだ。しかも古城が監獄結界で時間を無駄にすれば、それだけ凪沙の身が危険になる。

背後に迫り来る門の魔力を感じて、古城は焦燥に歯軋りした。

余裕めかした奇妙な声が、予想外の方角から聞こえてきたのは、その直後だ。

「神々が鍛えた〝戒めの鎖〟か……さすがは那月だ、めずらしい魔具を持っているな」

「なに？」

那月の瞳が初めて動揺に揺れた。

「うおっ!?」

次の瞬間、古城を捕縛していた銀色の鎖が、突然、飴細工のように溶けてちぎれ飛ぶ。

反動でバランスを崩した古城の肩によじ登ってきたのは、液状化した金属の塊だ。ちぎれた銀鎖を呑みこみながら、それは小さな人形へと姿を変えた。

「物質変成……！　ニーナ・アデラードか！」

「正解だ、〝空隙の魔女〟」

液体金属の腕を鞭のように伸ばして、〝自称〟古の大錬金術師が、武装警備員たちの銃を次々に搦め捕っていく。あまりに非常識なその攻撃に、特区警備隊の精鋭たちも反応できなかった。金属部品を喰い尽くされたサブマシンガンが、武装警備員たちの手の中で崩壊する。

「ニーナさん!?　どうしてここに……!?」

ようやく銃口から自由になった雪菜が、銀色の槍を構えながらニーナに訊いた。

「夏音が主らのことを気にかけておったのでな」

ニーナが得意げに顎を上げる。ただならぬ様子の古城たちを心配した夏音が、こっそりとニーナに偵察を命じていた、ということらしい。

「なるほど……おまえの仕業か、アスタルテ」

不機嫌そうに唇を曲げて、那月が人工生命体の少女を睨む。

古城たちにも気づかれないまま、こっそりとニーナを運んできたのはアスタルテだった。彼女のメイド服のエプロンの下に、ニーナはこっそりと隠れていたのだ。

「あまり其奴を責めるな、〝空隙の魔女〟――主人の命令に逆らえぬ人工生命体の身でありながら、其奴なりに必死に古城のために尽くしたのだ」

無言で立ち尽くすアスタルテを庇って、ニーナが愉快そうに口角を吊り上げる。

もしかしたらアスタルテは、那月が古城たちを捕まえようとしていたことを、最初から知っていたのかもしれない。しかし彼女は、それを古城たちに伝えることができなかった。

だからアスタルテは、ニーナの偵察に協力したのだ。

人工生命体である彼女は、那月の命令に逆らえない。しかし、ニーナを連れてくるな、という項目は那月の命令には含まれていなかった。

「話はすべて聞かせてもらったぞ。ここはひとつ大人として、古城たちを気持ちよく送り出してやるのがスジであろう、〝空隙の魔女〟？」

「居候風情が偉そうな口を利く……！」

年長者であるニーナに淡々と諭されて、那月がイライラと吐き捨てるように言った。

その間、特区警備隊の隊員たちも、手をこまねいて見ていたわけではなかった。彼らは次々に電磁警棒を抜き、あるいは素手で古城と雪菜を襲ってくる。

「くっ！」

雪菜も即座に応戦するが、敵の数が多過ぎた。魔族すら圧倒する雪菜の近接格闘能力をもってしても、一瞬で八人もの武装警備員を無力化することは不可能だ。

警備員たちは四人がかりで雪菜を足止めし、残る四人で古城を狙ってくる。

対魔族戦闘の訓練を積んだ彼らに、素人である古城が格闘戦で敵うはずもない。やばい、と古城が表情を強張らせ、警備員たちが勝ち誇った瞬間、

「忍！」

彼らの背後に突如として現れたのは、袴姿の女騎士だった。完全に不意を衝かれた武装警備員たちを、彼女が次々に殴り倒していく。すべては一瞬の出来事だ。

「ユスティナさん!?」

「ご無事ですか、古城殿。不肖このユスティナ・カタヤ、王妹殿下の命により、助太刀いたします！」

唖然と立ち尽くす古城の前に跪き、ユスティナが慇懃に一礼した。

そして彼女は着物の袖から、手榴弾のような金属球を取り出した。床に叩きつけられたその球体から、真っ白な煙が噴出する。

「魔力攪乱幕か……姑息な真似を」

那月がギリッと奥歯を鳴らした。ユスティナが撒き散らした煙幕には、魔力の伝達を妨げる効果があったらしい。影響を受けるのは遠隔操作系の魔術だけだが、空間制御を得意とする那月にとっては、その妨害効果は絶大だ。

「ニーナ殿！」

「ふふん、任せよ」

ユスティナに呼びかけられたニーナが、指先から眩い閃光を放った。重金属粒子砲——いわゆる荷電粒子ビームである。

灼熱の閃光がビルの外壁を突き破り、非常階段へと続く脱出経路を無理やり造り出す。

「古城殿！　剣巫殿も今のうちに！」

特区警備隊の残存兵力を足止めしながら、ユスティナが叫んだ。

「悪い！　助かった！」

「ありがとうございます！」

ユスティナたちに礼を言って、古城と雪菜は非常階段へと向かう。空間転移を封じられた今の那月に、古城たちの追跡は不可能だ。

古城たちが脱出するのを見送って、ユスティナたちは那月に向き直る。

すでに武装警備員たちは全員、無力化済みだ。しかし、まだ那月が残っている。ユスティナとニーナの二人がかりでも、本気になった那月を止められるという保証はなかった。

魔力攪乱幕で魔術を妨害しているものの、魔女相手にどこまで効果があるかはわからない。

しかしユスティナたちの警戒にもかかわらず、那月が動き出す気配はなかった。

小柄な魔女は、むくれたように片頬を上げて、静かに溜息をついている。

「新年早々、派手に部屋を散らかしてくれたな、ニーナ・アデラードとそこの愉快な外国人」

那月はビルの外壁に穿たれた大穴を一瞥し、呆れたように二人を見た。

「ふふん。家主に弓引くのはちと心苦しいが、見逃せ、那月。どうしても戦り合うというのなら相手をするのもやぶさかではないが、主の魔術は妾とは少々相性が悪いぞ？」

倒れ伏した武装警備員の背中にあぐらをかいて、ニーナが獰猛に笑いかける。

那月は、その挑発を歯牙にもかけず、二人を追い払うように軽く手を振った。

「無用だ、ニーナ・アデラード。貴様らが特区警備隊の特殊部隊を潰してくれて助かった」

そして那月はゆらりと立ち上がった。苦しげに呻いている武装警備員たちを冷淡に見下ろし、かすかな怒気を含んだ声を出す。

「人工島管理公社の顔は立ててやったぞ。その結果がこのザマだ。ここからは私が好きにやらせてもらう。貴様たちの上司にもそう伝えろ」

那月の全身から放たれた凄まじい威圧感に、警備員たちの表情が恐怖に歪む。

ユスティナたちはその予想外の光景を、困惑しながら見つめていた。

那月のマンションから十分以上走り続けて、古城たちは駅前の繁華街に出た。

ショッピングモールでは初売りのバーゲンが行われており、元日とはいえ、人通りはかなり多い。さすがの那月も、こんなところで戦闘を仕掛けてくることはないだろう。そう思って古城は足を止める。そろそろ体力のほうも限界だ。

「ここまで来れば大丈夫か？」

「はい、多分。追跡妨害の術式を使えるだけ使っておきましたし」

式神用の呪符を握ったまま、雪菜が古城に答えてくる。

空間制御の魔術を使う那月には、たとえどんなに離れたところで、一瞬で追いつかれる可能性がある。しかし彼女が古城たちを見失っている間は、おそらく安全なはずだった。

「けど、参ったな。まさか那月ちゃんが、あそこまで強硬に反対するとは思わなかったぜ」

乱れた呼吸を整えながら、古城が弱り切った口調で呟いた。

那月が素直に密航の手助けをしてくれるだろうと、甘く考えていたわけではない。しかし、いきなり監獄結界にぶちこまれそうになるというのは、さすがに想像していなかった。

「特区警備隊を、真っ先に呼んでいたことも気になりますね」

「そういやそうだな……なんか那月ちゃんらしくないっていうか……」

古城は小さく顔をしかめて、雪菜の指摘に同意した。

那月は独立した国家攻魔官だ。特区警備隊の隊員ではない。そして那月が彼らに助けを求める理由もなかった。特区警備隊の特殊部隊よりも、那月一人の戦闘能力のほうが上だからだ。

そもそも那月の空間制御は、神出鬼没の奇襲攻撃において、もっとも効果を発揮する魔術だ。特区警備隊が得意とする集団戦には向いていない。本気で古城たちを捕らえる気なら、那月一人で戦うほうが効率的だったはずだ。

だが那月は、あえて特区警備隊に古城たちの相手をさせた。

つまりさっきの那月はまだ、本気を出していなかったのではないか――？

その可能性に気づいて古城はゾッとする。

おそらくあれは警告だったのだ。人工島管理公社が、古城の絃神島脱出を阻止するために動いている。その事実を古城たちに見せつけるために、あえて特区警備隊をぶつけてみせた。

そして、その特区警備隊の包囲を古城たちが破ったことで、人工島管理公社も那月に頼らざるをえなく

なった。那月は今度こそ誰にも邪魔されることなく、古城を捕らえることができる。

なんてこった、と古城は思わず天を仰いだ。密航の手伝いを頼むつもりが、結果的にとてつもない難敵を呼びこむことになってしまったらしい。

「――その様子では、交渉は決裂したようね」

絶望感に浸りながらとぼとぼと歩道を歩く古城たちに、突然誰かが話しかけてくる。

聞き覚えのあるその声に、古城はハッと顔を上げた。

通行人に紛れて街路樹の脇に立っていたのは、古風なセーラー服を着た黒髪の少女だ。

「妃崎霧葉……！」

雪菜が咄嗟に身構えながら、怒りの視線を霧葉に向けた。

古城も無意識に霧葉を警戒する。

ここで待ち構えていたということは、おそらく彼女は、古城たちが那月のマンションから、這々の体で逃げ出してくるのを目撃していたのに違いない。

「おまえ、俺たちのあとを尾けてたな!?　つか、おまえが余計なことを那月ちゃんに密告るから、話がややこしくなったんだろうが！」

「私は交渉の手間を省いてあげようと思っただけよ」

しかし太史局の六刃神官は、涼しげな口調でそう言った。

「あなたたちが南宮那月を頼るのは最初から予想できたことだし、彼女が協力してくれる可能性も五分五分だと思っていたから」

「いきなり監獄結界にぶちこまれそうになったけどな！」

古城はやつあたり気味に霧葉に怒鳴るが、霧葉は妙に真面目な表情でうなずいて、

「ええ。おかげではっきりしたわ」

「なにがだよ!?」

「南宮那月と人工島管理公社は、神縄湖で進行している計画の中身を、最初から知ってたということよ。おそらく獅子王機関と事前に話がついていたのでしょうね」

「なん……だと？」

断言する霧葉に不意を衝かれて、古城は軽い混乱を覚えた。

雪菜の表情が硬く強張る。霧葉の言葉が事実なら、那月や人工島管理公社に知らされていた情報

が、雪菜にだけは伝えられていなかったということになる。

当事者である凪沙や古城に、もっとも近い距離にいたにもかかわらずだ。

単純に放置されていたということでは説明できない。雪菜は、獅子王機関から故意に情報を遮断されていたのだ。

「乗りなさいな。こんなところで南宮那月に追いつかれたくはないでしょう？」

動揺する雪菜を満足そうに眺めて、霧葉は、駅前のロータリーに停めてあった車を指さした。目立たない紺色のワゴン車だ。

運転席に座っているのは、灰色の作業服を着て帽子を目深に被った、どこにでもいそうな男だった。おそらく彼も太史局の職員なのだろう。

古城たちは霧葉に促されるまま、ワゴン車の後部座席に乗りこんだ。太史局を信用したわけではないが、たしかに那月の追跡を逃れるためには、車による移動が効果的だと判断したのだ。

霧葉も古城たちと向かい合うように着座し、それを確認してワゴン車は走り出す。

「人工島管理公社は、神縄湖で起こっていることを、最初から知っていたと言いましたね？」

ワゴン車が駅のロータリーを出たところで、古風な黒髪の少女を睨んで、雪菜が訊いた。

「ええ、そうね」

膝の上に三脚ケースを抱いたまま、霧葉は笑い含みに答えてくる。

だったら、と雪菜は目を伏せて息を吸い、

「獅子王機関が南宮先生を使って、先輩を島から出さないように画策したということですか」

「ほかに筋の通った説明ができて？」

霧葉が悪戯っぽく微笑んで言った。

「もしかしたら彼女たちは、太史局以上に詳細な情報をつかんでいるのかもしれない。南宮那月にもう一度会って訊き出してみる？」

「その必要はねーよ。俺たちが現地で直接調べれば済むことだ」

古城が二人の会話を遮って言い放つ。

那月や獅子王機関の思惑は、古城たちが今さら確かめるまでもない。事情はどうあれ、彼女たちは古城の本土行きを妨害しようとしている。それだけわかっていれば十分だ。

「なるほど。いい理屈ね」

霧葉が、感心したように片眉を上げた。那月に裏切られてショックを受けたはずの古城が、あっさり立ち直ったことが意外だったらしい。

「だけど南宮那月の協力もなしに、どうやって本土まで辿り着くつもり？」

「問題ない。島を出る方法なら、もうひとつ心当たりがあるからな」

「〝オシアナス・グレイヴⅡ〟――アルデアル公ディミトリエ・ヴァトラーのクルーズ船ね」

古城の思考を読んだかのように、霧葉が先に答えてくる。

不本意そうに口を歪めて、古城は溜息まじりにうなずいた。

絃神港に停泊した巨大な外洋クルーザー〝オシアナス・グレイヴⅡ〟の所有者は、欧州〝戦王領域〟出身の吸血鬼ディミトリエ・ヴァトラーだ。特命全権大使の肩書きを持つヴァトラーには、那月や人工島管理公社も、おいそれとは手出し出来ないはずである。

絃神島から本土までの所要時間は、長距離フェリーで約半日。

さすがに飛行機の速度には及ばないが、この際、贅沢は言っていられない。

「あいつの船の中は治外法権で、人工島管理公社も手出し出来ないんだろ？　どうにか頼みこんで本土まで運んでもらうさ。正直、この手だけは使いたくなかったんだけどな」

「ずいぶん高くつきそうな手段ね」

「わかってるけど、ほかに手がないんだから仕方ないだろ！」

苦悩するように歯を剥きながら、古城は呻いた。

そもそもの問題はあのヴァトラーが、古城の頼みを快く聞いてくれるかどうか、ということだ。第四真祖に愛を捧げた、などと口先ではふざけたことを言っているが、基本的にヴァトラーは単なる戦闘狂であり、強者との殺し合い以外には、ほとんど興味のない男なのである。そんな男に願い事をすれば、代償として、どんな無理難題を吹っかけられるか予想もつかなかった。

古城が喧嘩を売られる程度で済めばまだマシで、最悪なのは、ヴァトラーが聖殲の遺産に興味を示すパターンだ。あまり考えたくないことだが、あの男も本土に上陸して、好き勝手に暴れ出すという可能性もゼロではない。

その危険性については霧葉も把握しているのか、仕方ないと言いたげに彼女は首を振り、

「ほかに手がないこともなくてよ」

「え？」

驚く古城と雪菜の眼前に、霧葉が差し出してきたのは一通の封筒だった。封筒の中身は、古城と雪菜の顔写真が入った書類と各種の証明書だ。

「これは？」

「太史局でビジネスジェットを一機用意したわ。絃神中央空港ではなく、企業用の民間飛行場を使うから、出島手続きも最小限で済む。これは偽造の身分証と必要書類」

「……どういうつもりだよ、妃崎霧葉？　なんでおまえが俺たちのためにここまでする？」

感謝よりも先に疑念を覚えて、古城は霧葉に訊き返す。

たしかに悪くない条件だった。太史局はれっきとした政府機関だ。そこが用意した身分証ということは、事実上、偽造ではなく正規の書類と同じ価値がある。これさえあれば、もはや密航などという不安定な計画に頼る必要はない。

それに民間所有のビジネスジェットがあれば、行動の自由度が大きく広がる。人工島管理公社といえども、民間機相手に好き勝手なことはできないはずだ。

しかし偽造証明書の作成に、ジェット機のチャーター――それだけでも相当な労力と金銭が動いているはずだった。古城と雪菜を本土に送り届けるためだけに、霧葉たちがそんな犠牲を払う理由が思いつかない。

しかし霧葉は、どこか愉しげな瞳を古城に向けて、

「獅子王機関に対する嫌がらせ、というだけでは不満かしら？」

「嫌がらせ？」

「知ってのとおり、太史局と獅子王機関の利害はなにかと対立してるの。同類嫌悪というやつかしらね。ただし今の太史局には、正面きって獅子王機関とやり合えない理由がある。先日のブルーエリジアムの失態がいまだに尾をひいてるから」

「……それと俺の手助けをすることに、なんの関係があるんだ？」

答えになっていない霧葉の答えに、古城は困惑して眉を寄せた。霧葉は皮肉っぽく目を細め、

「あなたが神縄湖を訪れることを、獅子王機関は極度に恐れている。だったら、それを利用しない手はないでしょう？　気が合わない隣人の家に、汚物を投げこむみたいなものよ」

「俺は汚物と同じ扱いなのかよ……!?」

古城が苛立ったように声を低くする。クスクスと失笑する霧葉。

「あなたにとっても悪い話ではないはずよ、第四真祖。私たちの利害は一致している。獅子王機関の一員としては複雑な気分でしょうけどね」

哀れむように小さく首を振りながら、霧葉が雪菜に視線を向けた。

「姫柊雪菜、あなたが望むなら、ここで降りても構わなくてよ。第四真祖の監視役なら、この先は私が引き継ぐわ」

「その必要はありません」

冷たい刃を含んだ六刃神官の少女の言葉を、雪菜は静かに受け流す。

一瞬の迷いもない雪菜の反応に、おや、と霧葉のほうが驚く気配があった。

「獅子王機関の思惑がどうであれ、わたしに与えられた任務に変更はありませんから。第四真祖の監視はわたしの役目です」

「そう……でも、それは第四真祖の希望も聞いてみるべきではなくて？」

「先輩の希望……ですか？」

「こう言ってはなんだけど、獅子王機関から見捨てられたあなたよりも、太史局のサポートが得られる私のほうが役に立つと思ってよ？　暁 凪沙の救出を優先するならね」

「う……」

雪菜が反論できずに唇を噛む。

見捨てられたという表現の正確性はともかく、獅子王機関が雪菜から多くの情報を隠蔽しているのは事実だ。もちろん雪菜にはジェット機の手配や、偽造書類の用意もできない。

「どちらが監視役に相応しいかは、あなたにだってわかるでしょう、第四真祖？」

「いや、相応しいとか相応しくないとか言われてもな……」

唐突に矛先を向けられた古城が、困ったように二人の少女を見比べる。

そんな古城を、霧葉は上目遣いに見つめて蠱惑的に笑い、

「言い忘れていたけど、私、実はこう見えてFカップよ？」

「――え？　マジで？」

古城は思わず霧葉のセーラー服の胸元を凝視した。霧葉の体つきはほっそりとして、とてもそこまでのグラビアアイドル的ボリューム感があるとは思えない。

「先輩……！」

これが着やせするタイプというやつか、と驚愕している古城へと、雪菜が軽蔑の眼差しを向けてくる。そして霧葉はふふっと愉快そうに微笑んで、

「嘘よ」

「嘘なのかよ!?」

古城はひどく傷ついた気分で喚いた。なぜか自分の胸元を押さえて、ホッとしたように息を吐く雪菜。霧葉はなおも悪戯っぽく笑って、

「期待させてしまったなら、ごめんなさいね。残念な胸で」

「いや、期待したとかそういうんじゃなくて、とにかく監視役は要らねーよ。あんたのことは今イチ信用できねーし。姫柊だって監視役だからってことじゃなくて、凪沙が心配で協力してくれてるだけだしな」

「そう……あなたがそう思うのなら、どうぞお好きに」

霧葉は、古城の言葉に対する雪菜の表情の変化を、面白そうに眺めている。

「つかさ、ジェット機を用意してくれるんなら、最初からそう言ってくれればよかっただろ。そしたら俺たちが那月ちゃんに襲われることもなかったのに――」

「その場合、あなたがたは私の話を信じられて？」

悪意の滲む笑みを浮かべて、霧葉は古城に訊き返した。

「南宮那月が敵に回ったから、太史局に頼る気になった。違って？」

「かもな……だけど、それは……」

「ええ、当然の判断ね。理解できるわ」

霧葉が他人事のように肩をすくめた。

彼女が所属する太史局が、生体兵器レヴィアタンを利用し、絃神島を沈めようとしてから、まだひと月も経っていない。結果的に太史局の目論見は失敗したわけだが、だからといって古城は今も、霧葉たちのことを百パーセント信用する気にはなれなかった。

今回も、那月を敵に回したことで追い詰められて、仕方なく霧葉の協力を受け入れたのだ。

そのことは霧葉にもわかっているのだろう。彼女は特に古城たちを責めようとはしなかった。

「ところで、この身分証……俺と姫柊が夫婦ってことになってるんだが……？」

渡された封筒の中身を確認して、古城が霧葉に質問する。

偽造された書類によれば、古城は電気工事会社に勤める十八歳の会社員で、雪菜はその妻、二十九歳ということになっている。

年齢のわりに少し大人びた雰囲気の雪菜だが、さすがにアラサーを名乗るのは無理があるのではないかと思われた。どことなく霧葉の悪意が透けて見える年齢設定である。

「身分を偽装するなら、成人扱いのほうがなにかと便利でしょう？」

「いやまあ、それはそうかも知れんけど……この夫婦って設定は必要か？」

「ほかに適当な偽造身分証が用意できなかったの。その辺はなんとか誤魔化して」

霧葉は悪びれもせずにそう言って、ぐ……と古城は沈黙した。やはりこれも遠回しな嫌がらせの一部なのだろうが、それでも今は彼女たち太史局に頼るしかないのだ。

一方、雪菜は意外にも不満を口にせず、古城の配偶者扱いになっている身分証を、満更でもない表情で眺めている。

「で、あんたたちが手配したビジネスジェットってのはどこにあるんだ？」

走り続けるワゴン車の窓に目を向けて、古城が訊いた。

「人工島北地区（アイランド・ノース）の産業飛行場よ」

「あそこか……」

霧葉の答えに、古城は小さく顔をしかめる。

北地区の産業飛行場は、絃神市内にある五カ所の民間飛行場のひとつだった。古城も以前に使ったことがあるが、あまりいい思い出とはいえない。そのときに乗った飛行機には、結局、太平洋のど真ん中の無人島に置き去りにされてしまったからだ。

だから古城は、雪菜が唐突に表情を凍りつかせたのを見ても、特に驚きはしなかった。

てっきり当時の恐怖が甦ったせいだと思ったのだ。が――

「止めて！　車を止めてください、早く――！」

雪菜が身を乗り出して運転手に叫び、そのただならぬ気配に、霧葉もすぐに反応した。

二人の少女が見つめていたのは、交通量の少ない海岸沿いの直線道路――なにもない路上の空間だ。

「え!?」

困惑したのは運転手だった。言われるままにブレーキを踏んで、ワゴン車を路肩に寄せようとする。ハザードランプのスイッチに手を伸ばそうとしたのも、運転手として当然の行動だ。

同心円状の巨大な網が、路上に忽然と浮き上がったのは、その直後のことだった。

蜘蛛の巣によく似た、幾何学的な美しい網だ。

巨大な円網を構成しているのは、虚空から吐き出された銀色の細い鎖である。速度を落としきれなかった紺色のワゴン車が、その網の中へと正面から突っこんで搦め捕られる。

「う、うわあああああああっ!?」

フロントガラスが細かくひび割れ、膨張したエアバッグに埋もれて運転手が悲鳴を上げた。

だが、その前に霧葉は動いていた。

古城たちの背後にあるワゴン車の荷室の扉へと、凄まじい威力の掌底を叩きこんだのだ。

リアゲートのパネルが吹き飛んで、古城たちの背後がぽっかりと開く。

「な、なんだ!?」

驚きで硬直した古城の右腕を雪菜が、そして左腕を霧葉がガッチリと抱えた。二人は古城を引きずるようにして、そのまま走行中の車から飛び降りた。

対立関係にあるとは思えない見事な連携プレイだった。六刃神官の異名は〝黒の剣巫〟――所属する組織が違っていても、雪菜と霧葉は、まったく同じ体術を使うのだ。

「うおおおおおおっ!?」

危なげなく着地した雪菜たちとは対照的に、古城は、車から飛び出した勢いのまま背中から地面に転がった。しかしそうでもしなければ、今ごろ古城たちは銀鎖の網の中に、ワゴン車ごと引きずりこまれていただろう。

「行かせない、と言ったはずだぞ、暁古城」

戦慄する古城たちの頭上から、高圧的な声が聞こえてくる。

虚空に吊り上げられたワゴン車の屋根に、音もなく着地したのは、日傘をさした豪華なドレスの女だ。人形を思わせるあどけない美貌が、古城たちを無表情に見下ろしている。

「那月ちゃん……！」

闇色の魔力に包まれた那月の名前を、古城は苦痛に呻きながら呆然と口にした。

しかし那月は、もはやなにも答えない。

警告の代わりに吐き出されたのは、槍のように降りそそぐ無数の銀鎖の弾幕だった。

第四章　空隙の魔女
The Witch Of The Void

1

銀色の火花が、真昼の空を埋め尽くす。

絶叫を思わせる甲高い轟音が、古城の鼓膜を震わせた。金属同士が激しくぶつかる、戦場の空気にも似た荒々しい響きだ。

那月が虚空から放った無数の銀鎖を、雪菜が〝雪霞狼〟で撃ち落としたのだ。

「跳びなさい、第四真祖！」

「う、うおっ！」

雪菜一人では、那月の攻撃すべてを防げない——咄嗟にそう判断した霧葉が、古城の背中を突き飛ばすように押した。古城は路肩にあったコンクリート製の堤防を乗り越えて、その下の砂浜へと滑り落ちる。

古城を追って跳躍しながら、霧葉は、三脚ケースから自分の槍を引き抜いた。柄の部分がスライドして伸長し、音叉状にわかれた二本の刃が螺旋状に回転しながら展開。そうやって出現した鉛色の双叉槍で、霧葉は、古城を狙っていた新たな銀鎖を迎撃する。

空間転移の魔術によって、那月が古城たちの前に出現した。

雪菜もそれを追って、砂浜へと着地。樹脂製の白砂を敷き詰めた人工の海岸で、古城たち三人は那月と対峙する形になる。

「そう……暁古城を逃がしたのではなく、ひと気のない場所に移動するのを待ってたのね。違って、〝空隙の魔女〟？」

双叉槍を構えた霧葉が、不機嫌そうな目つきで那月を見た。

逃走用のワゴン車まで用意して追跡を撒いたつもりが、結局、那月の掌の上で踊らされていたのだ。霧葉にしてみれば、ひどくプライドを傷つけられる展開だろう。

「正解だ、小娘。あんな街中でそこの馬鹿に暴走されたら、後片付けが面倒だからな」

那月が無関心な声で答えてくる。まるで霧葉の存在など気にも留めていないという態度だ。それが更に霧葉の神経を逆撫でする。

ぐ、と槍を握る手に力をこめる霧葉だが、さすがに那月に斬りかかるような無謀な真似はしなかった。那月の言葉が見え透いた挑発であることは、もちろん霧葉にもわかっているのだ。

「俺を絃神島から出すわけにはいかない、と言ったな……」

代わりに低く呟いたのは、古城だった。

拳を固めた古城の全身から、かすかな怒気が滲み出る。さすがにここまで追い詰められれば、古城とて覚悟を決めないわけにはいかない。那月が本気で妨害してくるなら、古城も彼女と戦うしかないだろう。

「だからなのかよ、那月ちゃん!?　そんなことのために俺と戦う気なのか!?　なあ!?」

「教師をちゃん付けで呼ぶな、馬鹿者」

畳んだままの扇子の先端を、那月が無造作に古城に向けた。

その瞬間、古城の額を、凄まじい衝撃が襲ってくる。鉄槌で殴りつけられたような激痛に、古城はよろめいて片膝を突いた。

古城の両脇に立っていた雪菜と霧葉が、唖然としたように息を呑む。油断なく身構えていた彼女たちですら、那月の攻撃には反応できなかったのだ。

「ぐ……っ」

「べつに貴様らと戦闘ごっこがしたいわけじゃない。私はあの蛇遣いと違って、好きこのんで面倒な思いをする趣味はないからな。貴様が大人しく監獄結界に入るというなら、痛い思いをしなくて済むぞ？」

優雅に日傘を傾けたまま、那月が冷酷に伝えてくる。

古城はギリギリと歯を軋ませながら顔を上げ、

「そんなことが……できるわけねーだろ……！」

「一人でいるのが寂しいなら、そこの転校生を同伴させてやってもいいが……それとも藍羽のほうがよかったか？」

「そういうことを言ってるんじゃねえよ！」

ふらつきながらも立ち上がって、古城は荒々しく那月に吼えた。

「俺は凪沙を助けに行く。そのあとなら補習だろうが監獄結界だろうがつき合ってやる。だから今は見逃してくれ！　それともあんたが、俺の代わりに凪沙を連れ戻してくれるのかよ!?」

「暁凪沙を連れ戻す……か」

那月は小さな溜息を洩らし、冷厳な眼差しを古城に向けた。

「そんなことが出来ると本気で思っているのか？」

「なに!?」

「ああ、違うな。そういう意味じゃない。暁凪沙はもちろん無事に帰ってくるはずだ。貴様が余計なことをしなければな」

怒りをあらわにする古城の姿に、那月が小さく首を振る。そして彼女は、古城を哀れむように目を伏せて、

「戻ってこられないというのは、貴様のことだよ、暁古城」

「……どういう意味だよ」

「もし神縄湖の底に沈んでいるのが、獅子王機関の期待どおりのものだったとすれば、そいつと接触すればおまえは無事では済まない」

ためらいなく告げてくる那月の口調に、古城はかすかな動揺を覚えた。ただの脅迫では説明がつかない真剣さを、那月の言葉に感じたからだ。

「なんでそんなことが言い切れる？」

「聖殲の遺産というのは、そういうものだからだよ。それは貴様も経験しているはずだがな」

那月が悲しげに微笑する。

なんのことだ、と戸惑う古城の脳裏に、断片的な無数の映像が、前触れもなく怒濤のように押し寄せて来た。灼けつく陽射しに炙られた岩だらけの大地。氷の柩。その中に浮かぶ虹色の髪の少女。そして血の匂い――

「ぐ……お……!?」

「先輩!?」

強烈な頭痛に襲われて呻く古城を、雪菜が咄嗟に抱き支える。

霧葉の瞳に浮かんでいるのは困惑だ。彼女は古城が、記憶を喰われてしまったことを知らない。そしてその失われた記憶の断片が、古城を苦しめるということも。

「どうやら話はここまでのようだな」

苦悶する古城を見下ろして、那月が酷薄に呟いた。

どのみち今の古城には、彼女に逆らうだけの力が残っていない。押し寄せてくる記憶の奔流に、意識を保つだけで精いっぱいなのだ。

「続きは監獄結界で聞かせてやろう。貴様が本気でそれを知りたいと望んでいるのならな」

那月が静かに左手を掲げた。彼女の頭上に、波紋のような空間の揺らぎが生じて、そこから銀色の鎖が放たれる。

「ふざけん……な……くそ……！」

その鎖に右腕を搦め捕られながら、古城は那月を睨めつけた。吸血鬼の筋力を全開にして、空間の揺らぎに引きこもうとする鎖をどうにか振りほどく。

「第四真祖の存在と、聖殲ってやつが繋がってるとして、獅子王機関はどうしてそんなものに凪沙を巻きこんだ!?　あいつは関係ないだろうが！」

「関係ない……か。本当にそう思うのか？」

古城の反論を嘲るように笑って、那月が意味ありげな口調でそう言った。

その言葉の意味が、古城にはわからない。

凪沙は吸血鬼ではないし、彼女が持っていた霊能力はすでに失われている。第四真祖とも、もちろん聖殲とも彼女は無関係だ。無関係のはずだった。

「……っ!?」

しかし那月の問いかけに、雪菜がはっきりと動揺する。雪菜の横顔に浮かんでいたのは、隠しきれない恐怖の相だった。

「心当たりがあるという顔だな、転校生」

雪菜の狼狽を見逃すことなく、那月が静謐な口調で訊いてくる。銀色の槍を握り締めたまま、雪菜は無言で首肯した。

「まさか……アヴローラ……か？」

怯えたような雪菜の反応に、古城は彼女が隠そうとしていた真実に気づいた。

十二番目の〝焔光の夜伯〟――アヴローラ・フロレスティーナから第四真祖の力を受け継いだのは古城だ。そしてアヴローラはもういない。〝原初のアヴローラ〟と呼ばれる邪悪な魂から凪沙を救うため、自らを犠牲にして彼女は死んだのだ。

だが、もし今も彼女の魂が残っていたとしたら――？

強力な霊媒の力を持つ誰かが、彼女の魂をつなぎ止めていたなら、それはあり得ないことではない。そう、不可能ではないのだ。かつての暁凪沙のような異能の霊媒の力があれば――

「アヴローラが凪沙の中に残っていたのか!?　聖殲の遺産ってやつを調べるのに、アヴローラを利用するつもりなのかよ、あいつらは!?」

混乱から完全に立ち直る前に、古城は怒りにまかせて叫んでいた。

薄々気づいていた、というわけではない。だが、納得できることも多かった。強力な霊媒であったはずの凪沙が、霊能力を失った理由。そして原因不明の彼女の衰弱。それらがアヴローラの魂をつなぎ止めるための代償といわれれば、古城の疑問のいくつかは解消する。

おそらく凪沙も、意識して能力を使っていたわけではないのだろう。

しかし、その結果としてアヴローラの魂に安寧がもたらされたのであれば、古城には凪沙を責めることができない。むしろ妹を誇りにすら思う。

そんな凪沙とアヴローラの魂を、勝手な都合で利用しようとするのなら、絶対に許せないと古城は思う。たとえそれが獅子王機関の仕業であってもだ。

「ひとつだけ保証してやろう。獅子王機関に暁凪沙を危険に晒す意思はない。その逆だ。自分たちの目的を果たすためにも、連中は死に物狂いで貴様の妹を護ろうとするだろう」

古城の怒気を正面から受け止めて、那月が淡々と告げてきた。

無感情な彼女の顔を見返して、古城はゆっくりと息を吐く。那月が真実を口にしているという保証はなにもない。だが、言葉少なな彼女のことは、なぜか不思議と信じられた。

「そうか……それを聞いて安心したよ」

着ていたパーカーを脱ぎ捨てて、古城は無意識に小さく笑う。

「凪沙が危険な目に遭わないとわかっていたから、那月ちゃんは獅子王機関に協力したんだな」

「当然だ。貴様の妹も、私の教え子であることに変わりはないからな」

那月が躊躇なく答えてくる。予想どおりの彼女の答えに、古城は満足げにうなずいて、

「それに姫柊も、獅子王機関に裏切られたわけじゃなかった……だろ？」

「あ……！」

雪菜が大きく目を見開いて古城を見た。霧葉がつまらなそうに鼻を鳴らす。

獅子王機関に対する忠誠心と、凪沙への友情の板挟みになっていた雪菜にとって、那月の言葉は救いだった。獅子王機関は凪沙を犠牲にしようとは考えていない。それがわかっていれば、雪菜も獅子王機関を信じることができる。彼女が苦悩する理由は半減するのだ。

「おかげであんたを尊敬したままでいられるよ、那月ちゃん。今からあんたをぶっ倒してでも、俺は本土に行かせてもらう――違う、行かなきゃなんねーんだよ！」

古城の全身から噴き上がったのは、熔岩にも似た濃密な魔力の奔流だった。

那月を信頼しているからこそ、罪悪感なく彼女と戦うことができる。矛盾している理屈だが、それが古城

の本心だ。

「聖殲の遺産ってやつを手に入れるために、第四真祖の力が必要だというのなら、その役目を果たすのはアヴローラじゃねえ。この俺だ。どんな理屈をつけようが、凪沙やアヴローラを勝手な都合で利用しようとするやつは俺が潰すぞ！　ここから先は、俺の戦争だ！」

「ふん……」

魔力をこめた拳で殴りかかる古城を、那月は扇子の一閃で押し留めた。

那月が新たに放った銀鎖が、四方から古城を襲ってくる。爆発にも似た魔力の放出で、それを次々に撃ち落とす古城。しかし那月の攻撃はやまない。そして、かわしきれないと思われた古城の死角からの攻撃を、激しい火花とともに撃ち落としたのは銀色の槍の一閃だった。

「いいえ、先輩。わたしたちの戦争、です――！」

苦悩から解き放たれたような華やかな笑顔で、雪菜が古城の傍らに着地する。

「――姫柊!?」

「ようやくわかりました。どうして獅子王機関が、わたしを先輩の傍に残したのか」

那月を見つめる雪菜の瞳に、彼女本来の強い光が宿っている。

「たとえ先輩がどこに行こうと、最後まで一緒に行動して、先輩の暴走を止められる監視役が必要だったんです。それが結果的に、獅子王機関自身の障害になったとしてもです。だからわたしにはなにも知らされなかった。わたしが先輩に敵と見なされることがないように――」

「ずいぶん身勝手な解釈だが、たしかにあり得ない話ではないな。あるかどうかもわからない聖殲の遺産と違って、第四真祖は今現実に存在する危険物だからな。野放しにはできまいよ」

那月の唇に浮かんでいたのは微苦笑だった。

獅子王機関の総意ではないにせよ、雪菜は古城の監視役として残された。見限られたのではない。その逆だ。たった一人で世界最強の吸血鬼を制御可能な切り札として、雪菜はすべての情報から隔離されていたのだ。

「それがわかったところでどうする？　私の敵になるか、獅子王機関の剣巫？」

那月の小柄な身体が、重力を無視してふわりと浮かぶ。

彼女の周囲の空間が、炎のように不規則に揺らめいた。本気の古城に勝るとも劣らぬ膨大な魔力が、那月の肉体を取り巻いている。

「退いてくれ、那月ちゃん！　いくらあんたでも、俺と姫柊が本気で相手をしたら――」

「ずいぶん面白いことを言うな、教え子ども」

ヒュン、と那月が左腕を一閃した。

その直後――声もなく背後へと飛ばされたのは、槍を構えていたはずの雪菜の身体だ。激しい砂煙を噴き上げながら、四、五メートルほど吹き飛んで、彼女は砂浜へと叩きつけられる。

「姫柊ッ!?」

受け身も取れずに倒れ伏す雪菜を、古城は信じられない気分で眺めた。

雪菜がここまで一方的にやられた光景を、古城はこれまで見たことがない。霊視による未来予知も、〝雪霞狼〟の魔力無効化能力も、那月の攻撃を防ぐことができなかったのだ。そして、

「がっ!?」

那月が視線を向けてきた瞬間、古城の視界が、ぐらりと揺れた。苦痛も衝撃もなかったが、酩酊したように平衡感覚が失われる。

空間制御の魔術によって、脳を直接揺らされたのだと古城は直感した。直接的な負傷が与えられたわけではないだけに、吸血鬼の回復能力も役に立たない。

抵抗することもできずに遠のきかけた意識を、古城は必死でつなぎ止める。

「二人がかりなら私に勝てるとでも思ったか？　あまり年長者を舐めるなよ？」

万華鏡のようにひび割れた視界の中で、那月が蔑むように古城を見下ろしている。

そして彼女はくるりと日傘を回し、無数の鎖が、動けない古城へと放たれた。

2

「そこの女の子、止まりなさい！　止まれ！」

黒ずくめの防護服に身を包んだ男たちが、空港内の連絡通路を走っている。

彼らの足音を背後に聞きながら、浅葱は階段を駆け下りていた。男たちの正体は特区警備隊の空港警備部隊。それも対魔族用の銃器で武装した攻魔班だ。

もちろん浅葱が、そんな連中に狙われる理由はないのだが、しかし現実に彼らは浅葱をしつこく追跡してくる。

「警告に従わない場合は、魔族特区条例に基づいて武力を行使します！」

「え!?」

思わず振り返った浅葱の頭上で、ガラスが粉々に砕け散った。単なる威嚇にしてはやたらに正確な照準だ。

「ちょっ……どうなってるのよ、モグワイ!?　あいつら本当に撃ってきたわよ！」

降りそそぐガラスの破片を必死で避けながら、浅葱は相方の人工知能に向かって怒鳴った。モグワイは明らかに面白がっているような態度でクックッと笑い、

『魔族捕獲用の粘着ポリマー弾だな。要するに接着剤の塊だ』

「捕獲用!?　普通にガラスとか割れてるんだけど!?」

『まあ、接着剤の塊でも思いっきりぶつけられたら痛いだろうしな』

「なにそれ!?　なんであたしがそんなんで狙われてるのよ!?」

『要するに、嬢ちゃんを絃神島から出したくない連中がいるってことだろ』

興奮した口調で叫ぶ浅葱に、モグワイが冷静に答えてくる。

浅葱が特区警備隊に追い回される羽目になったのは、本土に向かう飛行機の搭乗直前のことだった。それまで彼女が誰かに狙われていたという事実はない。絃神島内の監視カメラすべてを掌握するモグワイが、浅葱に対する尾行に気づかないはずがないからだ。

「やっぱり例の凪沙ちゃんの事件がらみってわけ!?」

駐機場横の貨物積み下ろし口を、浅葱は息を弾ませながら駆け抜けていく。

立ち入り禁止区域のはずだが、幸いなことに浅葱を咎める空港職員の姿は見当たらなかった。特区警備隊の連中が、事前に彼らを追い払っていたらしい。

『次の角を左だぜ、嬢ちゃん』

警備員たちの動きを先読みして、モグワイが指示を出してくる。すでに自分の現在地すらわからなくなっている浅葱は、その指示に黙って従うしかなかった。が、

「――って、行き止まりじゃないのよ!?」

いきなり袋小路に追い詰められて、浅葱は呻いた。

浅葱の行く手を遮っていたのは、絶望的なまでに高い鉄柵だ。柵の頂上部には有刺鉄線が何重にも張り巡らされて、どうやっても乗り越えられそうにない。

浅葱が慌てて引き返そうとしたときには、すでに特区警備隊の警備員たちは、彼女の包囲を終えていた。黒光りする銃口を一斉に向けられて、浅葱はギョッと立ち竦む。

『いや、こっちで合ってるぜ。こんなこともあろうかと、いちおう護衛を呼んどいたんだ』

驚く浅葱の耳元に聞こえてきたのは、勝ち誇ったようなモグワイの声だ。

「護衛……？」

浅葱がその単語に困惑を覚えたとき、彼女の背後で鈍い炸裂音が轟いた。

ミサイルの直撃を思わせる衝撃に突き飛ばされて、浅葱はその場にへたりこむ。

土台のコンクリート部分が砕け散り、鉄柵がズタズタに引き裂かれていた。その残骸を乗り越えて現れたのは、真紅に輝くド派手な陸戦兵器だ。市街戦を想定した、対魔族用の超小型有脚戦車である。照準用のカメラをぐるりと旋回させて、まるで生き物のように戦車が浅葱を見た。

特区警備隊の武装警備員が、すかさず応戦しようとするが、対人用のサブマシンガンが戦車の装甲に通用するはずもない。

逆に有脚戦車の前脚に仕込まれた対人機銃が火を噴いて、警備員たちを薙ぎ払った。低致死性のゴム弾とはいえ、七・六二ミリ機銃の威力は絶大だ。防弾装備ごと吹き飛ばされて、警備員たちが悶絶する。

『どうやら間に合ったようでござるな、女帝殿』

「あんた……〝戦車乗り〟!?」

戦車の外部スピーカーから流れ出してきた声に、浅葱はぽかんと口を開ける。舌足らずな声と、時代がかった暑苦しい言葉づかい――そんな特徴的な知り合いは一人しかいない。

『いかにも。拙者リディアーヌ・ディディエ、モグワイ殿の要請により推参 仕ったでござる』

浅葱のバイト仲間にして稀代の天才ハッカーでもある少女――リディアーヌ・ディディエが、大仰な言い回しで答えてくる。

「ござる……って、あんたどうするのよ、これ!? 完璧にテロリストの所業じゃない!?」

壊滅状態の武装警備員たちを見回して、浅葱がおろおろと問い詰める。

モグワイが呼んだ護衛というのは、この戦車乗りの少女のことだったらしい。なんだかんだで浅葱に懐いているリディアーヌなら、呼ばれれば嬉々としてやってくるだろう。その結果が、この凄惨な光景だ。戦車の主砲で吹き飛ばされた鉄柵といい、どう考えても護衛の範疇を超えている。

しかしリディアーヌは朗らかに笑い飛ばして、

『問題ござらぬ。この場さえ無事に切り抜けてしまえば、あとでいくらでも揉み消しが効くでござる。事が公になって困るのは、おそらく先方も同じ故』

「まあ、そりゃそうかもしれないけど……！」

『そんなことよりも、女帝殿。南側四〇四駐機スポットでござる』

「え？」

戦車の胴体に内蔵されていた作業用のマニピュレーターが、誘導路の脇にある駐機場を器用に指さした。そこに止まっているのは、ディディエ重工製〝パンディオン〟――ティルトローターの多目的輸送機だ。

『僭越ながら、拙者の判断で輸送機を待たせており申す。このまま本土へと高飛びするでござるよ。走ぐるを上と為す、でござる』

「そりゃまあ、たしかにこのまま飛行機に乗せちゃくれないわよね……」

がっくりと肩を落として浅葱は認める。今さら空港ターミナルビルに戻ったところで、何事もなかったかのように予約してあった旅客機で本土に行く、といわけにはいかないだろう。

かといって、絃神島に残っているのも危険だ。リディアーヌの言うように揉み消し工作を行うにしても、ほとぼりを冷ます必要がある。

『如何にも。さあ、早く拙者に跨がるでござる』

「跨がるって……どこによ？」

申し訳程度に車高を落とす有脚戦車から、浅葱は不安げに後ずさる。避弾性を高めるために曲面を多用した有脚戦車に、人間が乗っかれるような場所など存在しない。

しかしリディアーヌはマニピュレーターを操って、ためらう浅葱を問答無用で担ぎ上げ、

「あっ、こら……!?　ちょ……み、見える、見えるから！」

スカートを押さえる浅葱に構わず、有脚戦車は駐機場に向けて走り出す。

しかしそれから十メートルも進まないうちに、ガクン、と有脚戦車の動きが止まった。車体を支えていた四肢の関節が張力を失って、地面に激突した装甲が火花を散らす。

『ぬっ!?　がっ……!?』

「今度はなに!?」

リディアーヌの口から洩れたのは、戦車の制御が失われたことに対する苛立ちの呻きだ。

ふと気づけば、有脚戦車の足元の地面に、光り輝く紋様が浮かび上がっている。そこから喚び出された半実体の使い魔たちが、戦車の関節部にしがみついていた。

『邪妖精だ。特区警備隊の攻魔官だぜ』

モグワイが冷静に分析する。

邪妖精とは、機械や電子機器の動きを狂わすことに特化した特殊な軍用精霊だった。攻魔師同士の戦闘ではほとんど役に立たないが、有脚戦車のような最新兵器が相手では、その効果は絶大だ。

「なんでこの善良で清楚なバイト女子高生を相手に攻魔官が出てくるわけ!?」

『善良で清楚かどうかはともかく、戦車相手に魔術ってのは正解かもな』

他人事のように呑気に答えてくるモグワイ。実際に電子機器を狂わされて、リディアーヌの戦車は行動不能に陥っていた。いかに重武装の有脚戦車とはいえ、車体が動かせないのでは、ただの置物と変わらない。

「なんとかならないの、モグワイ!?」

『無理だな。邪妖精のせいで、このあたりの電子機器は軒並み誤動作を起こしてる。正直この通信を維持するだけでも……きつ……ぜ……』

「モ……モグワイ!?」

人工知能の皮肉っぽい声が、途切れ途切れに弱々しく響く。邪妖精の影響が、浅葱のスマホにまで及んできたのだ。

電子ネットワークから切り離されてしまえば、浅葱はもはや無力な女子高生でしかない。

その間に駆けつけてきた特区警備隊の増援部隊が、身動きできない浅葱に向かって再び銃口を向けてくる。

「やば……！」

絶体絶命の窮地に、浅葱は思わず目を閉じた。リディアーヌの戦車が、いきなり再起動したのはその直後だ。ギュルン、と旋回した戦車の装甲が武装警備員たちの銃撃を防ぎ、逆に戦車が放った機銃弾が、油断していた彼らを無慈悲に撃ち倒した。

「――〝戦車乗り〟!?」

『ご心配をおかけしたでござる。面目ない』

はにかむようなリディアーヌの声が、再びスピーカーから聞こえてくる。いつの間にかモグワイとの通信も復活

していた。邪妖精の気配が消えたのだ。

「あんた、どうやって魔術を破ったの？」

『拙者ではござらん。そちらの御仁が――』

そう言ってリディアーヌが、戦車の照準カメラを動かした。浅葱もつられて振り返る。

誘導路の芝生の上に立っていたのは、黒い中華服を着た男だった。眼鏡をかけた繊細そうな面立ちの青年だ。彼の右手には、両先端に穂先を持つ奇妙な長槍が握られている。

そして彼の足元には、特区警備隊の隊員が仰向けに倒れていた。邪妖精を操っていた攻魔官だ。

「あなた……MARの病院にいた脱獄囚！」

浅葱が表情を強張らせて叫ぶ。

どことなく古代の仙人を連想させる黒衣の男。浅葱は彼と前にも一度出会っていた。

まるで浅葱の能力を確かめるように、この青年はふらりと現れて、戦闘能力で雪菜を圧倒して立ち去ったのだ。

「御意。心ならずも久しくご無音に打ち過ぎましたこと、なにとぞご容赦を。カインの巫女よ」

自分の胸元に手を当てて、黒衣の青年が丁寧に礼をする。

「その人に……なにをしたの……!?」

「ご心配には及びません。魔術を破られた反動で意識をなくしただけです。この程度の術者、あなたの視界を血で汚す価値もありませんので」

「あたしたちを助けてくれたってわけ……？」

浅葱は警戒の表情を浮かべて、青年の手の中にある槍を睨む。零式突撃降魔双槍と彼が呼んでいた黒槍は、周囲の魔力と霊力を消滅させる、と聞いていた。

黒衣の青年はその槍の力を使って、特区警備隊の攻魔官を倒したのだ。

「当然のことをしたまでです。あなたの望みは、我が王の望みでもあるのですから」

愛おしげな視線を浅葱に向けながら、青年が穏やかにそう言った。

浅葱は全身に寒気を覚えて立ち竦み、

「なにそれ……さすがにちょっと引くんだけど……！」

「あの御方があなたをお待ちです。すべては我が王の導きのままに――」

恭しく頭を下げながら、黒衣の青年が後退する。浅葱たちのために道を譲ったのだ。

『時間がないぜ、嬢ちゃん。五分以内に特区警備隊の増援が着く』

『女帝殿！』

「わかってる。行って、〝戦車乗り〟」

モグワイとリディアーヌに急かされて、浅葱は溜息まじりに指示を出す。

リディアーヌが準備したティルトローターの輸送機は、すでに離陸の準備を終えていた。浅葱たちが到着すれば、すぐにでも本土に向かって飛び立つことができるだろう。

そんな浅葱たちの姿を見送って、黒衣の青年は満足げに笑った。

「いずれまたお目にかかりましょう。それまではどうぞ良い旅を」

3

脳を揺らされたダメージが、身体の自由を奪っている。ボクシングでいうところの脚に来た、という状態だ。飛来する銀鎖は見えているのに、古城は一歩も動けない。

「く……そ……疾く在れ、甲殻の――！」

古城は咄嗟に眷獣を召喚した。第四真祖の四番目の眷獣――〝甲殻の銀霧〟が象徴するのは、吸血鬼の霧化能力だ。ただしその能力の効果範囲は、宿主である古城だけではない。最低でも半径数十メートルの物体から結合力を奪い、銀色の霧へと変化させる。おまけに完全な形で元に戻るという保証もないという、凄まじく傍迷惑な眷獣だ。

それでも那月の銀鎖を防ぐためには、その破壊的な力を借りるしかない――が、

「遅い」

古城の眷獣が実体化する前に、那月の銀鎖は古城をとらえていた。〝戒めの鎖〟と名付けられた天部の遺産が、古城の魔力を封じこめ、眷獣の召喚を阻害する。

「やめろ……那月ちゃん……！」

「ちゃんではない」

那月が不機嫌そうに左手の扇子を振った。銀鎖に縛られた古城の身体が、虚空に浮かぶ空間転移用の門へと圧倒的な力で引きずりこまれる。行き先は今度こそ監獄結界だろう。

今の古城に那月の鎖を振りほどく力はない。そして雪菜はいまだに砂浜に倒れたままだ。

虚空から伸びてくる銀鎖の張力が増し、空間の揺らぎに古城の身体が呑みこまれる――それを把握した古城が、捨て身で鎖に抗おうとした瞬間、

キン――――と甲高い音を立てて、那月の銀鎖がことごとく断ち切られた。

「どわっ!?」

突然鎖から解放された古城が、勢い余って砂浜に頭から倒れこむ。そんな古城のすぐ隣に、ふわり、と着地したのは古風なセーラー服姿の黒髪の少女だった。

「二人がかりで勝てなくても、三人相手だとどうでしょうか？」

ヒュン、と風を切る音を残して、霧葉が双叉槍を那月に向ける。

古城はそんな彼女を驚いて見上げた。

本人の言葉を信じるならば、霧葉の目的は獅子王機関に対する嫌がらせだ。彼女には危険を冒してまで那月と戦う理由はないはずだ。

当然、那月も、古城と同じ疑問を抱いたらしい。不機嫌そうに眉をひそめて霧葉を睨み、

「妃崎霧葉……太史局の六刃神官がなんの真似だ？」

その質問の答えを聞く前に、那月は攻撃を放っていた。

雪菜を吹き飛ばしたものと同様の、不可視の爆風が霧葉を襲う。空間そのものを振動させて、爆発的な衝撃波を作り出したのだ。魔術によって生み出されたとはいえ、衝撃波そのものは単なる物理現象であり、〝雪霞狼〟の魔力無効化能力では防げない。もちろん、純粋な衝撃波を槍一本で受け流すのは不可能だ。

しかし霧葉は、無言で双叉槍を一閃する。その直後に押し寄せて来た不可視の衝撃波は、霧葉を呑みこむ直前に、轟音とともに霧散した。

目に見えない物理的な障壁が、霧葉を衝撃波から護ったのだ。

「残念ですわ、〝空隙の魔女〟――あなたとは友好的な関係を築きたかったのですが」

舞い上がる砂埃を払いのけながら、霧葉が冷めた口調で言う。

「疑似空間切断か。獅子王機関のポニテ娘の技だったはずだが？」

「万一のことを考えて、あの忌々しい舞威媛の術式を複製しておいたのは正解でしたね」

「そうか……太史局の乙型呪装双叉槍（リチエルカーレ）……便利なものだな」

さして興味もなさそうな口調で、那月が褒（ほ）め言葉を口にした。

霧葉の双叉槍（スピアフオーク）の能力は、他者が使う呪術（じゅじゅつ）の模倣（エミュレーション）だった。対魔獣戦闘（たいまじゅうせんとう）の専門家（エキスパート）である六刃神官にとっては、単一の強大な能力よりも、多様な能力を状況に合わせて使い分けるほうが圧倒的に有利だからだ。

霧葉はその槍の能力を使って、紗矢華（さやか）の〝煌華麟（こうかりん）〟の術式を再現している。空間を切断した場合に生じる結果を、呪術的に再現する――疑似空間切断の術式だ。

彼女たちの攻撃が生み出す空間の亀裂（きれつ）は、あらゆる物理攻撃を遮断する。

那月の衝撃波を防いだのも、その不可視の空間断層である。

「だが、複製品ということは、欠点もそのまま受け継いでいるはずだな」

衝撃波では霧葉を倒せない。そう判断してからの那月の反応は速かった。

まるで凄腕（すごうで）の手品師のように、那月は掲（かか）げた日傘の中から、小さな獣（けもの）たちを撒（ま）き散らす。見た目はクマのぬいぐるみに似ている。二頭身の可愛（かわい）らしい獣の群れである。

獣たちは見た目に反した敏捷（びんしょう）さで動きだし、古城と霧葉を包囲した。

「なんだ、こいつら……！」

可愛らしい獣たちの群れに取り囲まれて、古城は戸惑いを隠（かく）せない。見た目の可愛らしさで、古城たちの戦意を削（そ）ぐ作戦だろうか、と思わず疑ってしまう。

しかし霧葉は、そんな獣たちを憎々しげに睨（にら）んで、

「魔女の使い魔（ファミリア）ね。迂闊（うかつ）に触れると、手脚の一、二本は吹き飛んでよ」

「……マジか、おい!?」

「全方位からの一斉攻撃……疑似空間切断では防げないわね」

「まさか……それが狙（ねら）いか!?」

霧葉（きりは）の冷静な呟（つぶや）きに、古城（こじょう）の表情が凍りついた。

無敵とも思える〝煌華麟（こうかりん）〟の障壁（しょうへき）にも、いくつかの致命的な弱点が存在する。たとえば空間の亀裂（きれつ）を生成できるのは常に一方向だけ。しかもその効果が持続するのは一瞬（いっしゅん）だ。那月の使い魔（ファミリア）たちに一斉に襲撃（しゅうげき）されたら、霧葉ひとりでは防げない。

「第四真祖（だいよんしんそ）！」

「わかってる！　疾く在れ、〝龍蛇の水銀〟――！」

獣たちの群れが、古城たちを目がけて四方から跳んだ。それを確認する前に、古城は眷獣を召喚していた。膨大な魔力を撒き散らして実体化したのは、水銀色の鱗に覆われた〝次元喰い〟の双頭龍だ。巨大な顎を開いた双頭の龍が、周囲の空間ごと、那月の使い魔たちを呑みこんでいく。

「――響よ！」

その圧倒的な破壊の間隙を衝いて、奇襲を仕掛けたのは霧葉だった。セーラー服の胸元から彼女が取り出した金属製の呪符が、二体の黒豹へと姿を変える。

同時に霧葉自身も、槍を構えて跳躍していた。

古城の眷獣が喰い荒らしたせいで、周囲の空間は激しく乱れている。那月といえども、この状況下では空間転移は使えない。今なら那月を仕留められると判断したのだろう。

そして那月は、その攻撃をよけようとはしなかった。

彼女が選んだのは、回避ではなく迎撃だ。

ゴッ、と荒々しく風を巻いて那月が撃ち出したのは、新たな鎖。

ただしその鎖の太さは〝戒めの鎖〟の比ではない。直径十数センチにも達する鋼鉄製の錨鎖だ。鎖を構成する環のひとつひとつが、もはや完全な凶器である。砲弾のような勢いで撃ち出された〝呪いの縛鎖〟は、巨大な棍棒と化して、霧葉の式神たちを横殴りに襲った。

黒豹の形をした式神たちが、為すすべもなく砕け散る。

「しまっ――!?」

双叉槍を楯にして、霧葉はかろうじて鎖の直撃を防いだ。しかし鎖の質量が生み出す衝撃までは、どうすることもできなかった。

「妃崎ッ!?」

吹き飛ぶ霧葉に駆け寄ろうとした古城を、那月の〝呪いの縛鎖〟が襲ってくる。ギリギリでそれを回避した古城は、大きく体勢を崩しながらも、本能的な恐怖を覚えて無意識に両腕を上げていた。

そんな古城の顔面を、不可視の衝撃波が襲ってくる。〝呪いの縛鎖〟の攻撃はただの囮。那月の本命の攻撃は、その直後の死角からの一撃だったのだ。

「ふん……少しは学習したか？」

どことも知れない空間へと鎖を巻き戻しながら、那月が感心したように言う。

「体罰反対……だぜ……くそっ」

ぜえぜえ、と荒い息を吐きながら、古城はそんな那月を睨みつけた。

彼女の衝撃波を防げたのは、ほとんど偶然の産物だ。顎をガードしていなければ、今度こそ確実に脳震盪を喰らって終わっていただろう。このまま防御を固めていても、彼女を倒せるイメージが湧かない。無謀でも攻撃を仕掛けるしか活路はなさそうだった。

「そういや……ここにいるあんたの身体は、魔力で造った分身なんだっけか」

乱れた呼吸を整えながら、古城が訊く。

那月はただの魔術師ではなく魔女だ。

膨大な魔力を自在に操るが、彼女たちの能力は、悪魔との契約によって与えられたものである。そして契約には代価がつきものだ。それは那月とて例外ではない。

那月に課せられた代償は〝眠り〟だ。

彼女は監獄結界の管理人として、未来永劫、自らの夢の中で眠り続けなければならない。

成長することも年老いることもなく、他人と触れ合うことすらできないまま、ただ夢を見続けるだけ――

古城たちの前に立っている那月は、彼女が魔力で造り上げた操り人形。

すなわち彼女の夢の一部に過ぎないのだ。

「だったら、どうした？」

那月が平然と訊き返してくる。今さらなにを言っているのか、と。

たしかにここにいる那月は分身体だ。だからこそ彼女は無敵でもある。分身をいくら破壊したところで、那月の本体には傷ひとつつけることはできない。

同じ魔女である仙都木阿夜ですら、那月の本体を攻撃するためには、絃神島全土を巻きこむような大異変を起こして、監獄結界をこじ開けなければならなかった。

もちろん古城に、そんな真似はできない。

あえてそんなことをする必要も、ない。

要は那月の分身を破壊して、彼女を一時的に無力化できればいいのだ。その間に古城たちは空港に辿り着き、さっさと島を抜け出すだけだ。

「いちおう確認しただけだよ。つまり手加減の必要はないってことだよな？」

「まるで手加減しなければ勝てるとでも言いたげだな？」

那月が呆れたような口調で訊いてくる。彼女がまとう威圧感に、古城は危うく押し潰されそうになるが

——

「悪ィけど、こっちもいろいろと背負ってるものがあるんだよ！」

その恐怖を振り払うべく、古城は新たな眷獣を召喚した。

全長十メートルを超える荘厳な猛獣。稲妻を撒き散らす雷光の獅子だ。那月が鎖を操るのは、古城にしてみれば好都合だった。那月の鎖は電気を通す。たとえ那月が攻撃を仕掛けてきたところで、雷光の獅子は、その鎖を伝って彼女にダメージを与えることができるからだ。

しかし那月の表情は変わらない。

古城の眷獣を見据えたまま、自らの影に向かって傲然と命じる。

「——起きろ、〝輪環王〟」

その瞬間、那月の背後に現れたのは、古城の眷獣すら見下ろす巨大な影だった。

優雅さと荒々しさを併せ持つ、金色の甲冑をまとった人型の影。機械仕掛けの黄金の騎士だ。

禍々しい存在感が、人工の大地を震わせた。

闇そのものを閉じこめたような分厚い鎧の内側から、巨大な歯車や駆動装置の蠢く音が、怪物の咆吼のように聞こえてくる。

「なんだ、こいつは……!?」

巨大な騎士の姿を見上げて、古城は無意識に後退する。

魔力の量に圧倒されたわけではない。たしかに黄金の騎士像は凄まじい魔力を放っているが、それは古城の眷獣も同じだ。ただ力の質が違うのだ。

黄金の騎士像がまとう空気は、明らかにこの世界のものではない。光を侵蝕する黒い魔力だ。

「まさか……那月ちゃんの〝守護者〟なのか!?」

黄金の騎士像の正体に、古城はようやく辿り着く。

〝守護者〟とは、悪魔との契約の対価として、魔女に与えられた悪魔の眷属だ。

文字どおり〝守護者〟は魔女を護り、願いを叶える力を与えてくれる。

その一方で、魔女が契約を破棄したときには、魔女の命を刈り取る処刑者に変わる——

〝守護者〟とは、いわば魔女の契約そのものを具現化した存在なのだった。

すなわち〝守護者〟の力の強さは、契約の重さに比例する。那月の契約の〝代償〟を思えば、彼女の〝守護者〟が強大なのは予想できたことだった。

だが、それにしても黄金の騎士像の禍々しさは異様だ。古城の想像を遥かに超えている。

それでも古城のやるべきことは変わらない。

那月をここで倒さない限り、凪沙を助けにも行けないのだから。

「〝獅子の黄金(レグルス・アウルム)〟――！」

巨大な稲妻と化した雷光の獅子が、正面から黄金の騎士像と激突した。

凄まじい爆発が巻き起こり、超音速の衝撃波が海を割る。第四真祖の五番目の眷獣〝獅子の黄金(レグルス・アウルム)〟は、かつて人工島(ギガフロート)の一区画を一瞬で焦土に変えたことがある。その力は今も健在だ。

雷光の獅子のエネルギーに引かれて、空に黒雲が集まり始めていた。

激突の余波で、絃神島全土が震えている。放出された電磁波が電子機器を狂わせて、この海岸の周囲には相当の被害が出ているはずだ。

だがそれでも、那月の〝守護者〟は倒れない。眩い輝きに包まれながら、苦悶の咆吼を上げたのは雷光の獅子のほうだった。

黄金の騎士像が放った真紅の荊が、雷光の獅子に絡みついて動きを縛っている。

「第四真祖の眷獣を……力で押さえつけた……!?」

戦いの行方を見守っていた霧葉が、呆気にとられたような表情で呟いていた。

正確に言えば、黄金の騎士像はパワーで雷光の獅子を押し切ったわけではない。真紅の荊を檻のように使って、眷獣の動きを封じたのだ。だがそれでも、第四真祖の眷獣の攻撃に耐えきったことに変わりはない。

「ぐ……おおおおおおおおおっ!?」

「無駄だ、暁……この〝禁忌の荊(グレイプニール)〟は千切れんよ」

必死で雷光の獅子を操ろうとする古城に、那月が傲然と微笑んだ。

そして彼女が放った銀色の鎖が、今度こそ完全に古城を捕らえる。

「第四真祖っ！」

砂浜に倒れたままの霧葉に、古城を救い出すだけの余力はない。

古城の身体が空間の歪みに呑みこまれ、水に沈むように虚空へと消えていく。

「先輩！」

ようやく意識を取り戻した雪菜が、悲壮な声で絶叫した。

4

轟々と暴風が渦巻いていた。

海岸沿いの街灯やガードレールが薙ぎ倒され、砂浜もごっそりと抉られてしまっている。

第四真祖の眷獣と那月の〝守護者〟――共に絃神島を沈めかねない巨大な魔力同士が激突したのだ。この程度の被害で済んだのは、逆に幸運だったといえるだろう。

「それが〝空隙の魔女〟の守護者……欧州の魔族を恐怖のどん底に突き落としたという〝輪環王〟ね。出現するだけで、この世界の時空を歪めるという噂、案外本当だったのかしら」

砂まみれになった黒髪を鬱陶しげに振りながら、霧葉がのろのろと起き上がる。

そして物憂げに溜息をついて、彼女は双叉槍を格納形態へと戻した。

「もう終わりか、六刃神官？」

戦う姿勢を放棄した霧葉を見つめて、那月が拍子抜けしたように訊いてくる。

第四真祖の眷獣は、いまだに実体化したままだった。しかし宿主である古城を失ったせいか、荊の檻を撃ち破るほどの力はないようだ。那月の〝守護者〟である黄金の騎士像に押さえつけられて、荒々しく唸り続けるだけである。

それを確認して、霧葉はやる気なく首を振り、

「第四真祖が監獄結界に囚われてしまった以上、これ以上の戦いは無益でしょう？」

「賢明だな」

那月がそう言って目を細めた。あれほどの戦闘の直後にもかかわらず、那月は呼吸すら乱していない。そのことが彼女の底知れぬ余裕を示している。

霧葉が一人で戦いを続けたところで、どうすることもできないだろう。力に差がありすぎる。なにしろ相手は、世界最強の吸血鬼すら圧倒する化け物なのだ。が、

「ただ、そこの彼女は、そんなふうには思ってないみたいだけど」

ちらりと横目で背後を見遣って、霧葉は愉快そうに呟いた。

那月の攻撃で倒れていたはずの雪菜が、銀色の槍に体重を預けて、立ち上がっていたのだ。

最初のダメージが残っているのか、雪菜の脚は今も震えている。それでも彼女の瞳からは、那月に対す

る戦意が失われていなかった。

「出来の悪い教え子が、もう一人いたということか……」

　那月がうっすらと溜息をつく。そして彼女は雪菜のほうへと向き直り、

「見てのとおりだ、転校生。貴様の監視対象は捕らえたぞ。それでもまだ戦う気か？」

「最初にお伝えしたはずです。これはわたしの戦争でもありますから」

　雪菜が静かに槍を構えた。

　魔力を無効化し、ありとあらゆる結界を斬り裂く雪菜の槍は、魔女である那月の天敵だ。単純な戦闘能力だけなら圧倒的に那月が上だが、ほんのわずかでも〝雪霞狼〟の切っ先が届けば、たちどころに形勢は逆転する。

　もちろん那月も、そのことは理解しているのだろう。ふらつく雪菜を冷ややかに見返して、彼女はゆっくりと左手を上げた。握っていた扇子をヒラリと翻す。

「そうか。ならばここからは手加減抜きだ」

　ギュンッ、と大気を乱暴に引き裂いて、那月が虚空から鎖を放った。

　しかし雪菜はわずかな動きだけで、その鎖をすべて撃ち落とす。飛来する無数の鎖の軌道を、すべて知っていたかのような反応速度だ。

「獅子王機関の剣巫の霊視……未来予知か。なるほど、よく訓練されているな」

　那月がめずらしく雪菜を賞賛する。

　そんな那月に向けて、雪菜が疾走した。純白の砂を巻き上げて、槍の間合いまで一気に接近する。那月が、トン、と地面を蹴って空中に舞った。それを追って雪菜も跳躍する。

　そして那月は微笑を浮かべ、自分の眼前の大気を歪めた。

　空間制御による衝撃波の砲撃だ。

「だが、その霊視に頼りすぎだ。だからこんな単純な手に引っかかる」

「くっ……！」

　教え諭すような那月の言葉に、雪菜は表情を硬くする。不可視の衝撃波は、霊視でも視えない。衝撃波が放たれることが予測できても、その軌道や発射のタイミングはわからない。

　そして跳躍中の雪菜には、放たれた衝撃波をよけるのは不可能だ。

　ならば――切り抜ける方法はひとつしか残されていなかった。

「〝雪霞狼〟！」

雪菜はありったけの霊力を、銀色の槍に流しこむ。〝雪霞狼〟に刻印された術式が起動し、純白の光を撒き散らした。それは魔力を無効化する神格振動波の閃光だ。

「神格振動波の結界で、衝撃波を生み出す空間制御の魔術そのものを防いだのか」

自分の攻撃が不発だったことに気づいて、那月が咄嗟に後退する。

「――獅子の神子たる高神の剣巫が願い奉る」

雪菜は槍を構えたまま着地。再び那月を追撃しながら、厳かに祝詞を口ずさむ。

増幅された雪菜の霊力によって、神格振動波の輝きが更に増した。それは〝雪霞狼〟の穂先に沿って収束し、一振りの巨大な刃を形成する。

彼女の身長の数倍にも達する、光り輝く閃光の刃だ。

「破魔の曙光、雪霞の神狼、鋼の神威をもちて我に悪神百鬼を討たせ給え！」

雪菜が横薙ぎに払った刃が、ついに那月の身体をとらえた。

那月の細い胴体をかすめて、背骨近くまで深々とえぐる。

しかし伝わってくる手応えのなさに、雪菜は愕然と息を呑んだ。両断されたはずの那月の身体が、跡形すら残さずに消滅する。

「幻術――!?」

「だから言っただろう？　貴様は霊視に頼りすぎだとな」

混乱する雪菜の背後から、失望したように告げてきたのは那月だった。

虚空から銀色の鎖が放たれる。霊力をすべて攻撃に回していた雪菜には、その鎖を防ぐ力は残されていない。四肢を鎖に搦め捕られて、為すすべもなく動きを封じられる。

「そんな槍に頼っているから、肝心なことを見失う。未熟だな」

哀れむような口調でそう言って、那月は再び門を開いた。

雪菜も監獄結界へと連れこむつもりなのだ。那月の〝夢〟に引きずりこまれてしまえば、おそらく〝雪霞狼〟の能力をもってしても自力での脱出は不可能だろう。

雪菜は必死に抵抗するが、銀鎖は容赦なく彼女の身体を門へと引き寄せる。

「終わりだな」

突き放すような口調で、那月が言った。その直後、

「いいえ、まだよ」

無防備に立つ那月の背後から、古風なセーラー服を着た少女が鈍色の刃を振り下ろす。

那月はその攻撃をあっさりとかわすが、霧葉の狙いは那月ではなかった。疑似空間切断の刃が斬り裂いたのは、雪菜の四肢を戒めていた銀色の鎖だ。

「なんの真似だ、妃崎霧葉？」

那月が扇子を畳みながら、不機嫌な視線を霧葉に向けた。

銀鎖の拘束から逃れた雪菜も、驚いたように霧葉を見上げている。

「気が変わったの。ごめんなさいね」

しかし霧葉は悪びれもせずに微笑した。くるりと双叉槍を旋回させて、その切っ先を那月に向ける。あからさまな宣戦布告の仕草だ。

「黒の剣巫とも呼ばれる六刃神官としては、見習いとはいえ本家・獅子王機関の剣巫に、あっさり負けてもらっては具合が悪いのよ。少し手助けさせてもらうわ」

「好きにしろ。どのみち結果は同じだ」

どこまでが本音かわからない霧葉の宣言に、那月は無関心な答えを返す。

「それはどうかしらね。魔女ごときが偉そうに。殺すわよ――」

本性を剥き出しにした好戦的な口調で言いながら、霧葉が横目で雪菜を見た。

雪菜は無言でうなずくと、霧葉の隣で槍を構える。

敵対していたはずの表と裏の剣巫の共闘を、那月は退屈そうに眺めて嘆息した。

5

気づくと古城は、石造りの殺風景な部屋に立っていた。

不揃いな自然石を積み上げた壁と、鉄格子の嵌まった小さな窓。中世の城館を連想させる、古色蒼然とした石牢だ。

「またここか……」

古城は床に屈みこんで、天井を仰ぐ。窓の外から射しこんでいるのは、血の色に似た赤い陽光。かすかに見覚えのある風景だった。古城は前にも一度、この部屋を訪れたことがある。今ひとつ記憶が安定して

いないのは、おそらくここが夢の中の世界だからなのだろう。

那月が自分の夢の中に構築した世界。監獄結界だ。

分厚い石壁は見るからに頑丈だが、第四真祖の眷獣を使えば破壊できないほどではない。

古城は試しに眷獣を喚び出そうとしてみるが、結果は予想したとおりだった。眷獣が現れる気配はない。それどころか自分自身の魔力すら、感じられなくなっている。

「やめておけ。この空間では貴様の眷獣は使えんよ。ここは私の夢だからな」

無駄な努力を続ける古城の背中に、誰かが声をかけてくる。

いつの間にか部屋の中央に、豪華な肘掛け椅子が出現していた。

脚を組んでそこに座っているのは、白シャツにタイトスカートを着こなした大人の女性だ。

身長は百六十センチ台の半ばほど。年齢は二十六歳といったところか。

人形のように精緻な美貌の持ち主だが、すべてを見下したような傲岸不遜な瞳が、その印象をすっかり台無しにしている。長い黒髪が印象的な彼女の手には、豪奢なレースの扇子が握られていた。

「あんたのその恰好も、夢の中だからってことでいいのか？」

思いきり呆れたような態度で、古城が深々と息を吐く。タイトスカートの女は、ふふん、と得意げに笑って、

「私の実年齢に合わせてみたのだがな」

「まあたしかに、そんな感じに成長しそうではあるけどな」

古城が投げやりな感想を口にした。

見た目が多少変わったところで、女の口調や性格は那月のままである。そのせいでほとんど違和感を覚えない。強いて言えば気になったのは、いくらなんでも胸を盛りすぎではないのか、という点だが、指摘すると怒られそうなので黙っておく。ここは那月の夢の世界なのだ。

「まだ本土行きを諦めてないと言いたげな顔だな、暁古城」

その大人版那月が、黒タイツにパンプスの脚を組み替えながら訊いてきた。

古城は床の上にあぐらをかいたまま、拗ねた子どものようにうなずいて、

「当然だ。あんたが俺を止めようとする理由を、俺はまだなにも聞いてないからな」

「説明か。貴様を失いたくないから、というだけでは不足か？」

そう告げてくる那月の表情は妙に真剣だ。古城はそのことに面喰らう。

「失う……って、死ぬってことか？　俺はいちおう吸血鬼なんだが……」

「神々により不死の呪いをかけられた吸血鬼の真祖、か」

ふん、と面白くもなさそうな口調で、那月が言った。

「では貴様が本土で出会う相手が、その神をも殺す存在だとしたらどうする？　それでもまだ自分は不死身だと呑気なことを言っていられるか？」

「神を殺すって……あんたいい歳してなに言ってんだ……」

古城が少し可哀想なものを見るような視線を那月に向ける。世界最強の吸血鬼という古城の肩書きも相当アレだが、那月の言葉はあまりにも突飛にすぎるように思えた。

しかし那月は、古城の失礼な発言を平然と無視して、

「神といっても、世界というシステムを創り出した造物主、という意味ではないがな。すべての人類の始祖、という程度の神だ」

「人類の始祖……始まりの人間ってことか。神話なんかでよくある感じではあるけど……」

「そうだな。自分たちを創り出した神に命じられて、あるいはその神を殺して、神の子どもたちが新たな世界の支配者となる――世界各地の神話で多く見られる類型だ」

そういうことか、と古城は那月の言葉を受け入れる。

造物主によって地上に生み出された〝原初〟の人間。人類の始祖。吸血鬼の真祖と同様に、彼らもまた不老不死の存在として造られたと、世界各地の神話が伝えていたはずだ。

「だが、その始祖たる神は、はたしてどちらにとっての始祖だったのだろうな？」

ぼそり、と那月が、自問するように独りごちる。

「どちらって？」

「決まっているだろう？　人類か、それとも魔族か、ということだ」

つまらなそうに頬杖を突きながら、那月は古城の質問に答えた。

「どちらが優れているという話ではないが、人類と魔族はあまりにも異質だ。同じ言語を解し、交配して子をもうけることも可能でありながら、生物としての性質が違い過ぎている。ふたつの種族が、同じ神の子孫であると考えるのは不自然ではないか？」

「人類の始祖と魔族の始祖は、それぞれ別物だったってことか……？」

「同じ造物主によって生み出されたという意味では、兄弟といえるのかもしれないがな」

不吉な予感を覚え始めた古城に、那月はあっさりと続けてくる。

この世界に、なぜ魔族と呼ばれる種族が存在するのか――それは世界中の科学者や宗教家が問い続けて、そしていまだに答えを出せずにいる問題だ。〝魔族特区〟が存在するのは、究極的には、その謎を解き明かすためであるともいわれている。

「仮に人類と魔族の始祖が兄弟だったとして、それがなにか問題なのかよ？」

古城が素朴な疑問を口にする。

同じ造物主によって生み出されたのなら、ふたりの始祖は対等ということだ。

その子孫たる人類と魔族にも優劣はないということになる。それはどちらの種族にとっても悪くない話のはずだった。

だが、それは逆だと、と那月は嘲笑う。

「異質な者同士が同時に存在すれば争いが起きる。神といえどもそれは同じだ」

「始祖同士の戦争、ってわけか」

「気が遠くなるほど昔の出来事だ。まともな記録は残っていないがな」

「そう……か……」

那月の言葉に、古城は唸った。

立場が対等な者同士が、常にわかり合えるとは限らない。むしろ対等だからこそ、敵対したときの溝が深くなる。言われてみれば、ありがちな話だ。それは始祖たちも同様だったらしい。

「そいつらは、結局どうなったんだ？　戦いはもう終わったんだろ？」

「さあな。聖殲の実態については、私にも正確なところはわからん。共に滅びたか、封印されたか。あるいは殺されたのかもしれんな。神々を殺すための兵器によってな」

「……兵器？」

その物騒な言葉の響きに、古城の目つきが険しくなる。

那月は、そんな古城を眺めて、残忍に唇を吊り上げた。

「アヴローラ・フロレスティーナの記憶の中で、第四真祖は殺神兵器と呼ばれていたな？　神々同士が争っていたのだ。神を殺すための兵器が造られたとしても、おかしくはあるまい？　そして現存する殺神兵器が第四真祖だけとは限らない」

「……」

古城が呻くように沈黙した。

前にブルーエリジアムで遭遇した、レヴィアタンのことを思い出したのだ。

聖書にも記された海の怪物。〝嫉妬〟の蛇。神々が造りだしたといわれる最強の生物。全長数キロにも達するあの規格外の魔獣は、神話の時代の生体兵器と呼ばれていた。

あの怪物も第四真祖と同じように、殺神兵器として造り出された存在なのだろうか？

そして――

「神縄湖に沈んでる聖殲の遺産ってやつも、その殺神兵器の一種ってことか？」

「それはまだわからん。それがどちら側か、ということもな」

「どちら側か……？」

「聖殲の遺産と呼ばれるものには二種類あるということだ。すなわち魔族の始祖を殺すための兵器と、人類の始祖を殺すためのものと」

「……っ！」

何気ない那月の説明に、ゾッと古城の背筋が凍った。

「どちらにしても危険な存在には変わりないが、人類が人類の始祖を滅ぼすための兵器を手に入れるなら、まだマシだ。それ以外の状況に比べれば遥かにな」

那月が更に続けてくる。古城は無言で顔をしかめるだけだ。

有史以来、絶え間なく争いを続けてきた人類と魔族が、曲がりなりにも共存できるようになったのは、実は最近の出来事だった。数十年前に締結された聖域条約によって、ようやくいちおうの平和が実現したのだ。

第一真祖〝忘却の戦王〟の功績や、長い戦いに人類が疲れていたという事情もある。しかし聖域条約が締結されたもっとも現実的な理由は、人類の持つ科学技術や魔術が進歩し、魔族との戦力が拮抗したことだ。要は人類も魔族も、共倒れになることを恐れたのだった。

それでは、もしもどちらかの陣営が、パワーバランスを大きく崩すような強力な兵器を手に入れたらどうなるか——その結果は想像するまでもなく明らかだ。

「神縄湖に沈んでるのが、ヤバいものだって話はわかった」

長い溜息を挟んで、古城が言った。

「だけど、それと凪沙やアヴローラになんの関係がある？」

「……獅子王機関は、聖殲の遺産を掘り返したいと思っているわけじゃない」

那月が肩をすくめて答えてくる。

「連中の目的は封印だ。神縄湖の底で目覚めかけている〝遺産〟を、今度こそ完全に凍結する」

「封印？　つか、目覚めかけてる……って……なんだそれ!?　初耳だぞ!?」

古城は驚いて那月に詰め寄った。

寄るな鬱陶しい、と那月は古城を追い払うように左手を振り、

「貴様を神縄湖に行かせたくなかった理由、少しはわかったか？」

「俺の魔力と反応して、〝遺産〟の覚醒が進むかもしれないから、ってことか」

「正解だ」

「……」

ぐ、と古城は唇を噛む。

しかし内心では腑に落ちる感覚も味わっていた。獅子王機関は政府の特務機関だ。彼らの活動目的は、大規模な魔導災害や魔導テロの防止だと聞いている。

神縄湖でそんな事件が起こっていたのなら、彼らが乗り出してくるのは、ある意味、必然だ。そこに凪沙を連れて行こうとした、牙城の空気の読めなさに問題があるとも思えてくる。

「だけど、迂闊に近づくとまずいのはアヴローラも同じじゃないのかよ？」

「かもしれんな」

古城の疑問を、那月は意外にも否定しなかった。

「しかし獅子王機関にも、ロクに正体もわからん殺神兵器を封印するような術式は使えん。そこで連中が目をつけたのが暁 凪沙というわけだ」

「だからなんで!?」

「アヴローラ・フロレスティーナは、殺神兵器を封印するための術式を知っている」

予期しなかった那月の答えに、古城は完全に虚を衝かれた。

アヴローラ――人工の吸血鬼である十二番目の〝焔光の夜伯〟は、正確には本物の第四真祖ではない。彼女は、殺神兵器としての第四真祖の呪われた魂――〝原初のアヴローラ〟を封印するために造られた器だったのだ。

結果的に古城とアヴローラ本人の行動によって、〝原初〟の魂は消滅し、封印の器という役目から、彼女は解き放たれることになった。

しかし封印の器としての機能が、アヴローラから失われたわけではない。

「〝原初〟を封印するための術式を、神縄湖の〝遺産〟に使うつもりか？　そんなことができるのか……!?」

「たしかに分の悪い賭けではあるな。だが、成功すれば犠牲を出さずに済む。それに暁凪沙に憑いているアヴローラ・フロレスティーナは、肉体を持たない残留思念だ。〝遺産〟に与える影響は、おそらく最小限で済む」

「失敗したら、そのときはどうなる？」

感情を殺したような古城の問いに、那月は皮肉っぽく笑ってみせた。

「そうだな……上手くいけば、手懐けられるかもしれんな。貴様がアヴローラ・フロレスティーナをそうしたようにな」

「最悪の場合は？」

「決まっている――戦争だ」

「な……!?」

那月の返事はひどく単純で、それゆえに異様な説得力があった。

とっくに最悪の事態を想定した上で、那月や獅子王機関は動いていたのだ。

「獅子王機関が暁緋紗乃に提示した交換条件は、アヴローラ・フロレスティーナからの暁凪沙の解放だ。おそらく獅子王機関には、貴様の妹を救うための、なんらかの策があるのだろうな」

「緋紗乃って……うちの祖母さんが黒幕だったのかよ!?」

古城が唖然と目を見張る。だが、冷静に考えれば、すぐにわかることだった。

牙城があれほど尾行を警戒していたにもかかわらず、獅子王機関が凪沙の行動を把握していたのは、内通者である緋紗乃が情報を洩らしていたからだ。

「べつに驚くことはないだろう。そもそも暁 牙城は、貴様の妹を調べるために丹沢に向かったのではなかったか？」

「くそ……！　だけど凪沙がそれで救われたとして、アヴローラの魂はどうなるんだ？」

拳を握り直しながら、古城が訊いた。

しかし那月は冷ややかに首を振る。

「どうにもならんよ。あの娘はもういない。貴様の妹が命を削りながらつなぎ止めているのは、ただの残留思念。すでに失われた魂のひと欠片だ」

「……どうして最初から、その話を聞かせてくれなかった!?」

「聞けば、貴様は本土行きを我慢できたのか？」

責めるように那月を睨む古城を、那月が尊大に見上げてくる。

「安心しろ。ここは私の夢の世界だ。貴様が外に出る前に、今の話は忘れさせてやる。目覚めたあとには思い出せない夢のようにな」

「ふざけんなっ……！　そんな話を聞かされて、引き下がれるわけねーだろ！」

古城が感情のままに那月の胸ぐらをつかもうとする。しかしその手は、那月に触れる前に、彼女の障壁に弾かれた。痺れるような痛みに呻きながらも、古城は再び那月に顔を寄せ、

「それに、もし〝遺産〟と戦いになるとしたら、俺の力が必要になるんじゃねーのかよ!?」

「思い上がるなよ、小僧。私相手に手も足も出ない雑魚が、殺神兵器相手になにができる？」

那月が唇を美しく吊り上げた。古城は今度こそ吹き飛ばされて、無様に壁に激突する。

結界の中で力を奪われた今の古城に、那月に対抗する手段などあるはずもない。

それでも古城は怯むことなく顔を上げ、獰猛に笑った。

「手も足も出ないって決めつけるのは、気が早いんじゃねーか？」

「ほう……では、今から監獄結界を抜け出してみるか？」

挑発的な那月の台詞に、古城はゆっくりとうなずいた。

「俺たちが自力でここから出られたら、本土に行くのを見逃してくれるんだな」

「俺たち、か……面白い。やってみろ」

古城が無意識に呟いたそのひと言に、那月はほんの少し愉快そうに目を細める。

6

「黒雷――！」

裂帛の気合いとともに雪菜が跳んだ。人間の限界を遥かに超えた敏捷性だ。無数の残像を従えて那月に肉薄し、閃光と化した槍撃を放つ。

「ふん、呪的身体強化か。たしかに疾いが――」

小柄な少女のような姿の魔女は、そんな雪菜の攻撃を容易く受け流し、一瞬の隙を衝いて左手を振った。放たれた衝撃波をよけきれずに、雪菜の連続攻撃が途絶える。

「戦い方が正直すぎるな、転校生。狙いが丸わかりだぞ」

「がっ……」

運動量の落ちた雪菜に向かって、クマのぬいぐるみに似た那月の使い魔が殺到した。雪菜が迎撃するよりも早く使い魔たちは自爆。その爆圧に吹き飛ばされて、雪菜は大きく体勢を崩し、そこに虚空から撃ち出された銀鎖の槍が降りそそぐ。

そんな雪菜の窮地を救ったのは、古風なセーラー服姿の六刃神官だった。

「〝霧豹双月〟！」

双叉槍による斬撃が、那月の銀鎖を撃ち落とす。同時に発生した空間の亀裂が使い魔たちの爆発の余波も防いでいた。

「霧葉さん……！」

「悪いけど、今ので疑似空間切断は打ち止めよ。乙型呪装双叉槍の呪力の消費量は、複製元より激し

いの」

輝(かがや)きを失った双叉槍(スピアフオーク)を下ろして、霧葉は素っ気なく告げてくる。〝戒(レージング)めの鎖〟を断ち切り、不可視の衝撃波を防ぐ疑似空間切断能力は、那月に対して極めて有効な武器だった。それを失ってしまったことで、雪菜たちが不利になるのは避けられない。

「いえ、十分です」

しかし雪菜は立ち上がって強気に微笑する。霧葉はそれを意外そうに見返して、

「でも、このままじゃジリ貧ね。〝空隙の魔女(くうげきのまじょ)〟は教官気取りで余裕みたいだし」

「そう……でしょうか？」

雪菜が控え目に異議を口にした。ただの強がりとも思えない雪菜の態度に、霧葉が訝(いぶか)しげな視線を向けてくる。

「先輩の絃神島(いとがみじま)脱出を阻止するだけなら、監獄結界(かんごくけっかい)に閉じこめた時点で南宮(みなみや)先生は目的を果たしてます。わたしたちと戦う理由なんてない」

「……たしかにそうかもしれないわね。空間転移(テレポート)でキーストーンゲートにでも移動されたら、私たちには手も足も出ないわ」

「はい。だけど現実には、南宮先生はここに残ったままです。今の南宮先生には、空間転移(テレポート)ができない理由があるんだと思います」

「……!?」

霧葉が小さく眉(まゆ)を震(ふる)わせた。

雪菜がそれに気づいたきっかけは、那月が幻術を使ったことだ。

まるで息をするように自在に空間転移(テレポート)を使いこなす那月が、雪菜の攻撃をよけるために幻術に頼る必要はない。雪菜の槍が届かない場所まで、空間転移(テレポート)で逃げれば済むはずだからだ。

しかし那月は幻術を使った。それどころか無駄に戦いを長引かせてまで、空間転移(テレポート)の使用を避けている。那月(なつき)は空間転移(テレポート)を使わないのではなく、使えないのだと結論づけても、おそらく的外れではないはずだ。

「教官気取りで私たちに稽古(けいこ)をつけてると見せかけて、実は弱みを隠(かく)していたということ？」

ふ、と口元に笑みをたたえて、霧葉(きりは)が言う。那月の余裕にほころびが見えたのが、嬉(うれ)しくてたまらないという表情だ。

「そうか、第四真祖の眷獣……！」

「はい」

霧葉の呟きにうなずいて、雪菜は虚空に浮かぶ小柄な魔女を睨め上げた。

那月の背後の海上には、荊の檻に囚われた雷光の獅子の姿がある。

「眷獣の実体化を解除していないということは、つまり暁先輩は、監獄結界からの脱出を諦めていないということですね。そして先輩の眷獣を縛りつけておくために、あなたは空間転移を使うことができなかった。違いますか？」

「ふふん……たしかに暁の諦めの悪さは計算外だったな。どういうわけかあのバカは、貴様が必ず自分を助け出してくれると信じているらしい」

那月は、驚くほど素直に雪菜の言葉を肯定した。たとえそれを知られたところで、自分の絶対的な優位は崩れない、と言いたげな態度だ。

「つまり貴様を捕らえて監獄結界の中に連れこめば、あのバカも諦めがつくというわけだな、姫柊雪菜？」

「残念ですけど、それは無理だと思います」

那月が何気なく洩らした言葉を聞いて、雪菜の瞳に強い光が宿る。

消耗していたはずの雪菜の霊力の高まりに、那月は薄く苦笑して、

「言っておくが空間転移を使わなくても、私は強いぞ――」

その言葉が雪菜に届く前に、那月は〝呪いの縛鎖〟を実体化させていた。

直径十数センチ、長さ数十メートルにも達する鋼色の錨鎖だ。重量に至っては、何百トンあるのか見当もつかない。その桁外れに巨大な錨鎖を鞭のように振るって、那月は、雪菜たちを薙ぎ払おうとする。

「ちっ！」

それを迎撃したのは霧葉だった。使えなくなったはずの疑似空間断裂の刃で、飛来する錨鎖を根元から断ち切り、そのまま彼女は那月に向かって跳躍する。

「やはり余力を残していたか、六刃神官」

那月が愉しげに顎を上げる。その無防備な那月に向かって、霧葉は槍を突き出した。幻術を使っても逃れることのできない必殺の間合いだ。が、

「残念だったな、妃崎霧葉」

「しまっ――!?」

自分の足首に巻きついていた銀鎖に気づいて、霧葉が呻く。

那月は自分の周囲の砂の下に、あらかじめ銀鎖を張り巡らせていたのだ。そして霧葉はその罠の中に、自ら飛びこんでしまったのだった。

霧葉は那月への攻撃を諦めて、足首に巻きついた銀鎖を断ち切った。その判断が一瞬でも遅れていれば、霧葉は間違いなく那月の追撃に襲われていただろう。

その間に那月は、霧葉の間合いの外へと脱出している。

そして乙型呪装双叉槍に蓄えられていた呪力は、今度こそ底を突いていた。今の奇襲が那月を倒す最後のチャンスだったのだ。

「さすがに心が折れそうになるわね……戦闘経験が違いすぎるわ……」

砂浜の上に片膝をついて、霧葉が吐き捨てるように呟いた。

今の一瞬の攻防だけで、数年は寿命が縮んだ気がした。

そんな霧葉の背中から、雪菜が言いにくそうに声をかけてくる。

「――すみません、妃崎さん。十秒だけ、時間を稼いでもらえませんか？」

「は!?」

あまりにも身勝手な雪菜の依頼に、霧葉が眦を吊り上げた。

「ふざけてるの!?　あの魔女相手に十秒って、命懸けよ？」

「わかってます。でも、お願いします」

剥き身の苛立ちをぶつける霧葉を、雪菜は真っ直ぐに見返して言う。

その頑なな雪菜の態度に、霧葉は毒気を抜かれたように嘆息して、

「あなた……存外いい性格してるわね。第四真祖に少し同情してよ」

皮肉混じりの捨て台詞を残して、霧葉が渋々と立ち上がる。

そして霧葉は、鉛色の双叉槍を投げ捨てた。どのみち呪力を使い切った乙型呪装双叉槍では那月に歯が立たない。たとえそれがわかっていても、思いきりのいい決断だ。

その霧葉の潔さに、那月が警戒の表情を浮かべた。霧葉はそれを見て満足げに笑い、

「我が影は、霧にして霧に非ず、刃にして刃に非ず」

静かに祝詞を詠う霧葉の全身が、周囲の景色に溶けこむように消えていく。

幻術の応用で空気の屈折率を操り、自身の肉体を透明化したのだ。同時に隠形の呪術を発動し、自らの気配も遮断している。

「斬れば夢幻の如く、啼哭は災禍を奏でん――」

祝詞の詠唱が終わったときには、霧葉の姿は完全に消えていた。雪菜の霊視をもってしても、彼女の存在を感知できない。恐るべき完成度の呪術迷彩だ。

「自らの姿を隠すことで、私の動きを封じる気か――やるな」

賞賛の言葉を呟きながら、那月は再び使い魔の群れを喚び出した。

人間よりも遥かに優れた獣たちの感覚を使って、霧葉を見つけ出そうとしたのだろう。だが、

「遅い――！」

使い魔たちが実体化する前に、霧葉が那月の眼前に現れる。

まとわりついてくる使い魔たちに構わず、霧葉は、武器を持たない左手を那月に向け、

「火雷――！」

そして高濃度に凝縮した呪力を、透明なハンマーのように那月に叩きつけた。

霧葉にしがみつく使い魔たちも、その一撃で吹き飛ばす。使い魔たちは轟音とともに弾け飛び、その爆風が霧葉の黒髪を乱した。

「なるほど。呪術迷彩を使っての、時間稼ぎと思わせてからの奇襲――」

しかし爆風の中から現れた那月はまったくの無傷。

使い魔の爆発の巻き添えを避けるために、わずかに後退しただけだ。爆風によろめく霧葉には、那月を追撃する余裕はない。

それでも、霧葉の表情には笑みが浮かんでいた。

わずかに後退した那月の足元に、眩い呪術文字が浮き上がる。

純白の砂浜が爆発したように盛り上がり、そこから現れたのは金属製の黒豹だ。那月の接近を感知して発動する、自律操作型の式神である。

術者である霧葉の意思とは無関係に、それらは死角から那月を襲う。

空間転移を封じられた那月に、その攻撃は絶対によけられない。黒豹たちの鋼鉄の牙が、魔女の小柄な肉体を引き裂くべく煌めいて、

「――と見せかけて、自分自身を囮にしての呪術罠か。対魔獣戦闘の専門家らしい戦い方だが、惜しかったな」

次の瞬間、砂浜に叩きつけられていたのは霧葉のほうだった。

ぐふっ、と霧葉が吐き出した息が、遅れて彼女の耳に聞こえてくる。

那月はやはり無傷のままだ。霧葉の罠が破られたわけではない。那月は最後まで式神たちに反応できなかった。霧葉の式神に反応したのは、那月の背後に現れた黄金の騎士像だ。

那月の〝守護者〟が霧葉の式神たちを握り潰し、拳圧だけで霧葉を吹き飛ばしたのだった。

「私に〝輪環王〟を使わせただけでも褒めてやろう、六刃神官」

砂まみれの霧葉を見下ろして、那月が無造作に言い放つ。赤点をかろうじて免れた生徒を褒めるような、あからさまにやる気のない口調だ。

「この私にここまでさせておいて無様に負けたら、許さなくてよ、姫柊雪菜！」

霧葉は屈辱に顔を歪めつつ、背後にいるはずの雪菜を振り返る。

そして彼女の姿を視界にとらえて、霧葉は言葉を失った。獅子王機関の剣巫が、銀色の槍をだらりと右手にぶら下げたまま、ぼんやりと立ち尽くしていたからだ。

霧葉が命懸けで稼いだ時間を使って、策を練ることも罠を仕掛けることなく、雪菜は、ただ放心したように無防備に立っている。

彼女の瞳は一切の感情をなくして、凪いだ湖の水面のように那月たちの姿を映していた。

美しい肌と艶やかな唇。常識外れに整いすぎた顔立ちが、異形の人外を想起させる。

「ちっ……」

雪菜の変化に気づいた那月が、初めて焦りの感情を浮かべた。

隙だらけで立っている雪菜を目がけて、弾丸のように銀鎖の雨をぶつけていく。

同時に数十本の鎖が、ありとあらゆる方向から撃ちこまれたのだ。

人間の反応速度で処理できる量を当に超えている。

しかし雪菜は無言のまま、そのすべてを回避した。最小限の動きでほとんどの鎖をすり抜け、銀色の槍の一閃で残りのすべてを撃ち落とす。

文字どおりの神業だ。

「神憑り……この状況で……!?」

雪菜の変貌の理由に気づいて、霧葉の全身が粟立った。

那月の圧倒的な戦闘力に対抗するため、雪菜が選んだのは神降ろしだ。強大な神霊を自らに憑依させることで、人間の限界を超えた力を手に入れたのだ。

剣巫は剣士であると同時に、優れた霊力を備えた巫女でもある。

だからといって神憑りは簡単に使える力ではない。

わずかでも制御をしくじれば巫女の人格は破壊され、二度と正気に戻れなくなる。あるいは神霊の力を暴走させて、周囲に凄まじい災厄を撒き散らすことになるだろう。

霧葉には、南宮那月が、そこまでのリスクを負ってまで倒すべき相手とは思えない。

ましてや那月との対立の理由が、第四真祖のため、ともなれば尚更だ。

しかし雪菜は、迷わずに神憑りを決断した。そんな彼女の覚悟に霧葉は舌を巻く。

「なんだ、これは……？」

雪菜の前に立ちはだかった那月が、驚愕に目を眇めていた。

空間制御の魔術が発動しない。実体化した使い魔たちの姿も消えていく。

那月の周囲を舞っているのは、花弁を連想させる白い結晶だ。それらは見る間に数を増して、視界を覆い尽くしていく。

「雪……？　いや……神格振動波の結晶か……！」

白い雪片の正体に気づいて、那月が呻いた。

雪菜が握り締めている銀色の槍が、眩い輝きを放っている。

神憑りによって流しこまれた膨大な霊力が、〝雪霞狼〟の神格振動波を結晶化させているのだ。その純白の結晶は那月の魔力を無効化し、魔術の発動を防いでいる。

そして〝雪霞狼〟を操っているということは、雪菜は、神憑りで得た霊力を、自分の意思で使いこなしているということでもある。彼女は自らの中に降ろした神霊を、完全に制御できているのだ。

「この神霊は……そうか……これが第四真祖の監視役に貴様が選ばれた理由か……」

舞い散る雪片に目を細めながら、那月は不敵に微笑んだ。

雪菜がゆっくりと槍を振り上げる。

感情をなくしていた彼女の瞳は、すでに普段の姿に戻っていた。人間離れして端整だった顔立ちも、年相応のあどけなさを取り戻している。

雪菜が視線を向けていたのは、那月の背後に屹立する黄金の騎士像だ。

騎士像から伸びる真紅の荊が、猛り狂う第四真祖の眷獣をつなぎ止めている。

その雷光の獅子と目を合わせて、雪菜はかすかに微笑んだ。

大丈夫、と雪菜の唇が言葉を紡ぐ。大丈夫、わたしたちの勝ちですよ、と――

「――〝雪霞狼〟！」

雪菜が振り下ろした銀色の槍が、巨大な閃光の刃と化して大気を裂く。

その閃光は黄金の騎士像を吹き飛ばし、真紅の荊をズタズタに引き裂いた。

自由を取り戻した雷光の獅子が、青白い稲妻を撒き散らして咆吼する。

天空まで伸びるその稲妻の柱は、凄まじい電波障害を巻き起こし、停電や機械の故障で人工島全域に数百億円の被害をもたらしたという――

7

「やれやれ……あの堅物を少し追い詰めすぎてしまったようだな」

白シャツにタイトスカートを穿いた大人版の那月が、軽く額を押さえてそう言った。

監獄結界の石牢の中だ。窓の外には、夕焼けのような真紅の空が広がっている。

時折その空に閃光が煌めき、遠雷のような響きが建物を震わせていた。

外の世界でなにが起きているのか、眷獣の感覚を通じて、すでに古城も理解している。

雪菜が解放した〝獅子の黄金（レグルス・アウルム）〟が暴走し、その魔力が、監獄結界にも影響を与えているのだった。

「優麻のときと同じだな」

眷獣の暴走に多少の責任を感じながら、古城は弱々しく笑って言う。

仙都木優麻は、かつて古城の眷獣の力を借りて、監獄結界を破ったことがある。

監獄結界の内部は那月の夢の世界であり、第四真祖の力でも脱出するのは不可能だ。しかし、監獄結界の外側は違う。膨大な魔力をぶつけることで、眠っている那月本体を叩き起こせば、夢の世界が消滅して監獄結界は現出する。

このまま外の世界で〝獅子の黄金（レグルス・アウルム）〟が暴れ続ければ、いずれ同じ現象が起きるだろう。もっとも、その

前に絃神島全土が廃墟になるという可能性もなくはない。

それを防ぐには、宿主である古城が監獄結界の外に出て、眷獣の暴走を止めるしかない。

つまり那月はどちらにしても、古城を解放しなければならないというわけだ。

「まあいいだろう。合格だ」

那月が、ふ、と微笑んで言った。古城は密かに胸を撫で下ろす。

監獄結界から抜け出すという目的はいちおう果たしたが、古城が自力で脱出したとはお世辞にも言えない状況だ。那月が敗北を認めてくれなければ、危うく振り出しに戻るところだった。

「俺たちを見逃してくれる……ってことでいいんだよな？」

「また結界を壊されて、阿夜たちに出てこられても面倒だからな。どこへなりとも行くがいい」

怖ず怖ずと念押しする古城を眺めて、那月は気怠く腕を組む。

ただでさえ目立つ彼女の胸の膨らみが、余計に強調されて古城は無意識に目を背けた。

そんな古城の反応を面白そうに眺めて、那月が不意に立ち上がる。

「だが、そうだな……貴様にはその前に特別に餞別をくれてやろう」

「な、那月ちゃん……？」

不自然に身体を密着させてくる那月に、古城が声を上擦らせた。

彼女の白シャツの襟元からは、本来あるはずのない胸の谷間がのぞいている。長い髪をわざとらしくかきあげて、ほっそりとした首筋を見せつけてくる那月。どう見ても、教え子を誘惑しようとしている、個人授業中の女教師というシチュエーションである。

体つきはしっかり成長しているくせに、幼かったころの那月の面影を残しているというのもタチが悪い。人形めいた美しい容貌でのぞきこまれて、古城はゴクリと唾を飲む。

那月がこんなふうに誘惑してくる理由に、心当たりがないわけではなかった。

餞別をくれてやる、と彼女は言ったのだ。

それはつまり、自分の血を吸え、という意味なのだろう、と古城は思う。

本土に渡れば、どんな危険が待ち受けているかわからないのだ。使える眷獣は一体でも多いほうがいい。ここで那月の血を吸えば、古城をいまだに宿主と認めていない新たな眷獣を掌握できる可能性は高かった。だがしかし、

「ちょ……ちょっと待った！　あんた、いちおう教育者だろ……！」

古城は那月を必死に制止する。

いくら成長しているとはいえ、本来の那月の肉体は推定年齢十一、二歳の少女のものなのだ。そんな彼女の血を吸う気にはなれない。なぜなら吸血衝動の引き金になるのは性欲だからだ。

ここで那月の誘惑に負けて彼女の血を吸ってしまったら、吸血鬼として大事ななにかをなくしてしまうような気がする。

「なんだ、こういうシチュエーションは趣味ではなかったか？　つまりバインバインの熟れごろ女教師よりも、本来の私の姿のほうが貴様の好みというわけか？」

「いや、好みとか好みじゃないとか、そういう問題じゃなくてだな！」

「まあいい、ほれ」

そう言って那月が胸の谷間から取り出したのは、丸めたコピー用紙の束だった。

どこから取り出してるんだよ、と困惑しながら、古城はそれを受け取って、

「あの……なんなんですかね、これは」

「餞別をやると言ったはずだがな？　貴様、冬休みの残りの補習をサボるつもりなのだろう？　なので代わりに課題を用意してやった。感謝するがいい。提出期限は次の授業初日だ」

ふふん、と那月はいつもの傲岸な表情で説明する。

「ああ……そういうアレっすか……」

古城は自分でもよくわからない失望と落胆を覚えて、力尽きたようにうなだれた。

どうやら那月は最初から、古城をからかっていただけらしい。賭けに負けた腹いせなのかもしれない。なんにせよ那月のやりそうなことだった。

「なんだ？　私の血を吸わせてもらえるとでも思ったか、色餓鬼め」

落ちこんでいる古城を見下ろして、那月が愉しげに罵倒してくる。

そして彼女はいつものように尊大に胸を反らして、冷淡に笑い、

「まあ、無事に卒業できたら考えてやってもいいぞ」

「そりゃどうも」

今さら本気にする気にもなれずに、古城は那月の言葉をぞんざいに受け流した。

その直後、古城の視界がぐらりと揺れる。空間転移の徴候だ。

ふと気づけば白シャツ女教師風の那月は姿を消して、本来の、幼い姿の那月が古城の前に立っていた。彼女が古城を、監獄結界から連れ出そうとしているのだ。

「せいぜい冬休み明けの授業には遅刻しないようにするんだな」

囁(ささや)くような静かな声で那月が告げてくる。いつになく優しいその声は、必ず帰ってこい、と古城に命じているようにも感じられた。

「那月ちゃん……」

感謝の言葉を伝えようと、古城は思わず彼女の名前を呼ぶ。

そんな古城の顔面を、殴られたような強烈な痛みが襲(おそ)ってきた。

「教師をちゃん付けで呼ぶな。馬鹿者(ばかもの)」

憤(いきどお)りのこもった那月の声が、どこか遠くから聞こえてくる。

そして古城は彼女の夢から醒(さ)める――

終章
outro

白砂を敷き詰めた人工の海岸に、古城は背中から叩きつけられた。

金属と樹脂を剥き出しにした岸壁。統一された規格による人工的な街並み。水平線まで続く空は広く青い。見慣れた人工島の景色である。

しかし監獄結界から戻って来たことに安堵を覚える暇もなく、古城の視界を眩い閃光が灼いた。稲妻をまとった雷光の獅子が、古城を目がけて飛びかかってきたのだ。

「どわあああああああぁぁっ！」

凄まじい熱量に死の恐怖を実感しながら、古城は慌てて〝獅子の黄金(レグルス・アウルム)〟の実体化を解除した。

「し、死ぬかと思った……」

帰還した宿主にじゃれつこうとしただけなのかもしれないが、相手は第四真祖の眷獣だ。うっかり爪がかすめただけでも、古城の肉体など一瞬で沸騰する。

肉体が完全に蒸発しても、ちゃんと復活できるのだろうか——と答えを知りたくない疑問を覚えつつ、古城は力無く上体を起こした。全身にまとわりつく砂埃を払いつつ、膝に手を当てて立ち上がる。そんな古城に気づいて駆け寄ってきたのは、同じく砂だらけの雪菜だった。

「先輩！　監獄結界から脱出できたんですか!?」

「まあ、なんとかな……姫柊がどうにかしてくれたんだろ」

ホッとしたような表情の雪菜を見て、古城は居心地悪そうに頭をかく。

古城は結局、監獄結界に囚われてなにもできないままだった。無事に脱出できたのは、九分九厘まで雪菜の力である。それは傷だらけの彼女の姿を見れば明らかだ。

「いえ。南宮先生はやっぱり手加減してくれていたんだと思います。わたしは最後まで先生に歯が立ちませんでした」

雪菜は、そう言って無念そうに首を振る。

古城は、彼女の髪についた砂をそっと払い落としてやりながら、

「そうでもないだろ。那月ちゃんも合格だって言ってたぜ」

「……監獄結界にいる間の記憶が残ってるんですか？」

雪菜が驚いたように目を瞬く。

人々が昨夜見た夢の多くを目覚めたときに忘れてしまうのと同様に、那月の夢の世界である監獄結界から記憶を持ち帰るのは、ひどく難しい。雪菜はそのことを知っているのだ。

「ああ。姫柊には、あとで全部話すよ」

遠くを見るような表情を浮かべて、古城は言った。

「はい」

当然です、というふうに勢いよくうなずいた雪菜の表情が、古城を見て不意に硬く強張った。

彼女の瞳から、感情という感情が急激に抜け落ちていく気配がある。

同時に古城の鼻の奥に、つん、と金臭い感覚が広がった。生温かな液体が、古城の口元へとこぼれ落ちていく。鼻血だ。

「……先輩、監獄結界の中で南宮先生といったいなにを……？」

体温をまったく感じさせない声で、雪菜が静かに訊いてきた。

古城は息苦しさを覚えたまま慌てて首を振り、

「ま、待て、違う！　これは那月ちゃんにからかわれただけだ！」

「まさか、あの南宮先生に対して……そんな……吸血衝動を……！」

雪菜が激しく動揺したように独りごちている。銀色の槍を握る指先に、妙に力が入っているのが恐い。

「ち、違う！　夢の中の那月ちゃんは、ちゃんと女教師っぽくというか年相応に成長してて、胸も盛ってて、あ、いや、だからどうしたということはないんだが……」

「女教師っぽく……ですか。胸もですか。そうですか……」

冷え冷えとした口調で言いつつも、雪菜は、鼻血で汚れた古城の口元をいちおう拭ってくれる。ギスギスしているのか、いちゃついているのか、よくわからない光景だ。

そんな古城たちの足元から聞こえてきてきたのは、わざとらしい咳払いの音だった。

砂浜で膝を抱えて座ったままの霧葉が、拗ねたような表情で古城たちを見上げている。

「いい雰囲気のところ悪いのだけど、なにか忘れているのではなくて？」

「ああ、悪い。今回は妃崎にも世話になっちまったな……」

雪菜に負けず劣らず傷ついている霧葉に気づいて、古城は神妙に頭を下げた。

霧葉にはこのあと、ビジネスジェット乗り場まで案内してもらわなければならないのだ。こんなところで彼女の機嫌を損ねるのはまずい。

そんな古城の弱みにつけこむように、霧葉は悪党っぽく微笑んで、

「そう思っているのなら、手を貸してもらえて？　脚を痛めてしまったの。運んでもらえると嬉しいのだけど？」
「まあ、いいけど。それくらいならべつに」
　古城は渋々とうなずいて、言われるままに霧葉を抱き上げる。
　いわゆるお姫様抱っこ的なその姿勢に、雪菜が不服げな表情を浮かべていた。それでも彼女なりに霧葉に恩義を感じているのか、グッと文句の言葉を呑みこむ雪菜。
　そんな雪菜の神経を逆撫でするように、霧葉は古城の首筋に手を回し、
「どさくさにまぎれて少しくらい変なところに触ってもよくてよ。不可抗力ですものね」
「そういうことを言われると運びづらいだろ！」
　冗談めかした霧葉の言葉に、思わず声を荒らげる古城。霧葉はその古城の耳元に唇を寄せて、
「ちなみに私、呪術的な理由で今日は下着をつけていないのだけど……」
「え!?」
　古城は思わず足を止めて霧葉を凝視する。
　つけてない。それは穿いてもいないということか。そんな馬鹿な。いやしかし呪術的な理由では仕方ないのか――指先に伝わってくる感触から、霧葉の言葉の真偽を判定しようと古城は意識を集中し、そのせいで逆に霧葉の体温や身体の柔らかさを意識してしまう。結果、二秒ほど完全に硬直してしまった古城を、霧葉は真顔で見返して、
「嘘よ」
「嘘なのかよ!?」
「先輩……」
　ひどく傷ついた表情で叫ぶ古城を、雪菜が残念そうに見つめて溜息をついた。
　霧葉はようやく少し満足したようにクスクスと笑って、

「――っ!?」

　その霧葉の表情が唐突に恐怖に歪んだ。
「……妃崎？」
　彼女の異変に気づいて、古城が訊く。しかしその言葉は声にならない。潮風の音も、海鳥の声も聞こえない。完全な静寂が古城たちを包みこむ。

それは一瞬の出来事だった。スイッチが切り替わったかのように、世界に音が戻ってくる。

「なんだ……今のは……!?」

突然見知らぬ場所に連れてこられたような違和感を覚えて、古城が苦しげに呻いた。

ページを破り取られた本のように、意識の連続性が途切れている。既視感とも未視感とも違う。コマ落ちした映画を観ているような不快感に近い。

「〝静寂破り〟……！」

霧葉が歪んだ声を出す。暗闇に怯える子どものように、霧葉の全身は震えていた。ぶつかり合う彼女の奥歯がガチガチと音を立てている。

「おい、妃崎!?」

驚いて叫ぶ古城の視界に、見慣れない人影が割りこんでくる。

砂浜から道路へと続く階段の途中に、一人の女性が立っていた。

ヴェールのような薄絹に覆われた彼女の顔は見えない。しかし明らかにまだ若い。おそらく古城たちとも、さほど変わらない年齢だ。

彼女が身につけているのは、金箔と無数の宝石をちりばめた絢爛豪華な巫女装束。正月とはいえ、そんな衣装で出歩いていれば、人目を惹いて仕方がないはずだ。

なのに間近に現れるまで、古城たちは彼女の存在にすら気づくことができなかった。

「あんた、前にどこかで会ったか？　ていうか、いったいどこから――」

なぜか彼女を知っている気がして、古城が訊いた。

しかし巫女装束の女は答えない。

まるで独り言のように、穏やかな声で呟くだけだ。

「〝空隙の魔女〟も存外に甘いようですね。いえ……それが彼女の本質でしょうか」

「おまえ……っ!?」

古城が目つきを険しくして唸る。南宮那月の異名を知っている彼女が、古城たちとは無関係の一般人とは思えない。

「先輩、下がってください……！」

雪菜が銀色の槍を抜いて身構えた。

巫女装束の女の唐突な出現が、魔術的な手段によるものならば、空間制御か、それに類する魔術が

使われた可能性が高い。だとすれば彼女は、南宮那月と同等の強敵である可能性が高かった。

あらゆる魔術的な奇襲を想定して、雪菜は油断なく女を睨む。

しかし女が、魔術を行使することはなかった。

彼女はただ厳かな声で、雪菜に向かって命じただけだ。

「控えなさい、姫柊雪菜――」

その瞬間、雪菜の全身が電気に打たれたように震えた。

女に向けた槍の穂先が、驚愕と困惑で大きく揺らぐ。

「この声……あなたは、まさか……！」

立ち竦む雪菜の問いかけを無視して、女がゆっくりと視線を巡らせた。

薄絹に隠された唇を、かすかに緩めて笑い含みに告げてくる。

「初めまして、第四真祖。当代の獅子王機関三聖が一人、閑古詠と申します」

「……獅子王機関……三聖!?」

女がまとう威厳の正体に気づいて、古城の警戒レベルが跳ね上がる。

古城が絃神島を出ようとしているこのタイミングで、雪菜以外の獅子王機関が現れる理由はひとつしかない。彼女は、古城の敵としてこの場に現れたのだ。

「恐縮ですが、獅子王機関の総意として、御身をこの地に封じるために参りました」

巫女装束の女が静かに告げた。

「先輩！　危険です、離れて――」

「逃げなさい、暁古城！」

雪菜と霧葉が同時に叫んだ。

銀色の槍を地面に突き立てて、魔力無効化の防御結界を張り巡らす雪菜。

霧葉も古城の腕の中から飛び出して、鉛色の双叉槍を展開する。

世界を再び沈黙が支配したのは、その直後のことだった。

見えない鉄槌に殴られたように、霧葉の身体が吹き飛んだ。

純白の砂を撒き散らして、雪菜が地面に倒れ伏す。

そして古城もコンクリートの堤防に、半ばのめりこむように叩きつけられていた。

「なっ……」

ごぼっ、と大量の血塊が、古城の喉からこぼれ落ちた。

それと同時に、世界に音が戻ってくる。

古城にはなにが起きているのかわからない。ただひとつわかったことは、それが通常の魔術とは、まったく異質な攻撃だということだ。那月の空間制御とも違う。その証拠に、〝静寂破り〟と呼ばれた少女は一歩も動いてすらいない。

時間を止められたわけでも、コマ送りにされたわけでもない。その逆だ。

それはまるで、

彼女の思いどおりになる、存在しないはずの時間を、無理やり挟みこまれたような――

雑音。

「どうぞお許しを――」

いつの間にか古城の前に移動していた〝静寂破り(ペーパーノイズ)〟の右手には、銀色の槍が握(にぎ)られていた。

寸前まで雪菜が握(にぎ)っていたはずの、獅子王機関の秘奥(ひおう)兵器。真祖殺しの破魔(はま)の槍――〝静寂破り(ペーパーノイズ)〟の手の中で〝雪霞狼(せつかろう)〟が、眩(まばゆ)い純白の光を放つ。

そして彼女はためらうこともなく、その槍を音もなく振り下ろした。

真夏のような午後の陽射(ひざ)しが、絃神島(いとがみじま)に静かに降りそそいでいる――

あとがき

またしても前巻の刊行から少し間が空いてしまいました。お久しぶりです。なにはともあれ、そんなわけで『ストライク・ザ・ブラッド11』をお届けしております。

今回は逃亡編ということで、ついに絃神島からの脱出がテーマとなりました。

これまでの古城は〝魔族特区〟という、ある意味、安全な檻の中で守られていたわけですが、そこから外へと足を踏み出すことで、彼の周囲の環境は否応なく激変することになります。

かつて味方だったはずの人々が突然敵に回ったり、あるいは敵だったはずの人々と共闘したり。結果的に〝魔族特区〟の特殊性が浮き彫りになって、新たなストライク・ザ・ブラッドの世界をお見せできたらいいな、と策略を巡らせてみたりとか。

この先、古城たちが直面する様々な困難の象徴として、まずは思いがけない人物に敵として立ちはだかってもらいました……というのは建前で、実際は、やたら強すぎてこれまであまり出番がなかった那月ちゃんを活躍させられたのが愉しかったです。浅葱の家庭環境も描けたし、霧葉も無事に再登場を果たしたし。この先、本土で古城たちを待ち受けているモノについては、次巻以降あらためて描かれることになると思います。ご期待あれ。

本書が店頭に並ぶころには、アニメ『ストライク・ザ・ブラッド』のブルーレイ及びDVD最終巻が発売になっていると思います。こちらには『ストライク・ザ・ブラッド・アペンド』というタイトルで、各巻ごとに書き下ろしの特典小説を同梱していただきました。

一巻から四巻までは『続・聖者の右腕／人形師の遺産』篇ということで文庫一巻の後日談を、そして五巻から八巻には『彩昂祭の昼と夜』篇ということで、学園祭の話を収録しております。『ストライク・ザ・ブラッド』関連では、意外にこれまで短篇を執筆する機会がなかったので、個人的に楽しく書かせてもらいました。なんだかんだでトータル文庫二冊近い分量を頑張って書き下ろしてますので、機会があればぜひぜひ手に取ってもらえたら幸いです。

アニメ関係の作業がどうにか一息ついたので、これから先は再び文庫の刊行ペースを上げていけたらいいなあと思っております。どうぞ引き続きよろしくお願いいたします。

イラストを担当してくださったマニャ子さま、そして『月刊コミック電撃大王』誌上でコミカライズを担当してく

ださっているTATE先生、いつも本当にありがとうございます。

そして本書の制作・流通に関(かか)わってくださったすべての皆様にも心からお礼を申し上げます。

もちろん、この本を読んでくださった皆様にも精一杯の感謝を。

それではどうか、また次巻でお目にかかれますように。

三雲岳斗(みくもがくと)

三雲岳斗（みくもがくと）

大分県出身。主に小説などを書いている人。スケジュールの過密さに何度か心の靱帯が切れそうになりましたが、やはり好きな小説を書くのは楽しいし、読んでくれる人がいるのは幸せなことだと思います。あと、写真とは全然関係ありませんが実は緑茶派です。

イラスト／マニャ子（こ）

佐賀県出身、神奈川県在住。フリーのイラスト、原画描きです。最近はソーシャルゲームのイラストを沢山描いてます。…いつも同じプロフィールを使っていたら、謎の着る毛布愛好家みたいになってました…。因みに今も着ています。

本書に対するご意見、ご感想をお寄せください。

電撃文庫公式ホームページ 読者アンケートフォーム

http://dengekibunko.dengeki.com/

※メニューの「読者アンケート」よりお進みください。

ファンレターあて先

〒102-8584　東京都千代田区富士見1-8-19

アスキー・メディアワークス電撃文庫編集部

「三雲岳斗先生」係

「マニャ子先生」係

本書は書き下ろしです。

電撃文庫

ストライク・ザ・ブラッド11
逃亡の第四真祖

三雲岳斗

発　行　　2014年9月25日

発行者　　塚田正晃
発行所　　株式会社KADOKAWA
〒102-8177　東京都千代田区富士見2-13-3
03-3238-8745（営業）
http://www.kadokawa.co.jp/

プロデュース　アスキー・メディアワークス
〒102-8584　東京都千代田区富士見1-8-19
03-5216-8399（編集）
http://dengekibunko.dengeki.com/

本書（電子版）に掲載されているコンテンツ（ソフトウェア／プログラム／データ／情報を含む）の著作権およびその他の権利は、すべて株式会社KADOKAWAおよび正当な権利を有する第三者に帰属しています。
法律の定めがある場合または権利者の明示的な承諾がある場合を除き、これらのコンテンツを複製・転載、改変・編集、翻案・翻訳、放送・出版、公衆送信（送信可能化を含む）・再配信、販売・頒布、貸与等に使用することはできません。

(C)2014 GAKUTO MIKUMO

※2014年9月10日発行の電撃文庫『ストライク・ザ・ブラッド11 逃亡の第四真祖』初版に基づき制作

BOOK☆WALKER